

---

# 限りなく澄んだ空に向かって

芳井暇人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

限りなく澄んだ空に向かって

### 【Nコード】

N0445D

### 【作者名】

芳井暇人

### 【あらすじ】

大陸大戦も開始から2年を過ぎた頃・・・連合国側の盟主スクラ  
ン共和国のパイロット、アルベル・フォンクは、大陸でも屈指の  
撃墜王になっていた。彼は他者の追隨を許さない操縦技術と射撃技  
術を持ち、彼の部下たちもそれぞれ、エース級の腕を持つパイロッ  
ト達だった。しかし、そんな、彼らの前に、枢軸国側の盟主、ベ  
ゼル帝国の撃墜王、フランツ・ブランドが現れる・・・

## 赤の章 1

彼の父親が生まれた頃は、まだ、人間が空を飛べるとは、ほとんどの人が考えていなかっただろう。実際、未だに、彼自身が空を飛ぶ事に違和感を感じる時もある。

だが、眼前にあるプロペラとエンジンの轟音。気流にぶつかって大きく揺れる機体。それから、何より、愛機を駆ってさえいれば、どこまでも行けると思える爽快感が彼は、大好きだった。

「隊長、フォンク隊長、起きて下さい」

「……お？朝か？」

「いえ、昼です。ここは寝る場所ではありません」

アルベール・フォンクは操縦桿の前に突っ伏していた上体を起こすと、大きな欠伸をして、睡眠を妨げる者を凝視した。が、その後あたりを見回し、赤い癖のある髪の毛をかき回しながら、照れ笑いを浮かべた。

「いやあ、すまない、機体の点検をしていたら、つい、すっかり寝てしまった」

「つい、すっかり、じゃないですよ。敵が攻めてきたらどうするんですか？整備士長がプンプンしてますよ。英雄だかエースだか知らんが、常識がない、って。早くどいてください、早くどかないと、その真つ赤な機体が普通の色に戻されますよ？」

「ああ、ダメだ、色はこのままにしておいてくれ。いや、しかし、そうだな・・分かった、エドモン。せつかくの滑走路に飛行機があるんだ。幸いな事に天気が良いし。これは偵察日和だな？」

そう言つと、アルベール・フォンクは、コックピットの外に右手をだして、「バン」っと、一度だけ機体を叩いた。この表情は、満面に笑みを浮かべており、その顔は、隣国のベーゼル帝国から「赤い悪魔」と恐れられる「撃墜王」だとは、到底、思えない。

「お、それも良いですね。どうせなら、ノエルも誘ってお供しますよ」

エドモンも、つられて笑いながら、軽口をたたく。

当然、彼らが偵察に行くとするれば、バーゼル帝国との国境周辺の索敵であり、会敵の可能性もあるのだが、彼らに、その事に対する恐れなどは、微塵も無い。

スクラン共和国の「フォンク空戦隊」といえば、その撃墜数は大陸でも1、2を争う程の集団なのだ。フォンクの部下のエドモン、ノエル両名からして、すでに撃墜数が五十機を越えている。フォンクなどは、「百機から先は数えていない」と豪語するのだが、だれもそれを疑う者はいない。

「ところで、整備の方は終わっているんですか？」

とはいえ、整備不良の戦闘機ほど使い物にならないものは無い。エドモンは、確認の為に聞くのを忘れなかった。何しろ、彼の上司は、燃料を入れ忘れて離陸しようとした前科すらあるのだから。

「ああ、あれ以来、俺が寝てる間に、整備士長のオヤジが整備を済ませてくれるようになってな。まあ、整備の腕は、一流だな」

そう言つと、アルベール・フォンクはすぐにエンジンを始動させる。一瞬だけ、黒煙をあたりに撒き散らし、プロペラが勢い良く回ります。

「隊長！司令官にはなんと！？」

もはや、エンジンの轟音で、通常の会話は聞き取れないため、エドモンは、大声を張り上げた。

「だから、偵察だ！空で待ってる！！」

「了解！五分で上がります！」

アルベール・フォンクの機体「真っ赤なニューローラン」が滑走路を滑り、雲ひとつ無い、青空に舞い上がる。整備士や、基地の陸戦隊の隊員達は、まず、ため息をつき、次に、帽子を振って見送るのだった。

不思議なことに、この基地では、彼や、彼の戦隊の行動を苦々し

く思っている者など、実のところ、一人もないのだ。実際、エドモンが、ノエルに「出るぞ」と声をかけたとき、整備兵達とポーカ―をやっていたのだが、ノエルが「悪いな、借金は帰ったら払うかな！」という、彼らは、笑って、「整備は終わってる、敵、一機に付き五十フランでいいぞ！」といって、飛行気乗り達の我俥を気にも留めていない。むしろ、彼らが飛び立った後で、「今日は何機落としてくるか？」といった賭けをやっている位なのだ。さすがに、基地司令官は「これは戦争なのだ。遊び半分では困る」とは言うが、それでも、この基地が、フォンク空戦隊のおかげで、「スクラン共和国最高の武勲を挙げる軍事基地の司令官」という栄誉が与えられているため、表立って文句を付ける事も無い。

全く持って、彼らは、その意味では恵まれた環境にいたのだった。

## 赤の章 2

大陸大戦も、その名で呼ばれるようになって既に二年が経過していた。それ以前の小競り合いや、小さな紛争等も合わせれば、この大陸で戦争をしていなかった時代など、在るのだろうか？それすらも分からないほどに、この大陸は、血まみれの歴史を築いているのだった。

そんな中、アルベール・フォンクは、スクラン共和国の片田舎に、空想好きの農家の次男として生を受けた。彼の言い方を借りるならば「生まれたくて、こんな貧乏な家に生まれた訳じゃない」という事になるが、とにかく、彼の生家は、家族全員のその日のパンにも困る程、困窮していた。

彼が、十歳になる頃、人類初の「飛行機」というものが誕生する。そのことを知った彼の父親が、是非とも見たい、と言いだし、彼は父親に連れられて、「人類初の飛行機」というものを見ることになる。

その飛行機の姿は、お世辞でも褒める気にもならない程、無様な出来であったが、その無様な物体が、ふっと、空中に浮いた、そのとき、彼は全身に立つ鳥肌と熱くなる目頭で、自らのその後に進むべき道を、感じとる事が出来たのだった。

それから十五年の歳月が流れた……

左手、下方に見える山々と眼下に広がる平原は、新緑の輝きに満ち、前方には僅かに厚くなりかけた雲が、この地方の短い夏の訪れを告げている。自機の遙か上空にある太陽は、今はまだ直上にあるが、もう数時間もすれば、自らの進行方向に落ちて来るだろう。

さすがのアルベール・フォンクと言えども「あまり長時間の偵察行動は慎むとしようか」と、思う程度には、太陽を背に向かってく

る敵に対する自身の不利は、考えるのであった。

左後方にノエル。右後方にエドモン。

アルベール・フォンクは、ちらりと左右の後方に目をやり、彼らの姿を確認し、操縦桿を一度、手前に強く引く。上昇だ。

ノエル、エドモン、両名も、さすがにエースの名に恥じないパイロットだ。高度四千メートルからの急上昇にも、いとも簡単についてゆく。編隊行動が僅かでもぶれるという事も無かった。

高度五千メートル。地上の偵察が目的ならば、高度三千メートルでも高いだろう。しかし、今は戦時。何処にベールゼル帝国の戦闘機が飛んでいるとも知れないのだ。完全な制空権が無い以上、相手の戦闘機よりも高高度に位置することは、それだけで、有利になると言えた。

高度五千メートルに達して、数分が過ぎた時だった。

右下方に、黒い戦闘機を先頭に、暗緑色の戦闘機が5機、確認できた。無論、最初に目視確認をしたのは、エドモンだ。

エドモン機はフォンク機の横に並ぶと、手信号で、敵機存在を教える。そのまま、それはノエルにも伝わり、部隊の意思は決定される。

まずは、挨拶だ。

アルベール・フォンクはすばやく距離と速度を計算すると、すぐに、上昇しつつ敵機の方へ向けて飛んでゆく。太陽を背に敵機のさらに上空から、急降下で攻撃を仕掛けるつもりだった。

「なに、単に数の計算さ」

そのときのフォンクの考えはそうだった。

六機の敵に三機で急降下攻撃を仕掛ける。俺たちに失敗はない。敵は三機を失う。後は三対三の空中戦だ、負ける訳がない。

確かに、今までの空戦ならば、それで済んだのだ。

あの、黒い機体を見るまで、ならば……

### 赤の章 3

敵機の編隊は、黒い機体を先頭に、後ろに2機、その後ろに3機と、三角形を描く形で布陣している。高度は、およそ4000メートル。

アルベール・フォンクは、自身の機体を手足の様に操り、高度5500メートルまで上げる。無論、ノエル・バジエ、エドモン・バルビエの両名も同じく、隊長機に続く。

「頃合だ」

アルベール・フォンクは、声には出さない。ただ、そう思うだけだ。それも、0.1秒以下の事、その刹那、操縦桿を前に倒し、高度を一気に下げる。同時に、全方位を見回し、さらに増援の可能性が無いかも探る。この時、いつもの陽気なアルベール・フォンクはそこにはいない。一人の天才的な戦闘機パイロットがいるだけだ。

狙う標的は決まっている。「俺は、後方の中央」「エドモンが後方、右」「ノエルが後方、左」。

何故、後方から狙うか？理由は、簡単だ。前衛の敵機を撃墜した場合、自機の上昇が間に合わず、後方から飛来する敵機に激突しては、自らの墜落も免れないのだ。とはいえ、まず、前方の敵を叩き、後続にその破片を当てる、ということを目指した作戦を立てる事も出来るが、それにはリスクが高いし、そこまで切迫した状況では無いとの判断からだ。

距離が、縮まる。高度5000メートル。4500メートル。4300メートル。

まず、真紅の機体から、7.7ミリの弾丸が射出され、暗緑色の機体に吸い込まれてゆく。続いて、後続の2機の機体からも、同じように弾丸が放たれた。多少のブレは在るものの、やはり暗緑色の機体に吸い込まれてゆく。

アルベール・フォンクが狙った中央の機体は、すぐさまエンジン



から火を噴き、右翼にも火災が発生し、錐揉み状態で落下してゆく。もはや、パイロットの生存の可能性は無さそうだ。後の2機は、着弾が浅かったらしく、それぞれ、煙を上げながらも、徐々に高度は下げてゆく。戦闘不能だが、不時着出来れば、パイロットの助かる見込みはある。

だが、そんな事にかまっている余裕など無い。敵とて、この奇襲に恐れ慄いて即座に退散と言うわけにはいかないのだ。

アルベール・フォンクが、また、一気に上昇をかける。そのまま宙返りをして、今度は、敵機の背後に出て、格闘戦に備える為だ。そして、後続の2機も、それぞれ一端上昇し、それぞれの標的に対して、格闘戦に備える。ここからは、編隊行動など出来ない。各人の技量と、戦闘機の性能が勝敗を決するのだ。

「黒い隊長機を狙う」とアルベール・フォンクは、最初から決めていた。そして、その決意は、何も言わずとも部下たちには伝わっていた。

アルベール・フォンクは、宙返りが終わると、すぐさま黒い機体の後方につけた。

「三枚羽？ベーゼルの新型か？新型なら、新型らしい性能でも見せてもらおうか！」

機銃の照準を黒い機体に合わせる。

まだだ、まだ、遠い。まだ、当たらない距離だ。そう考え、加速を得るために、パワーペダルを踏み込んだ。

その瞬間、黒い三枚羽の機体が、蝶の舞うように、宙返りを決めた。

アルベール・フォンクは、その瞬間、自らの頭上を通り過ぎる直前に、敵のパイロットを見た。黄金に輝く長い髪が、飛行帽の外にこぼれて、まぶしく見える。目と目が合った気さえた。

「ちつ、俺も焼きが回ったか？」

そんな毒づきも、言葉にはならない。後ろを取られたのだ。距離も存外に近い、きつと、あの三枚羽の旋回性能はこちらの戦闘機よ

り上なのだろう。すぐに、後方から銃撃音が聞こえた。操縦間を下に倒し、下降すると、弾丸は、フォンクの真紅の機体の上方すれすれを通り過ぎて行く。そのまま蛇行して、敵機に射線をとらせない様にしつつ、周囲の状況を確認する。ノエル、エドモン、共に苦戦しているようだ。急上昇、旋回を敵、見方共に多用している。あのままでは燃料の消費も多いだろう。

「助けなければ危ない」

フォンクはそう思っている、自機の後ろに付いた三枚羽をどうする事も出来無いのだ。

基地に帰還出来るだけの燃料を残し、エンジンを全開にして戦える時間は、もう、1時間も無いだろう。

そう考えてしまった時、空の上では無敵を誇っていたはずのアルベール・フォンクの背中にも冷たい汗が流れた。だが、その褐色の瞳に宿る意思の炎は、以前にも増して、燃え盛るのだった。

## 赤の章 4

エドモン・バルビエは、共和国陸軍飛行学校を3年前に主席で卒業し、当時、各地の紛争などで既に勇名を馳せていたアルベル・フォンク飛行小隊に入った。もともと、当時はまだ、彼の名は隊名にはされておらず、陸軍航空団第2空戦隊、第1中隊、第2小隊と言うのが正式名称ではあったのだが。

そして、当時から現在に至るまで、エドモン・バルビエは、今ほどの緊迫した状況に立たされた事は、唯の一度とて無かった。つまりは、今までは彼に戦慄を覚えさせるだけのパイロットは存在せず、仮に存在していたとしても、その戦慄をはるかに上回る信頼感を持った真紅の隊長機が常に身近に在ったのである。

今、エドモン・バルビエは、上昇しつつ右に旋回している。再度、敵機の後方に自機をつける為だ。

「うるさい三枚羽め」

エドモンは、前後を確認しつつ毒づく。同時に周囲と、自機に見える範囲で見渡すと、見える範囲だけでも損傷が酷い。これでは、もう過酷な格闘戦は、10分と持たないだろう。だが、同時に、敵機にも損傷が確認出来た。優劣は、つけ難い所だ。

旋回しつつ、至近で敵機の右側胴部を見ると、深緑色の機体に、斜めに入った白線が4本見える。

「たしか、ベールゼル帝国のEース認定は10機以上だったはず。10機撃墜で白線1本だから、40機以上か」

そうして、状況確認をしてみると、ノエルの戦っている三枚羽も白線が3本入っている。

「だとすると、フォンク隊長の相手にしている黒い奴は何だったんだ？」

旋回を終え、敵機の後ろに何とか出ることが出来たエドモンは、機銃を撃つ。当たらなくても良い。旋回性能が劣る分、少しでも機

体を軽くしたかったのだ。エドモン自身、小柄な部類に入るので、他の二人程には敵機の旋回性能に悩まされてはいなかったのだが、もう少し軽くなれば、旋回性能も五分に近くなると考えての事だ。そして、エドモンも「性能が五分なら、この程度の敵には負けない」と、考えられる程のエースパイロットなのである。

ノエル・アジエは、アルベール・フォンクと同年の25歳で、陸軍工兵隊上がりのパイロットだ。だが、アルベール・フォンクとノエル・アジエが異なるのは、フォンクは、まがりなりにも士官学校出身であることに對し、ノエルは中学校卒業後に軍隊に入った、一平卒上がりのたたき上げであること。それでも彼は、飛行機に憧れを抱き、工兵隊に在籍しながら飛行学校の試験を受け、見事に合格し、18歳と5ヶ月の時に晴れて、陸軍飛行学校所属の飛行曹長になったのだ。以来、順調に武勲を立て、昇進を重ね、一年前には、ついに中尉になったのだ。

ただ、幸か不幸か、丁度、同じ時に、さらに大きな武勲を立てていたアルベール・フォンクは少佐になり、本人は全く望んではない事ではあったが、自らの名を冠した空戦隊を編成する羽目に陥ってしまったのである。本来、空を飛ぶ事と空戦以外には興味の無い彼のこと、面倒で仕方が無かったはずのその仕事の中で、唯一の救いは「幹部の隊員は選べる」という事であったのである。「その権利だけは最大限行使してやろう」と、不純な決意を胸に秘めてアルベール・フォンクは、飛行学校時代の旧知であった彼に白羽の矢を立て、自らの直属として招いたのである。

そして今、そのノエルもまた、自機の所々に被弾していた。現在のところ、6対4で負けているだろうか。しかし、彼は、エドモンとは違う発想で格闘戦を展開していた。

「敵を油断させて、弾丸と燃料を使い切らせる」という発想だ。宙返りなど、あまりアクロバットの戦い方をせず、あえて、敵機の後ろに出ようとせず、敵機より僅かに下、あるいは上を飛び、

蛇行する。敵が焦れて、他の味方機の救援に行く素振りを見せると、旋回して後方を取り攻撃するのだ。「手堅い闘い方」と言えば聞こえは良いが、アルベール・フォンクなどは、「嫌みったらしい闘い方だな!」と、右眉を吊り上げて非難する戦い方だ。とは言え、この闘い方は、アルベール・フォンクとの模擬戦でも、5回に1回は勝利することが出来る闘い方なので、このように実力者相手の場合は有効なのであった。

「まったく、やってられんな、これじゃ整備班に締め上げられちゃうよ!」

愛機についた弾痕を僅かに確認しつつ、ノエルはぼやいた。そのぼやきとは裏腹に、彼の口の中は乾燥している、焦りと憔悴の為だ。それも仕方が無い。今、この時は、たった一つのミスがあるだけで機体と生命を同時に失う事になるのだから。

一方、アルベール・フォンクの方は、簡単に言えば膠着状態にあった。一方が宙返りで後方に付けば、もう一方は旋回してさらに後方へ食らい付く。その繰り返しだが、幾度と無く続けられていた。

そんな中、アルベール・フォンクは一つ、気が付いた事があった。「確かに、旋回性能は向こうの方が上だが、加速性能、上昇性能は僅かだがこちらが上だ」と言うことだ。だからと言って、このまま尻尾を巻いて逃げ帰るのは性に合わない。

「さて、どうするか……?」

そう考えた刹那。

アルベール・フォンクは、油断した。僅かに回避行動が遅れたのだ。左翼に弾丸が数発命中した。飛行に支障が無いとは言え、これではもはや、急上昇や急旋回に幾度も耐える事は出来ないだろう。

「ちっ……」

腹を決めるしか無さそうだ。「勝利か死か」。元々、戦闘機乗りになると決めた時から、自分はそう決めていた。幸い勝てる手段はまだ、ある。だがそれも、これ以上被弾すれば、その手段すら失い

かねない。

「だが、それすらしのがれたら？」

簡単な事だ。一人の撃墜王が、消えてなくなるだけ。いや、一人の人間が死ぬだけだ。

「俺の消していった命の数に比べれば、何のことも無い」

背後に付けた黒い三枚羽は、相変わらず、ピタリと付いてくる。射線が定まると決まって撃ってくる。

「全く、良い腕をしているよ」

アルベール・フォンクはペダルを最大限に踏み込んだ。エンジンの回転数も同時に最高になる。さらに操縦桿を手前に引き、一気に上昇をする。

50、100、150、200、250メートル。そこで、エンジンを切り、減速する。この手は、失敗すれば後は無い。滑空しているだけの戦闘機など、ただの的になるだけなのだ。それでも今の場で生き残るには、これしか手段が無いのだ。そして、眼下に黒い三枚羽を捕らえる。奴は殊勝にも速度を落とさず、旋回して、また後方に付こうというのだ。

「嫌な奴だ」

「真紅のニューポール」は機首を下方に向け、滑空してゆく。滑空しつつ、黒い三枚羽に向けて機銃を撃つ。

まさか敵も、そのままエンジンを切って降下してくるとは考えもしなかったのだろう。そこに、黒い機体のパイロットに油断が生まれた。僅かに判断が遅れたのだ。着弾は、僅かだが、あった。胴体後部と、右翼上部を貫通している。急旋回も宙返りも、もう、無理だろう。

「さて、とりあえず目的は果たしたが……このエンジン、ちゃんと付いてくれるかな」

まず、操縦桿を手前に引き、僅かだが飛行機の下降を止める。しかし、ある程度の速度は保たなければ墜落する事になる、上昇は出来ない。

「敵の領内で不時着なんて冗談じゃないぞ」

飛行機から身を乗り出し、幾度か、非常用のエンジン点火装置を引く。1度目、失敗。2度目、失敗。

高度は徐々に下がる。1500メートルも切り、点火装置を引くことも10回を超えた、その時、再度、轟音を響かせ、エンジンが蘇った。

一度、大きく旋回し、太陽の位置を確認すると、僅かだが西に傾いてきているようだ。

「早く片付けよう」

そう思い、機首を上方に向け、再度、大空の戦場に戻る為上昇する。

だが、アルベール・フォンクの機体に残された銃弾は少なく、機体の損傷も激しく、燃料さえも心もとない量になっているのであった。

## 赤の章 5

アルベール・フォンクが、再度、戦闘空域に突入しようと試みている時、徐々に高度を下げてくる黒い機体が視界に入る。

「正面からもう一度、攻撃をかけるか？」そう考えなくてもなかったが、今さら正面から戦う理由も無い、ましてや戦闘力も無い。徐々に旋回をしてやり過ぎす方が正解だ。

しかし――――――――――

正面から向かい合って飛べば、少なくとも相手の顔を至近距離で見ることが出来る。もしも、奴が撃ってきたなら、その時はその時の事。回避など出来なくても良い。とにかく、今は自分をここまで追い詰めた者の顔が見たいのだ。

一方は徐々に下降してくる。一方は徐々に上昇してゆく。

アルベール・フォンクにとって、これは初めての経験だった。敵と正面から対峙しながらも、攻撃をしない。そして何より、敵を同じ実力を持つ者として認め、その存在を知りたいと思う事が。

距離が縮まってくる。漆黒の三枚羽の中央に位置する羽の少し上に、相手の顔が見えた。黒い飛行帽と飛行服、それに白いスカーフ、飛行帽に収まりきらない髪は豪華な黄金色で、ゴーグルの奥にある瞳はこの空と同じ蒼。やはり、最初に背後を取られた宙返りの時に見た印象と変わらない。だが、その存在感は圧倒的だった。

「それ」は、微笑を浮かべながら、敬礼をしていたのだ。

アルベール・フォンクも、敬礼をする。だが、微笑む事は無い。笑う理由が無いのだ。

「俺は、奴の部下を殺している……」と思えば微笑など浮かべる事は出来ない。むしろ、奴が自分に対して浮かべる微笑の意味を知りたい、とさえ思った。

だが、敬礼をしている理由ならば、わかる。何より、お互いに機



銃を撃つ事も無くここまで接近した理由は、共通しているはずなのだ。

撃墜王の自負、何より、大空に生きる者の誇り - - - - -

そんなものは戦争では何の役にも立たない、と、アルベール・フォンクは解っていた。しかし、それが無ければ、地上で泥沼の戦争をやっている奴らと何も変わらないではないか。せめて、それだけは大切にしたいのだ、と。

「ベールゼル帝国にもいたのだ、自分と同じ価値観と実力をもつて空を駆ける者が」

その思いが、アルベール・フォンクの身体を一瞬のうちに駆け巡った。そして、お互いの機影はそれぞれの後方に流れ去って行く。

さらに上昇を続けると、ノエル、エドモン両名が相変わらず敵機と格闘戦を続けているが、どうやら変化が現れている。

敵の隊長機が撤退の発光信号でも出したのだろう。退却のタイミングを計る敵に対して、ノエル、エドモンが食らい付いている。

「ちょうど良い、痛み分けだが、頃合だ」

アルベール・フォンクも発光信号を一度撃ち、自らの愛機の進路を帰途に向けた。

後方を確認すると、今までの空戦が嘘の様に味方機、敵機共に見事に散開し、互いに帰途につく。おそらく、互いにその転進に攻撃を加えようとしたならば、手痛い逆撃を見舞われたことだろう。

「本当に良いパイロットは引き際つてものをわきまえているのさ」  
アルベール。フォンクは、軽く口笛を吹いて、左右に並んだ僚機の損害を確認した。目視したところ飛行に支障は無いようだ。しかし、あれほどの空中戦の後の事だ、内部がどうなっているのかもわからないし、燃料だって無駄には使えないだろう。

「ゆつくり帰るとするさ」

フォンク空戦隊三名が、ナント陸軍航空隊の基地に帰還した時刻は、基地司令官ロベール少将にとって、紅茶にミルクと砂糖をたっぷり入れて、シナモン入りのクッキーを2枚ずつはおぼる、という戦時下における平和を十分すぎる程堪能すべき時間に当たった。いわゆる、三時のおやつ、である。そんな時間に、スクラン最強の誉れ高き空戦隊が、無様にも満身創痍の状態で偵察から帰った、という報告を受けたのだ。心躍るはずも無い。

「……フォンク少佐をすぐにここへ呼べ」

白い口髭と、太鼓の様な腹を震わせながらも、ロベール少将は自らの職責を果たすべく、命令を下した。下した後は、当然のようにクッキーをほおばり、それを「ミルク入り砂糖ティー」で流し込む、という日課も忘れはしなかったのだが。

一方、アルベール・フォンクとその飛行部隊は、基地の滑走路に入る前、いつもなら各機とも撃墜数分だけ翼を軽く振って基地スタッフに戦果を伝えるのだが、今回はその余裕が無かった。また、基地の方でも彼らの状態がある程度近づいて来た時点で解っていたので、消火班、救急班が着陸と同時に戦闘機の回りに駆けつける事が出来る体制を整える。

「大丈夫だ、ずいぶん弾を食らいはしたが、ほら、この通り、びんびんしてるだろ？」

無事に着陸をすると、多くの義務と責任感と好奇心、そして多少の不安を持って集まったスタッフに対して、アルベール・フォンクは、おどけて見せた。

「あー、だがな、今度の奴らは手ごわいのがいるぞ！正直、今のままの戦闘機じゃあ勝てる気がしないな、今日だって、俺たちで三機しか落とせなかったんだぞ！？ま、凡人じゃあ、簡単に落とされちまうな」

言いながら、飛行機にかけられたはしごを伝って地上に降りつつ、

愛機を見て、アルベール・フォンクは、僅かにため息をつく。

「隊長、お互い、今回は良く生きて帰れましたね」

同じく愛機から降りたエドモン・バルビエが声をかける。未だ額には汗が滲んでいた。それだけ神経を使っていたのであろう。

「全くだ、俺の機も、お前の機も、ノエルの機もボロボロだ。久しぶりに戦争をしているって実感が沸いたな」

「おいおい、少佐殿、今さら何を言ってます、いつも緊張感を持っていて下さいよ。さすがに今回は俺たちじゃなかったらホントに死んでましたよ」

ノエルも、ゆっくりと近づきながら、冗談半分、本気半分といった口調で言う。

「全くだ、今後はきっちり緊張感を持つとしよう。さしあたって今回は一緒に飛んだのがお前らで本当に感謝している。他のメンツだったら、俺も今頃はあの世行きだっただろうよ」

「お、隊長、このエドモン・バルビエがいかに関立つ男か、やっとうご理解して頂けましたか!？」

エドモンもおどけた調子で会話を繋ぐと、アルベール・フォンクは肩を竦めながら答える。

「……ああ、まあな、操縦技術は上々だな、そこは褒めてやる。だが、あの射撃はなんだ？」

「ああ、あれは弾を少しでも減らして機体を軽くしようとしておりました」

「あー、そういう戦い方は一人の時にやれ、ノエル、エドモンにもう一度射撃のABCを叩き込んでやれ」

アルベール・フォンクはノエルの方に目を向け、合図をすると、190センチを超える長身のノエルが170センチそこそこしかないエドモンにのそりと近づいてゆく。

「了解、隊長」

「え？どうしてです？今回は俺が一番、敵を追い詰めてましたし、もう一歩で撃墜出来ましたよ!？」

エドモン・バルビエは、赤髪で長身の隊長と黄褐色の髪を持つ巨人とを、草食動物の様に交互に見ながら反論を試みるが、すぐに打ち砕かれてしまった。

「バカか、エドモン、あんなに大量に、しかもよく狙わずに機銃を撃つちまって・・いいか？ 敵、見方、入り混じつての空戦だ、万が一、味方に当たったら、お前、どうするんだ？ 少佐はその事を言ってるんだ、あ、ただし、俺やフォンク隊長はお前のへば弾なんかは食らわんがな」

言い終わると、ノエルは大口を開けて笑う。同時にエース同士の会話を聞いて、今まで笑いを堪えていた整備班の面々も、ついに我慢の限界を超えて一斉に笑い出した。

「エドモン、そういう事だ、その他にも言うべき事は山ほどあるぞ。大体、あの一機に弾丸を全部使い切るつもりだったのか？ 万が一、俺達が落とされたら、お前は他の敵機と弾無しで戦えるのか？ …… まあ、食らいについて、絶対に落とすっていう意思があるのは立派なもんだとは思うがな、ま、細かい事はノエルに聞け。俺の空戦は理屈じゃないが、ノエルならしっかり説明出来るからな」

「はい、了解です、隊長」

「よし、ノエル、エドモンにもう一度、みっちり仕込んでやれ」  
アルベール・フォンクがその言葉を言い終わらないうちに、ノエルがエドモンの飛行服の襟の後ろを右手で掴む、すると、体重の軽いエドモンはいとも簡単に持ち上がってしまった。

「わかった、わかりましたよ、って、どこに連れて行くんだよ、って、別に自分で歩ける！ ノエル！ 放せ！」

「ブリーフィングルームだ、士官学校じゃ教えてくれない正しい射撃ってモノをしっかりと説明してやる」

ノエルとエドモンは、どちらも同じ程度の敵機を落としているとはいえ、エドモンの場合は、最初からフォンク空戦隊の所属で稼いだスコア、ノエルは、他の空戦隊で既にエースであり、フォンク空戦隊に入ってから撃墜数があまり多くないのは、味方機のサポー

トにまわる事が多くなっているからなのである。その意味では、模擬戦でアルベール・フォンクを数回に一回とは言え、唯一破る事が出来るのは、ノエル・アジエ唯一人なのであった。また、彼にエドモンを教育させる事によってエドモンに「敵を打ち落とすだけではなく、見方を必ず生還させる隊長」に早くなつて欲しい、とアルベール・フォンクは考えているのである。

「さて」

アルベール・フォンクが愛機を整備兵達に任せ、工場兼格納庫に牽引されて行くのを見送り、自身もシャワーを浴びようとパイロットルームに向かおうとしたその時、参謀将校の一人が駆け付けて来た。

「フォンク少佐、司令官閣下が呼びです。至急との事ですので、お急ぎになつて下さい」

「おや、司令官が俺に用事などと、早速、貴重な国家予算で開発したこの戦闘機を壊しちまつた事がバレたのかな？」

アルベール・フォンクの質の悪い冗談に対し、律儀な参謀将校は、凍てついた視線のみを回答とした。

「こりゃあ、下手をすると始末書か・・・？」

今回は自らが自由に行動した結果、戦果こそ挙げたものの自機も破損してしまつたのだ、ただで済む、と考える方がおかしいのである。

「まいったな、謹慎なんかさせられたら、飛べなくなつちまうぞ」  
そう考えたアルベール・フォンクは、司令官室に向かう途中、「如何にして不問に付されるか」についての思案を重ねている、それはまるで士官学校時代に門限を破つた言い訳を考えて、校長に提出する時の様で、そんな自分にアルベール・フォンクは苦笑を禁じえないのであった。



## 赤の章 6

ナント基地は、スクラン共和国東方戦線の最前線にある基地である。で、あるからには、そこに赴任する司令官は、当然優秀であろうと考えられるのだが、それは他国の軍隊の事。こと、このスクラン共和国においては、文民統制の名の下に「軍閥化を防ぐ」という名目をもって、あらゆる司令官職が持ち回りにされるのだ。平時であれば、それで十分機能するのであるが、このような戦時においてはその事は弊害以外、何も生みはしないのだった。事実、大戦勃発当初など、ベーゼル帝国に首都近郊にまで攻め込まれ、あわや無条件降伏、といった事態にまで発展した事もあるのであった。

アルベール・フォンクは今、恐れ多くも有能とはお世辞にも言いがたい上官に、鋭く詰問される羽目に陥っていた。

「つまり、わが軍の戦闘機では、敵の戦闘機に勝てない、と少佐は考えておるのか？」

ロベール少将は、わざわざ「勝てない」という部分を強調する。

アルベール・フォンクは、厄介な人だな、と思ったが口にも出さず、表情にも表さない努力をした。

「いえ、今の戦闘機でも私であれば勝てますが、大多数のパイロットでは無理でしょうな」

アルベール・フォンクがぬけぬけと言うと、ロベール少将は、苦虫を噛み潰したような表情を作る。そして、一度、会話を区切る為に彼の好物である「シナモン入りクッキー」を二枚、同時に口に放り込んだ。

「君も食べるかね」

ロベール少将は、アルベール・フォンクに会話の主導権を奪われかけていた。それをクッキーの力で自らの領土に引き戻そうとするが、その手は通用しない。

「いえ、結構です……つまり、私が閣下に報告すべき点は二つ。

敵の新型機は我が軍の戦闘機の性能を上回るものである事。第二に、敵の指揮官は黒い機体を操り、また、その技量も想像を絶するものである、という事です」

アルベール・フォンクは、ロベール少将の目を正面から見据え、半ばはき捨てる様に言った。ロベール少将とて、有能でこそ無いが、そこまで愚かではない。アルベール・フォンクの言葉の意図が何を意味しているか、という事はわかった。このままでは、制空権を完全に失う、と、アルベール・フォンクは言外に示しているのだ。

もともと、ロベール少将の場合は、制空権を失ったらスクランは敗北し、自身の権力も、財産も失いかねない、という所に恐怖感を抱いたに過ぎない。だが、それでも、アルベール・フォンクには十分だった。今回の事で謹慎にならなければ良いのだ。そうすればいつでも空を飛べるし、空にいれば今の性能差でも、一向に構わないのだ。ある意味では、互いに自身の保身の為の会話とも言えるが、決定的に違うのは、アルベール・フォンクにとっての『保身』とは、生命や財産では無く『空』なのだ。ロベール少将には、一生かかってもわからない事である。

「つまり、どうすれば良いのだ？」

ロベール少将は、僅かに目を泳がせる。狼狽しているのだ。しかし、軍司令官としての僅かばかり残った矜持が、それと悟られないようにする努力を彼に課す。アルベール・フォンクは、失笑を禁じえなかったが、それは堪えて、話を続ける。

「は……進言を許して頂けるならば」

「かまわん、ここの防空における責任者は君以外にはおらんのだ」  
「……では……まず、各戦闘機を順次改修する事を提案します、これにより、旋回性能をあげ、格闘戦における能力を向上させます、これは、整備班に伝えればすぐにでも可能でしょう。次に、今回の遭遇戦は、偶然では無いものと考えられます。理由は、敵が新型を導入し、エース級の人間を複数名この方面に振り向けて来たと言う



事は、近々大規模な侵攻作戦が計画されているものと考えられます。従って、偵察をより頻繁に行う必要があると考えます」

「大規模な侵攻作戦!？」

さすがに、ロベール少将もその言葉には目を剥いた。アルベール・フォンクも内心「これは言いすぎだったか？」と思ったが、よくよく考えてみれば、その考えはあながち間違っている、とも言えないだろう。

「よし、わかった、そういう事であれば少佐の言を全面的にのむ。戦闘機の改修方法について、案はあるのか？それと、偵察に關しても、少佐の良いように。ただし、侵攻作戦があるとして、出来るだけ詳細にその規模を掴むように」

俺に責任を俺に押し付けようとしているな、と、アルベール・フォンクは思わないでもなかったが、この際、仕方が無い。どちらにせよ、スクラン共和国が負けるような事があれば自分も無事ではすまないのだから。だが、この確認だけはしなければいけない。

「ところで閣下。自分は国民の血税の結晶であり、国家の財産である戦闘機を無様にも損傷させてしまいました……」

アルベール・フォンクは意図して、自らが命令も無く偵察を実行した、という事実は伏せた。それでいて、更迭だの始末書だのと言ってみる、「敵に寝返ってやるぞ」と不貞な事も考えていたが、どうやらその考えは実行に移さなくてすむようだった。

「仕方ない、戦果も挙げている事だし、何より全軍きつての撃墜王の無様な姿を政府や国民に報告するわけにもいかん、それこそ士気にかかわる。ただし、今後は部隊の行動予定を必ず私に提出するように」

ロベール少将にしてみた所で、この戦時下の実戦部隊の指揮官にへそを曲げられては困るのだ。失策は老後の年金額に影響するのだから。

そんな訳で、アルベール・フォンクの高尚でも粹でもない当初の目的は、見事に達成させたものの、代わりに、自らの言った事だが

大規模な侵攻作戦の存在、その確認という宿題を課せられてしまった。

「処分が無いとはいえ、自分の軽率さは認めざるをえんな」  
司令官室から退出して数秒後、アルベール・フォンクは、そうはき捨てていた。

時刻は既に五時を回り、あたりの風が柔らかで心地よいものになりつつあった。

だが、入り口が大きく開いているとは言え、コンクリートと金属がむき出しの壁面を持つ飛行機の格納庫兼整備工場には、その風の恩恵にもあまり恵まれず、今だ昼間と変わらぬ熱気が立ち込めていた。そこでは、相変わらず整備兵達の喧騒が響いている。だが、高い天井から照らされるライトの明かりが、昼間の陽光に取って代わろうとしている事によって、時の流れは感じられるのであった。

アルベール・フォンクは、そこで、大声を張り上げて部下に激を飛ばす初老の整備士長に声をかけた。

「よう、悪いな、おやつさん。飛行機を穴だらけにしちまって」「全くだ、珍しいなあ、お前さん達がこんなにやられちまうつても。旋回性能の差だって？」

「ああ、上昇や加速はこつちが上なんだがな……そこで相談なんだが……羽をちょこつと短くしてくれないか？」

アルベール・フォンクは事も無げに言う。

「あ！？ああ、わかった。お前のだけで良いのかい？」

初老の整備士長も事もなげに言い、二人で顔を見合わせて、ニヤリと笑う。

「ああ……俺のだけじゃなく、出来る限り多く頼みたい。可能なら、ここにある機体を全部」

「それで互角の性能になると思うかい？」

「そいつはわからないが、少なくとも、こつちの新型が支給されるまでこのままの戦闘機じゃ、フォンク空戦隊が俺一人になっちま

うよ」

「ほう、そいつは笑い事じゃないな」

そう言いながらも、二人は笑っていた。だが、整備士長は、すぐに自分のデスクに向かう。設計をする為だ。

「アルベールよ、一日でやつちまうんだから、明日は酒でも奢ってもらうからな！」

そういうと、整備士長は、一心不乱に紙に向かう。それを見届けてから、アルベール・フォンクは、ノエル、エドモンがおそらくは居るであろう仕官クラブへ足を向けた。

今後の事や敵の航空戦力の分析について、二人と話し合っておく必要があるのだ。ただし、アルベール・フォンクは「敵の戦力」を分析する手段を、たった一つだけ思いついていた。もっとも、今まで誰も実行した事のない方法で、誰が聞いても「ろくでもない」という感想しか持てないような代物ではあったのだが。

## 赤の章 7

ほのかな明かりの中、ワイングラスを傾けながら、今日の出来事の反省や今後の展望を、気心の知れた仲間と共に、静かに非公式に話し合う場所……というのは今時大戦前のナント基地の「仕官クラブ」の姿だった。今の姿といえば、ビールジョッキを片手に好みの娯婦の話や故郷の家族の話を喧騒の中である、という、それこそ民間のパブともそう大差の無い空間となっていた。当然、そこには今日の反省や今後の展望を語る者の姿はめっきりと減っているのだった。それだけ、戦時下における最前線の軍人の心理は、刹那的にならずにはいられないのである。

そんな中、珍しくノエル・アジエ、エドモン・バルビエの両名は、周りの空気にも流されず、大好きなビールもワインも飲まずに、冷めたコーヒーを目の前に、深刻な顔をつき合わせ、反省と今後の展望を真摯に語り合っていた。

「それにしても、この機体の性能差は少しきびしい。このままでは格闘戦の分が悪い……」

ノエルは太い腕を組みなおし、つぶやくように言った。その巨体にふさわしく、低音の声で、ゆっくりとした口調だが、それでいてよく通る。

「うん、このままだとまずいよね」

ニツコリと笑いながらエドモンは答えた。その声はノエルの声とは対照的なテノールで、軽快に響く。彼は今年二十三歳になるのだが、その笑顔は、まだ十代だといっても通用するであろう程にやわらかく幼さの残るものだ。

「困ったな…このままだと死ぬかもねっ」

「おいおい」

二人は互いに苦笑を浮かべつつ、冷め切ったコーヒーを飲み干した。

「さて、俺としては、空戦のイロハをエドモン坊やに教えた事だし、そろそろ酒を飲みたい所だな」

「坊やとしましては、どうもここで飲むのは気が進みませんな」

「なんだ？俺の部屋にくるか？」

「どうして、あんたみたいなむさ苦しい大男の部屋に行かなきゃ行けないんだっ！」

「街で飲もうって言うてんの！」

「なんだ、娼婦でも抱きたいのか？オマエ、顔に似合わず好きだなあ」

エドモンは不適に笑った。といつても、本人が不適な笑みだと思つて作り上げる表情は、実際のところ、「はにかんでいる」という表現の方が正しいような笑顔である。

「娼婦じゃないさ……ただ、一夜の出会いはあるかも知れないだろう？」

ノエルは「ふん」と一度だけ鼻を鳴らしたが、そのことについては否定も肯定もしなかった。

「さて」と一言いうと、ノエルは立ち上がりバーカウンターのほうへ進む。とりあえず景気付けのビールを一杯飲んでから街に繰り出そうという算段だ。エドモンもまた、ノエルの意図を無言のまま理解し、一步送れてついてゆく。丁度そのとき、二人の左手にあるドアから、燃えるような赤い髪を持った、彼ら二人よりも唯一撃墜数の多い、スクラン共和国最高の空の戦士が、「颯爽」とは言いがたい風体で仕官クラブに突入をはたした。考え事でもしていたのか、入り口にある僅かの段差に躓いていたのだ。

「隊長」

ノエル、エドモンともに声を上げてアルベール・フォンクの元に駆け寄る。こと、空以外に関して、どうしてこの人は、これほどにぼんやりしているのだろうか？と、二人とも思うが、そんな事は今に始まった事ではないので、「赤い悪魔」が地上で小さな段差に遅れをとった件に関して、彼等がことさら触れる事はなかった。

「なんだ、まだ飲んでなかったか……丁度良かった」

癖のある真つ赤な髪を右手でかき回しながら、アルベール・フォンクは言う。

「いえね、今から飲もうと思ってたんですよ。エドモンのやつが女のいるところで飲みたいって騒ぐもんで、とりあえず景気付けに一杯ここで飲んで、それから街に繰り出そうと思ってたんですよ」

「やっぱり、男しかいないところで飲んでも楽しくないですから！ノエルだってそうだら！？」

「ふむ……」

一言、アルベール・フォンクはつぶやくと、一度目をつむり、もう一度目を開けたときには、ニヤリと笑って言った。

「どうせ飲みに行くなら、行き先はリムス・ブルでいいか？」  
「えっ！？」

ノエル、エドモンとも同時に声を上げる。リムス・ブルといえば、元国境沿いで、開戦当初にベーゼル帝国に占領された都市なのだ。最早、敵の都市である。その上、ナントの基地から100kmも離れている。行くとすれば、飛行機以外にないが、敵地に、夜間に下りるといふ事など、今まで誰もやったことが無い。しかも、それをやる理由が「酒を呑みにいく」である。

「そうだな、今回は偵察の許可をもらおうか……丁度、司令官閣下から敵戦力の規模を詳細につかんで報告をしろという命令も出た事だしな。もつとも、その偵察の為に敵地に着陸し潜入する、などとは言わんがな、ははは」

「もしも戦闘になったらどうします？」

ノエルは慎重にたずねる。

「お前達、夜間に離陸したり着陸したりした事、あるか？」  
「いいえ」

「では、敵もそういう事だ。まず迎撃に出てくる事はないだろう。ま、怖ければ俺一人でも行くが？」

アルベール・フォンクは、僅かに目を細めて二人の顔をのぞく。

自信と過信は違うものだ。二人に自信がないならば連れて行かないつもりだった。

「あの街なら、ベーゼルのパイロットもいると思う。本当の事をいうと俺はな、出来れば今日会った金髪のパイロットに一度会ってみたくなっただ。まあ、いなくても仕方ないが、な」

「お供しますよ、夜の空って言うのも興味があるし、何より敵地に乗り込むってのが面白そうだ」

ノエルはそう言ってエドモンの肩を叩く。

「俺もやつらの顔は見たいですね」

エドモンは不適に、はにかんでいた……

こうして、アルベール・フォンクの思いついた「ろくでもない敵戦力の分析方法」は、「ろくでもない」という感想を抱かない稀有な二人の協力を得て、実行されるのであった。

## 赤の章 8

幸い天空には我が愛すべき惑星の、唯一の衛星が黄金色に輝いていた。それは、夜間の離陸や着陸を可能にしてくれると、フォンク空戦隊の隊長以下三名は考えていた。そして、彼らは事実、離陸も着陸も難なくこなす事になるのだが、そのことは、人類の航空史に記録される事はなかった。なぜなら、基地近くの官舎に帰宅した司令官に、わざわざ許可を求める為にアルベール・フォンクは電話をしたのだが、司令官はすでにアルコールに脳を侵食されていたのだ。この後、さらに侵食され続け酩酊状態に陥るにいたり、「世界初の夜間偵察飛行」という事実を「ただの偵察飛行」に誤認してしまうからである。

とはいえ、現在は月を遙か上空に見上げ、悠然と飛ぶスクラン最強の空戦隊。そのエース達の姿は、もしも地上から見上げる者がいたならば、まさに「大空の騎士」と呼んだのではないだろうか。そう思えるほどに、アルベール・フォンクを先頭に、左右に四時と八時の方向に分かれた銀灰色の両機との一系乱れぬ編隊飛行は、「甲冑をまとった騎士達の大空の行進」に見えたであろう。

「そろそろか」

機上で一度、上に大きく手を上げ、勢いよく下に下ろす動作を、アルベール・フォンクは行った。同時に、自らが駆る「銀灰色の機体」のエンジンをストップし、滑空に入る。そのすぐ後に、左右の後方にいる両機もエンジンをストップし滑空に入る。

目指す場所は、数キロメートル程度先に見える草原だ。もちろん、場所はすでにベーゼル帝国の領土である。

全員、自分の着陸地点を予想し、岩などの障害物などが無い場所を見極める。今、ここでエンジンを始動するわけにはいかない、敵に気づかれたら終わりなのだ。着陸のチャンスは一度きり、失敗すれば、酒を飲むどころの騒ぎではない、帰れなくなるのだ。最悪、



捕虜になる可能性さえある。さすがのフォンク空戦隊きつてのエース達も緊張という名の仮面をそれぞれの顔に張り付かせていた。

まず、アルベール・フォンクが降りる。昼間と同様、完璧な着陸である。

「ふう……やはり、自分の戦闘機じゃないと緊張するな、しかも夜は……」

僅かに手に汗をかいている。そして左右を見渡し、ノエル、エドモンが安全に降りられるかを確認した。大丈夫だ。着陸に支障のある障害物は、無い。そのまま銀灰色の乗りなれないニュー・ローランから飛び降り、2機を即座に誘導する。

まず、ノエル……次いでエドモンが降りてきた。思わずアルベール・フォンクが口笛を吹いてしまうほど、二人の夜間着陸は、見事だった。

「さて、街までここから歩いて三十分つてどこか」

地上に降りた僚友二人に、アルベール・フォンクが最初に言った言葉だ。

「ええ、敵の占領下にある街ですが」

ノエルは、ため息をつきつつ、ニヤリと笑う。

「まったく、捕まったら拷問とか、嫌ですよ」

そういうエドモンは、捕まる気など一切ない。「そんなドジは踏まないさ」とばかりに明るく言う。もしも実際にドジを踏むとすれば、おそらく地上に降りたアルベール・フォンクその人であろう。何もない所でも躓いたり、道の隅にあるゴミ箱にも平気で突撃してしまうような、おおよそ、操縦と空戦技と戦術、戦闘以外のあらゆる部分が欠落しているのだ。だが、ノエルもエドモンも、だからこそ、もしもの時は全力で彼等の隊長をサポートするつもりである。もちろん、「もしも」等という曖昧で特大の危険などは本来望んでおらず、アルベール・フォンクの地上における欠落部分が生む油断、そこから派生する、「軽く楽しめる程度のトラブル」を期待する気持ち

ちの方が、基本的には強いのだが。

リムス・ブールの街は、人口はおよそ三十万人。スクラン側からみれば南東に位置し、ベーゼル帝国の側から見れば、南西に位置する場所である。これといった特産品などはなく、しいて特徴を挙げるとなれば、新鮮な「スクラン産のワイン」と「ベーゼル産のビール」の双方が楽しめる街ということだろうか。それでもかつては、南スクラン最大の街ナントからベーゼルの首都ヴァルリアまでを結ぶ幹線道路があり、交易などで宿場町として栄えた事もあるのだが、近年、その二つの街を、リムス・ブールを経由しない直通の高速鉄道が結んで以来、荒廃の一途を辿っていた。とはいえ、今時大戦前までは、スクラン側の国境の街としてある程度は栄え、「この街にいれば、足りないものは無い」と住民に言わしめるには十分な街なのであった。

「意外とすんなり街の中に入れたな？」

アルベール・フォンクは、軽口をたたく。

辺りはガス灯もとまり、民家からも室内の明かりが漏れている。その姿からは、あまり「戦時下の国境の街」という印象は与えないとはいえ、それでも街中を出歩く人間は少なく、彼等がすれ違う人間は、ベーゼル帝国の軍服を着ている集団か、もしくは軍服を着ていて女性を連れている集団か、そのどちらかに限定されていたので、やはり占領下にある都市、という印象までは拭い去ることは出来なかったが。

「で、どうします？」

エドモン・バルビエが、アルベール・フォンクに小声で尋ねる。

「そうだな、航空徽章をつけている軍人が入るバーにでも入ろうか」

不適な笑みを浮かべつつ、アルベール・フォンクは答えた。

彼等三人の目ならば、それを見つけることなど、造作も無いこと

なのだ。

「あ、あの二人」

エドモンが早速見つけたようだ。

「よし、いこう」

アルベール・フォンクのその言葉とともに、フォンク空戦隊のエンジニアパイロット達は、迷いなく、臆する事もなく、現在は敵地であるバーへと潜入してゆくのであった。

## 赤の章 9

時刻はまだ、二十一時を少し回った頃である。

アルベール・フォンク、ノエル・アジェ、エドモン・バルビエの三名は、偵察の名目で戦闘機を飛ばしてから、1時間と少したった程度の時間でベーゼル帝国の領内に潜入する事に成功していた。

彼等の目の前には、数秒前にベーゼル帝国の航空仕官が入店したバーがある。

外壁はむき出しのレンガで二階建て。建物中央部に出入り用のドアがあり、今も、先ほど入店した二人の後を追って店内に侵入しようとしたアルベール・フォンク等三名にぶつかると、ベーゼル帝国の航空仕官が三人程、赤ら顔で出てきた。だが、赤ら顔だからといって、決して酔いつぶれてはいない。それはどこも同じ、大空の騎士達の誇りがこのような場合も作用しているのであろう。

「入るぞ」

行き付けのバーにでも入るような笑顔で二人を振り返りながら、アルベール・フォンクは言う。

「酒、飲んじゃって良いんですか？」

エドモン・バルビエは、嬉しそうに目を輝かせる。

「なんだ？ 操縦に不安があるなら飲むな」

ズボンのポケットに入れていた両手のうち、左手を出してドアを開けつつ、アルベール・フォンクはエドモンをからかった。

「そうだな、エドモンはホット・ミルクにしたらどうだ？」

ノエル・アジェは、エドモンの頭をつかんで髪をかき回す。さすがにエドモンもやられっ放しではない。一旦頭を下げて回し蹴りをノエルに決めようとするが、それは間に入ったアルベール・フォンクに止められてしまった。

「ここで喧嘩をしてる場合じゃないだろ、さ、早く行くぞ、それと……お前達は適当に女でも口説いてろ」

中に入ると、正面にカウンター席が並んでおり、左右にテーブル席が広がっている。外観からある程度は想像していたのだが、実際は思ったよりも中が広い……というのがアルベール・フォンクの印象だ。

とりあえず、今日戦った相手がいれば上々、いなくても何者かがわかれば良し、最悪、ベールゼル側の兵士の話でも盗み聞きすれば、敵の現状もつかめるから良からう、と、考えてここまで来たのだ。

「まずは、誰かと話してみるか……」と考えて辺りを見回すと、右側の席の方から、今日の空戦についての話題が聞こえてきた。

まずは、彼等に話を聞いてみよう……そう考えてアルベール・フォンクがそちらに歩を進めた時、丁度、ピアノの音が彼の耳に届いた。それとほぼ同時に彼等は話を止め、ピアノのある方向を見る。それにつられてアルベール・フォンクも振り返るような形で、音が流れてくる方向へ顔を向けた。

それは、バーの正面からみれば、左側になり、その奥に、僅かに高くなっているステージがある。そこには赤いカーペットが敷かれ、その上には古びたグランドピアノが置かれていた。照明も、あたりのほの暗いものと違い、その場所だけが浮き立つようにスポットライトがあたる。

音が流れ、音楽に変わる……

「ほう……」

アルベール・フォンクの口から感嘆の声がもれた。

アルベール・フォンクは、決して音楽がわかるわけではない。けれど、わからないからこそ心に感じるものがあり、それは確かにそのステージから流れてくる。おそらく、ここにいる飛行機乗り達も同じ気持ちであろう。だからこそ空戦についての話を止めて、このピアノの調べに耳を傾けたのだ。

（だれがこのピアノを弾いているのか？）

アルベール・フォンクは、興味にかられピアノの間近まで歩を進

めてみると、はつとした。

肩にかかる豊かな黄金色の髪と、北極の氷河を思わせる蒼氷色の瞳に、昼間の敵とまったく同じ印象を受けたのである。しかし、口からは圧倒的に印象が異なるのだ。薄いピンク色の唇と首に掛けた翡翠のネックレス、その下の漆黒のドレス……

アルベール・フォンクは、一度頭をふった。

丁度、そのタイミングで演奏している曲は終わり、間近まで迫った赤髪の男に対して、漆黒のドレスを身に纏った黄金色の髪を持つ美女は一度だけ目を丸くして驚き、その後、微笑みかけた。

「なにか、曲のリクエストがありましたか？」

アルベール・フォンクは、我に帰りまじまじと美女を見つめ、ついで頭を左手でかきながら答えた。

「いや、特にない、ただ知り合いに似ていたものでね……でも、まあ、違う、探しているのは男だから……」

その言葉に、今度は女の方が、アルベール・フォンクをまじまじと見つめて言う。

「私、これでも女性としてある程度の自信はもっていましたが……男性と間違われましたか？」

そして、言い終わると同時に「クスリ」と、悪戯っぽく笑った。

「すまない、そういう事ではなく、雰囲気というか……金髪で蒼い瞳の……外見の特徴が一緒だったもので……ああ、そうだ。その人は腕の良いパイロットでね、黒い戦闘機に乗っていた。そういう特徴のある人を知らないかな？」

普段、地上では欠陥が多いものの、少なくとも豪放磊落なアルベール・フォンクらしくなく、身をかがめて、申し訳なさそうに言う。「そうね、知っています、私と似てるパイロットで黒い戦闘機なら……たぶん、私の兄でしょう」

「兄？」

「はい、名前はフランツ・ブランド……ベーゼルきっての空戦の名手と呼ばれているパイロットです」

「今ここに來てるのかい？お兄さんは」

「いいえ、来ていません、兄はお酒を飲まない人なので」

「そうか、残念だな。ベーゼルのパイロットが多くここに入るのを見てきたんだが……」

「そうでしたか……なぜ兄に会いたかったのですか？」

黄金色の髪を持つ美女は、蒼氷色の瞳に興味を光彩を湛えて、アルベール・フォンクの、僅かに失意を滲ませた褐色の瞳を覗き込みながら言った。

「そうだな……同じパイロットとして、地上でも挨拶をしておこうと思ってここをたずねたんだが……そう言うことなら無駄足だったかな。俺の名は、アルベール・フォンクと言うのだが、お兄さんに宜しく伝えておいてくれるかな、ええと……」

覗き込まれたアルベール・フォンクは、自己紹介のタイミングを逃していた事を悟り、途中からしどろもどろになる。

フランツ・ブランドというパイロットの事を考えるあまり、眼前の女性が美女である事にも今まで気がつかず、改めて覗き込まれた事により、彼女が驚くべき美貌を持っていたという事実を、図らずも認識してしまった事も加味された故の動揺であった。

それを金髪の美女はおかしそうに見つめている。もちろん、彼女には、この男に恥をかかせようなどという意図は無く、当然のように自らも名乗った。

「私は、イレエネ・ブランドです。……それより、あなたのお名前は私でも聞いた事があります。『赤い悪魔』と呼ばれるスクラン最高のパイロットだと兄もいつておりました。そして『いつか空で戦うことになる相手だろう』と。だとすれば、貴方は兄の敵でしょう？なんでこんな敵地のまっただ中にいるのかしら？」

言葉には、精一杯の險悪さを滲ませながら、イレエネ・ブランドは、それでもどこことなく興味をもってアルベール・フォンクを見ながら言葉を紡ぐ。

「ああ、そうだな、ブランド嬢。たしかに俺は君の兄さんの敵だ。

でも、だからといってフ란ツ卿を憎たらく思っている訳では、まったくない。むしろ敬意を抱いているからこそ、ここにきたのです。今日の事なんだが、彼と空で渡り合った……正直、死ぬかも知れないな、と思った。そうしたら、自分を殺すかも知れない相手がどんな人間か興味が出てきてしまつてね。不思議なものでしょう？」

そう言つて、アルベール・フォンクは、白い歯を見せて笑つた。イレーネ・ブランドも、柔らかい春の陽光の様な笑顔を見せて、「兄を評価して頂いてありがとう。……あなたの事は、兄も話していました……『今日、赤い悪魔と戦つた 彼と空で目が合った』つて、嬉しそうに。本当に、何ででしょうね？」

と、答えた。

「目が合つたと、そう言つていたのかい？……そうか、気のせいではなかつたんだな……彼は笑つてもいたんだよ。正直、その理由が一番知りたくてここに来たのかもしれない……戦場で敵に見せる笑顔の意味を……」

「多分、簡単な事だと思います……あなたに興味があつたからでしょう、きっと。だから、兄もあなたに会いたかつたんだと思います、もう一度。人は、この人ともう一度会いたい、と強く願う時、自然と笑顔になりますでしょう？」

そんな会話を交わしているうちに、アルベール・フォンクとイレーネ・ブランドはいつしかピアノの側を離れ、どちらが誘うでもなく、一つの席に収まつていた。

「一杯、おごらせてくれないか？」

あたりは、ピアノの調べが終わつた事を悟り、再度、喧噪に包まれ始めていた。

そしてアルベール・フォンクは今、空戦とは別の高揚感に包まれていた。だが、同時に不思議な違和感も感じていた。

「なんでこの女は、兄を殺そうとした相手に笑顔でいられるのだろうか」と。



だが、違和感の正体はすぐにわかった。

少なくとも今は、彼女とも、彼女の兄とも、自分は戦う時間ではないのだ。それを自分自身が完全に肯定出来ずにいるが故の違和感なのだ。むしろ、イレエネ・ブランドの方が、その事実を完璧に肯定していればこそその笑顔なのであろう。

その考えに至り、アルベール・フォンクはこの時、空では兄と互角の勝負をし、地上では妹に負けたな……と、思ったのである。

同時刻、別のテーブルでは、ベーゼル帝国航空隊の士官の一人がアルベール・フォンクの存在を認め、同僚に確認を求めている。

その人物たちこそ、昼間にエドモン、ノエル両名と戦ったベーゼル帝国の誇るエースパイロット達なのであった。

## 赤の章 9（後書き）

11/2/10 加筆修正しました。

## 赤の章 10

ジョッキになみなみと注がれた黒い液体とそれに覆いかぶさるクリーム色の泡は、紛れもなくベーゼル帝国産の黒ビールである。

ノエルとエドモンの両名は、時刻が午後十時を回るに至り、それぞれ二杯目を注文し、やはりベーゼル帝国産のソーセージに舌鼓を打っていた。

「戦時下でもこれだけ豊富に物資があるんだから、ベーゼルって国はすごいもんだな」

スクランとてそれほど貧乏な国ではないとはいえ、補給物資はあくまで補給物資でしかない。基地暮らしのノエルとしては、現状をうらやまない訳にはいかなかった。そして、局地的にいかにも勝利を収めようとも、大局がベーゼル有利であることを改めて認識しない訳にはいかなかったのである。

一方のエドモンの方は言えば、

「あーあ、俺に女でも口説いてろ！って言って自分が口説き始めちゃったよ」

と。言い、本人曰くの「苦笑」、他者から見たら「満面の笑み」を浮かべながらアルベール・フォンクとイレネ・ブランドが座るテーブルの方をちらちらと眺めていた。

「あれ？」

ふと、そのとき、航空徽章を身に付けた二人組みのパイロットが、彼等のテーブルに近づいてゆく姿をエドモンは見た。

「あまり友好的な雰囲気では近づいているとは思えないな」

ノエルもすぐに状況を察した。

二人ともアルコールを体内に入れたとはいえ、この状況下で酔っ払う程、愚かなはずもなく、当然のように周りの会話に耳を傾けつつ、周囲を警戒していたのだ。そして、二人とアルベール・フォンクの視線が交差した。

アルベール・フォンクとイレネ・ブランドの間に割って入った不穏な二人組のうち一人が、アルベール・フォンクに、友好的とは言いがたい声音で声をかける。

「さてさて、赤毛の兄さん。俺達はブランド嬢のピアノが聴きたくてここに来ているんだ、そろそろ独り占めするのはやめて頂こうか」

そういう男は、アルベール・フォンクよりもやや身長は低いが、まず長身といえる部類に入る、黒髪的美男子であった。アルベール・フォンクは、「面白味の無い顔だな」という評価を下して、その分、自分の方が上だ。と思う事に決定したが、正直な女性の客観的な評価があるならば、「どちらも甲乙つけがたい」、ということであつただろう。

「うん？無粋な事をいう男だな。女性を口説くなら、しつかり順番を待つたらどうだ？」

アルベール・フォンクは、したたかに言葉の逆撃を加えたが、反応は意外な所から帰ってきた。

「私、今、口説かれていたのですか？」

驚き、口元に手を当てて、イレネブランドは頬を赤らめた。

「い、いや、今のはものの例えというか、勢いというか……決して他意はないのです！」

アルベール・フォンクは、無様に両腕を交差して振る動作をし、言葉もいささか不適切なものを選んできました。本人としては、「口説いているつもりではない」と言いたかったのだが、これでは「口説いていた」事になってしまう。

どうにも世間ズレしたところのある二人である。

それを見たもう一人の男……黒髪的美男子よりも大柄、ノエルに匹敵する偉丈夫で、頬、口の周りから顎にかけて褐色の髭で覆われた男が、大笑しながら近づいてくる。

「これはイレネ嬢もまんざらではないという事ですか？だと

すれば、コンラート、俺たちの方がいらん事をしていることになっちまうぞ」

「おいおい、ハンス。じゃあ、俺は折角ここまでピアノを聴きに來たのに、その目的は果たせず、ビールを飲んで帰れっていうのか？」

コンラートと呼ばれた美青年は、片眉を吊り上げながら、ハンスと呼ぶ巨漢に不平を言う。

彼等は仲も良いのだろう。アルベール・フォンクはふと、エドモンとノエルのようなと考えた。そういえば、航空徽章も見える、話をしてみたいと言う考えが一瞬頭によぎったが、とは言えそろそろ潮時だろう。

「いや、俺としても今日の用事はもうすんだ。それに、別に口説いていたつもりもない。多少名残惜しくはあるが、貴官等の楽しみを邪魔するつもりはない。言い方だ、言い方が気に入らなかつただけだ、いきなり喧嘩を売るような口調で言われれば、温厚な俺でもさすがに言い返す……コンラート……だったか？……次は気をつけてくれ」

冷静さを取り戻し、ぬけぬけと自分を温厚な人間に仕立て上げたアルベール・フォンクは、そう言うと言席を立った。

「そうか、そういうことならば君ももっとゆっくりしていけば良いだろう？……俺達も無粋な事はしたく無い。で、ええと君の名は？」

コンラートもイレネ・ブランドの表情から、赤毛の男と話をする事が、彼女にとって、決して不快だった訳ではないということを悟ると、言葉の矛を収めた。

「アルベール・フォンク……だ」

「アルベール……？」

だが、その名を出した時、イレネ・ブランドの顔は蒼白になり、その蒼氷色の瞳は狼狽という名のヴェールが包み込んだ。『赤い悪魔』という、この赤毛の勇者の異名を、イレネ・ブランドが違う

意味で認識したとしても致し方ない事である。だが、彼女は、この『赤い悪魔』の率直な名乗り方に対して、好ましい感情も多く抱いた。だからこそ、無事に帰途について欲しいが故の狼狽である。

だが、コンラートと呼ばれた男とハンスと呼ばれた男は、ほぼ同時に互いの顔を見合わせて、

「アルベール？……赤髪……悪魔？」  
と言った。

無論、ここに至って彼等の疑問が確信に変わるまでの時間は、数秒で事足り、彼等の確信は、イレエネ・ブランドの狼狽を、不安に変えるのに十分の要素を持っていたのである。

## 赤の章 11

今まで、ちびりちびりとベーゼル産の濃厚なビールを味わいつつ、彼等の様子を窺っていたノエル・アジエとエドモン・バルビエは、その場の空気が一気に冷却されたことを察した。

「おい、ノエル……あの様子はバレたんじゃないか？」

「そうだな、あの三人には伝わったんだろうな」

とは言え、不幸中の幸いであつたことは、その三人が、いかなる理由かは想像もつかないが、『事実を知りつつ、黙認の構えを見せている』という事だろう。

「もう少し様子をみようか……」

ノエル・アジエがその言葉を口にした刹那……

「アルベール・フォンク！？ 赤毛のアルベール・フォンクと言やあスクランの戦闘機乗りだろう！？ なんでここにいやがる！？」

近くで話を聞いていたらしいベーゼルのパイロットが、大声を張り上げた。それを機に酒場のほぼ全員が、声の方に注目する。

「そういえば見覚えがあるぞ、写真で……！」

注目した幾人かが、口を揃え詰め寄ってくる。

そこを、大柄なハンスが、

「まで、まず俺たちが話を聞いてるんだ」

というと、皆、しぶしぶ、といった体で引き下がっていった。

ハンスとコンラートの二人が、アルベール・フォンクの素性に気がつきながらそれを追求しないのは、『大空の敵は大空で倒すべき』という撃墜王の矜持と、どこにあっても正直に名乗るアルベール・フォンクの度量に対する敬意からであつたが、それを一般のパイロットに求めるのは、どだい無理な話である。

「おい、本当にどういふつもりだ？ せめて偽名くらい考えて来たらどうだったんだ？ お前は今日も同胞を地に叩き落しているんだぞ

……！」

コンラートは、声を押し殺し濃藍色の瞳に怒気を込めてアルベル・フォンクを睨む。

「お前……今日の戦闘に参加していたのか？」

アルベル・フォンクも、さすがに声を押し殺している。これでも、多少は気を使っているのだ。

「そうだ、初撃でやられた三機のパイロットは帰還していない、帰還できたのは俺たち三人だ」

コンラートの代わりに、ハンスと呼ばれた男が答える。

「そうか、お前たちがあの中の人か……なら、なぜお前たちは俺を捕らえようしない？」

僅かに表情に沈痛なものを滲ませて、アルベル・フォンクは問う。

「……空で勝負がつかなくて、地上でその憂さを晴らすのか、お前なら？」

答えるコンラートの言葉には、撃墜王の矜持と、押さえ込んだ怒りとがにじみ出ていた。

アルベル・フォンクはこの場所に来た本来の目的を令、果たした。フランツ・ブランドには会えずとも、コンラートとハンスには会えた。そして、少なくとも彼等の価値観は、自身のそれとあまり変わらない事がわかったのだ。それで十分である。

もはやこの場所に長居は無用だった。ならば、この場にいるパイロット達に己の素性を、しっかりと答えてやるうではないか。

「あははは……！！確かに俺はアルベル・フォンク……だが、今日、恐るべき敵とまみえて、その敵に興味を持った！どんな男かと見てやるうと思ったのだ！だからここに来た！！いけないか、諸君！？」

赤毛のエースパイロットは、その場の全ての人々に聞こえるよう、声を張り上げた。彼にとって『闘い』とは『空』に限られる。それが空に生き、空で死ぬ者の価値観であろうと考えており、この言動



は多少の誇張はあっても嘘はないのだ。『敵』だ『味方』だ、等という事は些細な問題でしかなく、しかも一時の事であるはずだ。少なくとも、この事は、イレエネにも解ってる事だ。

どうせならば、それをこの場の人々にも問いたかった。

とは言え、本人の価値観がいかなるものであっても、現在は戦時下で、自信の身分は「敵国のエースパイロットである」という固定概念をこの場の全員から拭い去ることの無謀さは、さすがに承知しているアルベール・フォンクである。己の問いに答えるものが現れるよりも早く行動を起こしていた。

---

### ガシャン

---

最も手近にあつた、外に通じるガラスに突進したのである。

「ノエル、エドモン！」

すぐに酒場から飛び出し、彼の部下達の名を呼ぶが、無論、そのときに店内にいるほど彼の部下達は無能ではない。

だが、問題は彼等が出てきたあとである。逃げてきた足取りの後ろを振り返ると、多数の人影が怒声と共に追従してくる姿が見て取れた。

「隊長、ありやああの場にいる全員を敵に回すような発言ですよ。悪戯にしても時と場所をわきまえないと、いつか死にますよ？」

「もう少し、融通のきく奴らだと思ったんだがなあ」

エドモンが愚痴をこぼすようにいと、アルベール・フォンクは、口を尖らせながら言い訳をする。

「そう思ってたなら、正面から堂々と出れば良かったでしょう？」  
ノエルは笑いを堪えながら言つた。

「にしても、あの人数は、酒場にいたほぼ全員ですよ……どうします？エドモンを囿にして逃げましょうか？」

「おいノエル、冗談も程ほどにしてくれよ、あんなの全員相手にしたら朝になっちゃうよ」

「なんだ、エドモン、勝てるつもりか？」

ノエルが走りながら、エドモンの頭を軽く小突く。

「だが、イレエネ嬢と、あの二人はいないようだな」

アルベール・フォンクは暫く走ってから一度立ち止まり、後ろを振り返った。追いつがる人の群れの数が減少傾向にない事と、バーで会話を交わした三人があの場合にいない事を確認すると、一瞬だけ笑顔をその表情に浮かべ、再び力強く大地を蹴り夜の闇を駆け抜ける。

酒場には三人が取り残され、がらんとしていた。

「二人は、彼らを追わないのですか？」

イレエネ・ブランドは、静かに問う。

「次は、空で……という事です」

コンラートは、黒ビールを一気に飲み干して答える。

「それにしても、もう少し静かに出て行けば良いのに……」

イレエネ・ブランドは「くすくす」と思い出して笑いながら言葉を紡ぐ。

「我々に気を使ったのでしょ……いかに気持ちを通じようとも、敵であることには変わりはないのだから」

「ハンス、飲みすぎたか？お前にそんな台詞は似合わないよ」

ハンスとコンラートの会話を聞きつつ、イレエネ・ブランドはピアノの前に戻った。すると、喧騒を忘れ静寂が訪れた酒場に、再びピアノの音色が響くのであった。

## 赤の章 11（後書き）

久しぶりに続きを書いていたら自分で人物名を間違えたりしてしまいました。

前のもちよこちよこ直したりします。

もし、ミスを見つけたら教えていただけるとありがたいです。

## 赤の章 12

アルベール・フォンクを筆頭としたスクラン共和国きつての撃墜王三名が、ナントの基地に帰還したのは、午前を三時間も回ったあとであった。

さしあたり、一名の脱落者が出ることも無くリムス・ブルのバ―を脱出し、基地に帰還できたことは重畳である……とアルベール・フォンクなどは満足の笑みを浮かべたものであるが、実際のところは、飲酒状態で夜間飛行を決行、無灯火で離着陸をしたことを考えれば、そんなことは戦史上初であり、航空史上も初にして唯一の暴拳であった。

もつとも、今回の一件の顛末はあくまで「一般的な偵察行動であった」と、クツキーの大好きな基地司令官ロベール少将に報告されており、結果として、快拳とも暴拳とも言えない記録は、残る事が無かっただけの事である。

「さて……機体の改修はどこまで進んでいるか……」

銀灰色の機体をすべるように滑空させ、昼間であれば、まるで教科書のように見えたであろう見事な着陸で帰還したアルベール・フォンクは、戦闘機から降りると、そう一人ごちた。

機体をその場に置き、まだ明かりの漏れる格納庫の方に足を向けると、同じく後方から一機、また一機と着陸してくる。もちろん、それはノエル・アジエとエドモン・バルビエの両名であることに疑う余地は無い。そして、彼等もアルベール・フォンクと同じく、機体から降りるとすぐに格納庫に足を向けるのであった。

格納庫の中は、光と人の喧騒と、それらが生み出す熱気とに溢れていた。おそらく整備士達のほぼ全員が、今、現在も作業にかり出されているようだった。至るところで複数の溶接の火花も散っている。

「よう、アルベール！今帰ったのかい？」

初老の整備士長の作業服は真っ黒に汚れていた。しかし、昼間と変わらぬ笑顔をアルベール・フォンクに向けてくれる。とはいえ、その笑顔の中には、さすがに多少の疲労も見えて取れる。

「ああ、ちよつと遅くなった、けどまあ、目的のほうは八十パーセントくらいは果たせたかな」

両手を広げ肩をすくませて、おどけた様な姿でアルベール・フォンクは答える。足りない二十パーセントの内訳は、十五パーセントがフランツ・ブランドに会えなかった事で、残りの五パーセントが敵軍の規模に関する情報が、何一つ得られなかった事である。さしあたり、情報部でもあるまいし、敵軍の規模を探るなど、パイロットは上から見ただけで十分なのだ、と、アルベール・フォンクはいつの間にか、あっさりと割り切っていた。

「そうかい、そりゃよかったな。……そうそう、十三時までには正規の三個中隊三十六機分、全機終わる予定だよ……今帰還した三機も含めて……な！」

そう言う整備士長は、また、黙々と作業を続ける。

「ありがとう 十四時からテスト飛行を開始させてもらうよ」

そういえば整備士達を見回すと、汚れていない作業服の男など誰一人いない。もしかすると休憩も取らずに、翼を短くする作業を続けてくれていたのだろう。

「エドモン、ノエル、今日は休もう」

すぐ後ろに控える兩名に声をかけ、自室に戻るように促す。地上の者には地上の者の仕事、空の者には空の者の仕事があるのだ。彼等の仕事に自分達が報いる事が出来るとすれば、今は眠り、明日の空で勝利を収めて帰ってくる事だけなのだろう。いくら今、感謝を伝えても明日、生きて帰ってこなければ彼等は後悔しかないのだろうから……。

アルベール・フォンクの自室は基地の敷地内、飛行場から徒歩で10分程度の場所にある。それはエドモン・バルビエもノエル・ア

ジエも変わらない立地条件なのだが、ただ違いがあるとすれば、尉官と佐官では多少部屋の広さが違う、という事だけであった。それでも、アルベール・フォンクにしてみれば「別に部屋など、寝られれば良い」という認識なので、引越しをさせられただけ損だ、という感想を部下の二人には漏らしていたという。

自室に戻ったアルベール・フォンクは、シャワーを浴びると髪を乾かすこともそこそこに、ベッドに横になった。さすがに身体は疲れていたのだ。だが、まだ目は冴えていて眠れる気はあまりしなかった。次から次へと思いが巡るのだ。

もう一度戦って、フランツ・ブランドに勝てるのか？という事や、コンラートやハンスと戦って、エドモンとノエルは生き残れるのか……といった考えたくもない疑問。それは、昔から心のどこかにあった「明日の保障の無い生」の恐怖に結びつき、何より、憎んでもいない人間と戦う不条理に対する怒りに変わる。だが、それらを、「大空を駆け、舞う喜び」に比べれば取るに足りない事だと自らの神経を塗りつぶした時、アルベール・フォンクはアルベール・フォンクとして眠りに落ちたのだった。

がちがちと奥歯が鳴る音が聞こえる。

「おい、エドモン、お前はそんなに腰抜けか！？今日の敵がそんなに怖かったのか？」

ベッドの中で、汗にまみれて目を覚ましたエドモンは、そう自問した。手足を抱え込むようにして、自分の身体が丸くなっているのがわかる。

「そうだ、俺は死にたくないんだ……だから、戦うしか無いんだ……」

思いを定めると、手足を伸ばしてもう一度眠りにつく事にした……まだ、二時間は寝られるはずだから……。

薄闇の中でノエル・アジエは思う。

少し自惚れていたのかも知れない……と。

けれど、自惚れが無い者が撃墜王などと呼ばれることも出来ないだろう……。もしも落とされる事があるとして、今日の敵ならばあ  
るいは納得出来るというものだ。そう思える敵に出会ったという事  
が不思議と嬉しく思えるのだった。

## 赤の章 12（後書き）

赤の章の中盤あたりです。



## 赤の章 13

アルベール・フォンク達パイロットが属す組織の正式名称は、ス克蘭共和国陸軍航空団という。その組織が誕生してからは、未だ8年の歳月しか経っておらず、航空団の下部に属す空戦団が誕生してから、未だ5年という浅い歴史しか持たない。

最高司令官はランディ・ヴァレリアン中将という人物で、元は騎兵の出身であった。

だが、彼は、だからこそ高所に陣を構える有用性を誰よりも認識しており、どこよりも高所にたどり着く『飛行機』という存在に目をつけた。それゆえに八年前、騎兵連隊長の職を投げうち、新しい可能性としての『航空団』を作り上げたのだ。

初年度、彼の『航空団』はパイロットが僅か三名、飛行機は五機、という有様であった。しかし、彼はめげず、産業省に『戦闘機』の有用性を訴え、上層部を説得して、翌年には士官学校に航空科を創設、同時に航空兵学校も設立。最初のパイロット三名は教官となり、五機の飛行機は練習機となったのである。

また、士官学校航空科、設立初年度に入学した者の中に、アルベール・フォンクの名を見ることが出来る。彼は、当初から事『飛行機』の事に関してずば抜けた才能を発揮した。まず、初年度半年の地上学科教習を終え、空を飛び始めるや二ヶ月で三名の教官の空戦技をすべて習得し、一年時が終わる頃には三名の教官は、彼にまったく敵わないというほどの成長を見せた。

それらを見たランディ・ヴァレリアンは、いよいよ戦闘部隊である『空戦団』を創設させるべく動き始めた。その為に『空戦隊』を組織し、まず、三名の教官のうち一名はそのままに、二名にそれぞれ第一空戦隊、第二空戦隊を預けた。

「一個空戦隊は三十六機で構成され、二個空戦隊をもって、空戦団とする」これが五年前に産声を上げたばかりの空の戦闘集団と呼

べる、スクラン初の組織なのであった。現在では、空戦隊が四つ程増設されているので、空戦団そのものも組織の変更があり、第一、第二、第三空戦隊をもって第一空戦団、第四、第五、第六空戦隊を持って第二空戦団、それを統括指揮する組織が航空団、となるのである。

その中でアルベール・フォンクが預かり、編成した空戦隊の正式名称は第二空戦隊であるが、『それをなぜフォンク空戦隊と呼ぶようになったのか?』という理由は、実は些細な事なのである。

つまり、アルベール・フォンクの他の追隨をゆるさぬ武勲を背景に、編成時、別名としてフォンク空戦隊と呼ぶことをランディ・ヴァレリアンが国家に提案し、認めさせたという事なのである。

当時のランディ・ヴァレリアンとしては、優秀なパイロットは喉から手が出るほど必要で、それにはパイロットの【英雄】が必要であった という事なのだ。

また、現状では慢性的なパイロット養成の必要性和実質的パイロット不足から、各空戦隊正規パイロットの下に二名の航空科四年、もしくは航空兵学校二年の学生が実技教習としてつくのである。

結果、現在アルベール・フォンクが統率する戦闘機は合計百八機であり、その数でそれに倍する敵を今までは退けてきていたのだった。

一夜明けて、多少の寝不足のまま、アルベール・フォンクは地上軍との会議やパイロット達とのブリーフィングを終えると、時刻はすでに十二時を過ぎていた。

まず、地上軍とのブリーフィングでは、様々な情報が行きかっているようであったが、結局、要約すると、昨日の口から出たでまかせが、今日となると現実味を帯びてきているような、そんな話の流れであった。

「ベーゼル帝国が南部からの侵攻作戦を企図している、つまり、

我々の基地が狙われている、ということだ」

このように、クッキー好きの我が司令官、ロベール閣下が断言していたのだ。

その情報は今朝、未明に首都の軍司令部より入ったらしい。だが、当然深夜のこと、司令官は泥酔して就寝中であり、リアルタイムでその情報に接した訳ではなく、闇が光に世界の支配権を譲り渡した後、爽やかではない朝食と共に、その体内に取り入れたのである。そして付け加えれば、ベーゼル側は、機甲師団が二、空戦隊が一、追加されて、合計の戦力で言えば、地上軍は我方の二倍、航空戦力は三倍であるという、実にありがたくもない確たる情報も届いていたのである。

その理由も明白で、ベーゼル帝国の東部戦線が勝利により終結したのである。結果、東部戦線に配備されていた空戦隊の一部と、中央の防衛を担当していた無傷の機甲師団がこちらに流れてきた、という次第である。

「いわゆる、連合国崩壊の危機、というやつだ」

アルベール・フォンクは、ロベール少将から促されて早口に防衛作戦の説明をする参謀長の話を聞きながら、そう考えていた。同時に、制空権を奪われたら、その時点で終わりだ、とも。

「援軍のめどは？せめて航空兵力だけでも……三倍の差はさすがに辛い」

と、言うには言ってみたものの、各空戦隊の状況はランディ・ヴァレリアン中將から聞いて知っている。むしろ、話すたびに「北部、中部とも苦戦だ、打開する為に行け」と言われる有様なのである。当然、ロベール少将にしてみたところで国内に救援を求められる部隊の目処が立っているはずもなく「現在、上層部が同盟国に連絡を取っている」というだけで、国内に救援に来てくれる部隊はいないのである。

それらの話を総合した結果、アルベール・フォンクとしては、現有戦力を持って敵戦力と直接対決に及んだ場合、「彼我の純粋な戦

力差により勝利は望むべくもない」と結論付け、「持てる最大の航空兵力による奇襲」という作戦を具申した。

「私としては、三倍の敵をわざわざ待っていてやる必要を認めませんね。減らせるものは、今日のうちにも減らしておきたいものです」

「やってくれるか！」

ロベール少将もさすがに憔悴した表情で、アルベール・フォンクにすがる様な眼を向ける。

「やるしかないでしょう。今のまま三倍の敵に囲まれば、我々は確実に全滅です……では、すぐに奇襲作戦を作成し、実行に移します……許可は？」

「よからう！ 攻撃許可を与える！」

この時ほどロベール少将は、アルベール・フォンクという存在を頼もしく感じたことはなかった。だが、同時にそれはアルベール・フォンクにとつては、疎ましさ以外のなにものでもなく、

「だが、別に好き好んで敵に攻め込む訳でもないし、何より、お前の為ではないぞ」

と、危うく口に出すところであつた……

その後、素早く作戦計画をノエル・アジェ、エドモン・バルビエ等、空戦隊幹部達と作成し、装備などを手配すると、続くパイロット達のブリーフィングでは、アルベール・フォンクにしては珍しいことであるが、その終了時、セカンドパイロット達を含む150名に訓示をしたのである。

「ここ数日のうちに俺たちは、三倍の戦力と戦う事になるだろう。正直、冗談じゃない。そうだろう、みんな。だから、今日のうちに半分に減らしてやろうぜ！」と。

この言葉は、絶望的な戦力差という不安要素を抱えたパイロット達に、ささやかな希望を与えることに成功した。そもそもがスクラン最強を謳われる空戦隊のパイロット達なのである。決死の覚悟等

を司令官に説かれるよりも、陽気な指揮官に「ちよつと敵を倒してこようぜ！」と言われる方が、余程、勇気付けられるのであった。

「隊長、何ボーつとしてるんです？ 12時過ぎましたよ、メシを食いにいきましょう」

訓示も終わり、各自退出した後のブリーフィングルームで、地図を見つめて動かないアルベール・フォンクに、ノエル・アジェが笑顔で声をかけた。すぐ後ろに、エドモン・バルビエもいる。

彼等二人には分かっているのだ。状況の急激な変化に対応するには、自身がより急激に変化する必要がある、今、この基地は変化に晒されている。そして、その変化に対応できるのは、アルベール・フォンク唯一人だという事を。その責任の重さに、アルベール・フォンクは一言の不満を漏らすことなく耐えているのだ、と。

「そうだな」

アルベール・フォンクも笑顔で応じた。二人の部下の気遣いが嬉しく、自然と笑顔がこぼれたのだ。だからこそ、誰も死なせたくなものだ、と思わずにはいられなかった。

三人が仕官食堂につくと、そこはそれなりに喧騒に包まれており、それなりの平和が保たれていた。

いかに敵の侵攻作戦があるといっても、今、現在それが来ている訳ではない。食べられるものは食べられるうちに食べておく、という現実主義者がスクラン人には多いのだ。

「大丈夫ですかね？」

全員が席に着くなり、エドモンはアルベール・フォンクに聞く。当然、今日の事だ。

「どう、と言われてもな」

暖かいビーフシチューをスプーンですくって口に運ぼうとしていたところなので、アルベール・フォンクは、まずは食を優先する。

「実際、正面から敵とぶつかったら悪戯に若者を死なせるだけだ

ろう？だから、今日のうちに出来るだけ数を減らしておくのさ」

二口程シチューを口に入れたところで、アルベール・フォンクは、そう答えた。

「もう、機体のテストだけをしている余裕もない……という事でしようか？」

ノエル・アジエもやはり気になっていたらしく、口を開く。

「もちろん、余裕はないが……でも、まずはテストだ。ただ、そんなことは数分で終わるしな、ダメなら作戦は中止。大丈夫なら、先にこっちから攻め込んでやろうってことだ……大体、攻められるのを待ってても良いことは一つもないだろう？」

ニヤリと笑い、二人を見て、アルベール・フォンクは言った。

「ただ……彼等が素直に奇襲を許してくれますかね？」

昨日の今日である。敵のエースの事を考えれば、一筋縄でいかないであろう事を、ノエル・アジエは懸念している。また、何より今回ノエル・アジエは基地の留守部隊を指揮する為に、テスト以降は不参加となるのだ。万が一の時、自分がいない事も不安要素の一つなのだ。

「だから最初にチェックをするんだ。少なくとも、ほぼ互角の旋回性能になっていなければ話にならないからな。だが、その問題がクリア出来ていたなら……奴らが許す許さないの問題じゃない、いつも通りやるだけだ」

アルベール・フォンクは、褐色の目に光を湛えて言った。

「了解です」

アルベール・フォンクの力強い言葉に二人は飲まれて、同時に、そう口にした。

「この人がいる限り負ける事はない」

ノエル・アジエ、エドモン・バルビエという稀代の撃墜王二人にすらそう思わせる程の迫力を、この赤毛の撃墜王は持っていたのである。



## 赤の章 13 (後書き)

ちよつと説明くさい話ですみません。



## 赤の章 14

ナント基地の周囲は、新緑が陽光にきらめき、柔らかな風があたりを包んでいる。

時刻は十三時三十分を過ぎ、アルベール・フォンクは百五十名の第二空戦隊パイロット達を格納庫の外、つまりは飛行場に集め、自らは彼等の眼前にある壇上にあつて、改めて作戦内容を確認した。

「侵攻にあたっては、一端南西に進路を取り、その後、海上に出たら東へ、後に北に向かう手順で敵拠点に近づく。リムスブル近くにある敵拠点についたら俺の指示で散開、直下の航空機に手榴弾を投げろ！なお、敵との交戦は極力避けて逃げる。爆弾が全弾命中しても、敵の総力は俺たちの倍以上だ！まともにぶつかるな！」

アルベール・フォンクは、強気な口調で弱気な内容を言い切った。  
「では、諸君の健闘を祈る！！行け！！」

続いて、同じく壇上、アルベール・フォンクの左に控えていたノエルが号令をかけ、隊員は一斉に各自の戦闘機の下へゆく。

「なんだ、ノエル？不満そうだな」

壇上から降りつつアルベール・フォンクは声をかけた。

「いえ、不満というわけではありませんが……」

「ノエルは寂しがり屋なんだよなあ」

ノエルの言葉に、壇上では右に控えていたエドモンが間髪をいれず茶化しに入る。

「俺としては、有能な人間に留守を守って欲しいだけなんだがな……で、うちで最も有能なのは、二人……そのうち一人はこれだ……仕方ないだろ……」

エドモンのきょとんとした顔を一瞥して、アルベール・フォンクは言った。

「な……隊長、俺だって留守くらい守れますよっ……」

自分には無理だという言い回しに気がついたエドモンは、慌てて

言う。

「ほう、じゃあ代わってくれるのか？」

ノエルは嬉しそうにエドモンの腕を、軽く小突いた。

「代わらない！俺はあんまり留守番ってガラじゃないからね！」

小突かれた方のエドモンは、小突かれた方の腕をさすりながら、不満げに答える。ノエルの「軽く」は、通常の人間にとつて、強打に値するのだ。

「どちらにしても、今回はそうそう余裕のある闘いじゃないからな……俺が率いてゆく七十二人全員が一人一機を潰したとしても、それでも敵はこちらの全機の倍以上が残る計算だ。本当なら学生は連れて行きたく無いんだがな……背に腹は代えられん。それに、もししたら今日にも敵さんが、こつちに攻めてくる可能性もある。その時の押さえはどうしても必要だろ」

エドモンの拒否はともかくとして、アルベール・フォンクの珍しく真面目な説明を聞かされれば、ノエルもおとなしく引き下がる他なかった。

「わかりました、ご無事の帰還をお待ちしております」

そう言つと、敬礼を残し、ノエル・アジエは愛機に向かう。テストの為に、一応、空には上がるのだ。

「まあ、実際ノエルの方が防御に向いていると思います。指揮官としても、俺より優秀だ。だから、今回の人事、俺も、これしかなかっただろうと思います。まあ、ノエル本人の意思はともかくとして、ですがね」

ノエルに対する多くの同情と、多少の羨望を言葉に含ませつつ言う、エドモン・バルビエも愛機に向かっていった。

時刻は十三時五十二分。まず、テスト飛行を行う改修済みのニュー・ローラン三十六機が滑走路に並び、エンジンの轟音を響かせている。無論、その中に真紅のニュー・ローランが含まれるのは言うまでも無い。

アルベール・フォンクは、銀色の懷中時計を取り出し時刻を確認した。

「よし」

ペダルを踏み込みエンジンの力をさらに引き出す。轟音は爆音に取って代わり、真紅の機体は前進を始める。滑走路の中央に進むと一気に加速し、しばらくすると「ふわり」と宙に浮く。

一分ほど上昇を続けると、すぐに二番機、三番機が上がってくる。それらはアルベール・フォンクが直接率いる中隊の機体である。彼等はいずれも、エドモン・バルビエ、ノエル・アジエには及ばないものの歴戦の勇士と呼ぶに相応しい者達であった。

四十分弱の時間、アルベール・フォンクは上昇、下降、旋回を繰り返して性能を確かめたが、昨日の課題はクリアしていた。ちょうどその確認を終えた頃、改修していない作戦用の48機も空に上がりきり、待機している状態となっていた。

アルベール・フォンクは機体を左右に振って作戦開始の合図を全機に送る。すると、即座にアルベール・フォンクの機体を先頭に三十六機の第一中隊、その右後方にエドモン機を先頭にした三十六機の第三中隊が展開した。

ノエルの第2中隊は、七十二機の作戦機後方を旋回しつつ見送ると、基地に帰還していったのである。

高度は三千メートル、方角は、まず南西へ向かう。これは擬態である。それから本来の目的である東へ向い、最後に北上し、リムス・ブル方面へ。海と雲にまぎれてベーゼルの基地に近づければ重畳そう考えながら、アルベール・フォンクは真紅の機体を駆る。

「これが戦争でなければ最高なんだがな……」

およそ軍人とは思えないような事を考えながら、速度と時間と方位を見てすばやく位置を計算する。そろそろ北上する頃合だった。

この日、幸運だった事は、海上に雲が多く、上手くそれに紛れ込

めたために敵の索敵網にかからず、結果として何の妨害も無くベール領内に侵攻出来たことである。

ナントの基地を飛び立つて訳2時間強、アルベール・フォンクの計算どおり、リムスブル近くのベール帝国軍基地を発見したフォンク空戦隊は、その光景をみて息を飲んだ。

眼下の空港には、確かに二百機を超えるであろう数の戦闘機。近くの陸軍基地には、装甲車が百両近く……。『これで正面から攻められたらたまったものではない』と、おそらく、フォンク空戦隊の全員が思ったであろう。幸い、基地の直上に航空機の姿はない。もしも眼下にある航空機の他に、空にある航空機があるならば、索敵の為に各方面に散っているものであるうが、今はその存在を気にしている場合ではない。

アルベール・フォンクは高度一気に下げて爆撃の体制に入る。

爆撃と言っても、これは彼にとっても人類史にとっても初めてのことである。だが、それは、高度三百メートル程まで一気に下げ、そこから戦闘機をめぐけて手榴弾を投擲し着弾までに上昇するという、ただそれだけのこともあった。

そもそも、見た限りでも飛行場一帯は、ベール帝国の戦闘機で埋め尽くされているのだ。仮に外したとしても大きくは外れない。実際、アルベール・フォンクの初撃は、見事にベール帝国の三枚羽一機を撃破した。

それに習い、エドモン機も同様の事を繰り返す。さすがにエドモンも飲み込みが早く、同じく一機を撃破していた。

フォンク空戦隊で数えて六機目がその行為を繰り返した時、基地からけたたましい警報が鳴り響き、地上にいる人々が武器を手に取り始めた。

「さすがに対応は早いカ」

アルベール・フォンクは舌打ちをしつつも、すでに2撃目に入っていた。だが今度は、下げる高度を五百メートル程度までにして投

下する。地上からの対空射撃が始まった為だ。

「まだいけるな」

部下達も五百メートル付近で投下を続けた。

地上では三枚羽の戦闘機が爆発炎上し、それに付随するように存在していた地上車両も戦闘機の生み出す爆炎に飲み込まれ、黒煙を上げていた。だが、それでも、勇気を持つて地上から舞い上がろうとしている戦闘機も多い。当然である。戦闘機が地上で破壊されるなど、屈辱以外のなにものでもないのだ。

だが、アルベール・フォンクは、舞い上がるうとする敵戦闘機をめぐめて容赦なく手榴弾を落とし、機銃を掃射した。

「悪く思ふなよ、一応、祖国愛ってやつが俺にもあるんで……潔く負けてやるわけにもいかん！」

圧倒的に有利な立場から攻撃をする罪悪感を、アルベール・フォンクは『祖国愛』という名のオブラートに包んで飲み込んだ。それでも、一撃を与える事に苦味は増してゆく。

立ち上る炎は基地の建物をはるかに超え、黒煙が雲にも届く程になった頃、西から見覚えのある機体が猛然と迫ってくる。数は……二十と少し。あまり多くないが、地上から上がってくる戦闘機も増えつつある。戦果も十分で、こちらの損害もまだ無い。

「潮時だ」

アルベール・フォンクは、当初からの作戦計画通り、機首を西へ向けた。そんな隊長機の動作を見逃す者は、フォンク空戦隊にはいない。当然のように全員が機首を西に向け、帰還の途につく。

その方向からは、フランス・ブランドの漆黒の機体が迫っていたが、二十数機ならば、まだ問題にはならない、数ではこちらが圧倒的に勝るのだ。そして、昨日いた二人の撃墜王もいない、正面から一気に抜ければ良いだけだ。何よりも、最短距離でナントに帰還する方が得策なのだ。

だが……アルベール・フォンクは「ぎり」と自らが奥歯をかみ締める音を聞いた。

前方ではこちらの意図を正確に見抜いているであろうフランチ・ブランドが、上昇をかけている。

「この戦力差でも戦うつもりか！」

アルベール・フォンクは激しく舌打ちした。だが、すぐに信号弾を撃ち、編隊に散開、戦闘開始の命令を送り、自身も一気に上昇をかける。押さえないといけないのは、漆黒の機体を駆る、フランチ・ブランドのみであった。

一撃して敵を怯ませ、部隊を一気に撤退させる。それが今とりうる最良の選択肢である、と、考えたが、「やはり、とことんまでフランチ・ブランドと戦いたい」という思いは内在し、自らの表情が、それを雄弁に語っている事を、アルベール・フォンクは気づいてはいなかった……

## 赤の章 14（後書き）

13話と4話の加筆修正もしました。

多分、完結するまでちょこちょこ加筆修正すると思います。

なので、変な箇所を見つけたら教えていただけるとありがたいです。

## 赤の章 15

アルベール・フォンクの眼前に漆黒の機体が迫る。互いに相手の上に出ようと上昇しつつ直進をしていたのだ。結果、互いに互いの上を取る事はかなわず、左に避けてかわすことになった。

だが、その時に僅かに見えたフランツ・ブランドの瞳は、アルベール・フォンクに「なぜ？」と問いかけているようにも見えた。

「戦争には、勝たなければいけないという前提もあるんだ、悪く思うな」

と、ばつの悪い気持ちを隠す為に、誰に言うわけでもなくアルベール・フォンクは声に出して言う。

その間にも、真紅の機体をそのまま大きく左に旋回させて、フランツ・ブランドの機体の後ろに付こうと試みる。

その瞬間。

エドモンがフランツ・ブランド機の上を押さえ、機銃を放つ。

数に勝るがゆえに、エドモンはアルベール・フォンクに加勢することが出来た。この強敵と二機で渡り合おうという事だろう。

「ちっ」

アルベール・フォンクは舌打ちを禁じえなかった。

無論、エドモンの機銃にやられるような失態を漆黒の機体の主が犯すはずもなく、難なく宙返りをする、そのままエドモン機の背後に付く。

エドモンは、宙返り、旋回、下降を試みるが、漆黒の機体はピタリと付いて離れない。それどころか、背後からのすばやい機銃攻撃でエドモンは、被弾もしていた。

アルベール・フォンクは一端下降し、フランツ・ブランドの視界から自らをはずして、そこから一気にパワーペダルを踏み込みこんだ。そして真紅の機体がもつ最大速度で、フランツ・ブランドの左翼後方に出現した。即座に機銃は咆哮を上げ、漆黒の機体の後方下



部に7・7ミリの弾丸がすいこまれてゆく。

否……正確には、吸い込まれてゆくかに見えた。

フランツ・ブランドの駆る漆黒の機体は、上昇してアルベール・フォンクの攻撃を僅かの差でかわしていたのだ。そして、その勢いのままで大空に円を描いてゆく。それは、そのままアルベール・フォンクの背後に回る事を意味し、再度、真紅の機体を狙うという意思表示に他ならない。

だが、アルベール・フォンクも、それを黙ってみている程お人よしでもない。漆黒の機体の尾翼を、正確に追尾してゆく。

それにより開放されたエドモンは、一人、安堵のため息をついていた。

「まさかここまでの實力差があるとは思わなかった……」

まさに、アルベール・フォンクの機銃が数秒遅ければ、今、エドモン・バルビエは「空」にいる事は出来なかったであろう。

エドモンは、さすがに、もう、あの二人の戦いに入り込もうという気は失っていた。

ふと、エドモンは北の空を見ると、暗緑色の機体が十数機迫っていた。東の基地からも三十、四十と舞い上がってくる。

アルベール・フォンクも気がついていて。そして、おそらく北か、基地からか、その両方かに、ハンスとコンラエートの両エースも含まれているであろう事も。

「退くなら今なんだが……」

フォンク空戦隊は偵察から帰還してきたのであろう敵部隊に一撃を与え、現在、この空域の制空権をほぼ奪っているのだ。むしろ、今を逃せば撤退のチャンス逃すであろう。

アルベール・フォンクは、ベーゼルきつての空戦の名手と背後の取り合いを続けるなかで、覚悟を決めて撤退の信号弾を上げた。

そのアルベール・フォンクの行動は、部隊長として正しかった。だが、撃墜王としては、その信号弾を上げる動作は致命的な危機を呼び寄せた。自らの背後にフランツ・ブランドの機体を迎える結果

になつてしまつたのである。

「やむをえん」

アルベール・フォンクは急降下をかけた。機銃の射線を外す為だ。すると、眼下には、撤退を始めた味方機の集団と、それを追う敵機の集団が見えた。

「ええい！ついでだつ！！」

そう言つて、暗緑色の機体に機銃を浴びせかけつつ、一気に地上二百メートル付近まで下がる。当然の如く暗緑色の機体は、黒煙を上げ、空での制御を失い地上に吸い込まれていった。

フランツ・ブランドもアルベール・フォンクを追つて、さらに高度を下げる。

まだだ……。

アルベール・フォンクは、操縦桿をさらに押し込んで下降を続ける。そして、高度が五十メートルを僅かにきつた所で、パワーペダルを踏み込みエンジンを最大出力に、操縦桿を一気に手前に戻す。だが、機体の下降は止まらない。地上と僅か数メートルというところで真紅の機体は揚力を取り戻し、そこから円を描いて漆黒の機体の後部、上方に出る。

漆黒の機体もアルベール・フォンクと同じ軌道で追っていたものの、急降下からの急上昇に対応することに僅かにタイムラグがあった。

その僅かな隙を見逃すアルベール・フォンクではない。

バリバリバリ……と咆哮を上げて再度、真紅の機体から放たれる弾丸が漆黒の機体を襲う。漆黒の機体は上昇をかけている最中だ。そして上昇しなければ下は地上、上昇すれば、弾丸。逃げ場など、並みのパイロットには到底無く、撃墜王と言えども、回避方法は、到底、考え得ないはずであった。

だが、フランツ・ブランドは並みの撃墜王ではなかったのだ。

機体後部に僅かな着弾を認めたものの、アルベール・フォンクの意図を悟ると、その瞬間に、機体を捻るように回転させながら、上

昇らせてゆく。それにより、放たれた弾丸の射線から、僅かに機体をそらしていったのだ。

「まったく、何てやつだ」

アルベール・フォンクは、この恐るべき敵に対して、思わず感嘆の声を上げていた。

すでに、ここで交戦を始めてから、二時間近くが経過していた。

この時刻ともなると、いかに初夏とは言え、太陽は西の地平線に身体を半分ほど預けて居眠りを始め、代わって、はかなげな月が天空に瞬き始める。大気は未だ、赤と青と濃紺のコントラストに彩られているものの、あと三十分もすれば夜の闇に取って代わられ、天空では月と星々が、仲良くダンスを踊る時刻になるのである。

そんな中、アルベール・フォンクは、フランツ・ブランドと交戦しつつ、おおよその味方の撤退を見届け、同時に多くの敵に囲まれてしまった己の状態を認識していた。

「戦いつつ逃げるっていうのは、こんなに難しいか……」

旋回しつつ僅かに上昇を繰り返し、雲の中に逃げ込んで、そうひとりごちた。

上昇する過程で目の前にいた敵は、すべて叩き落としてはいるものの、いかにも多勢に無勢であり、燃料はもはや『空』に近い状態であった。

だが、せめてもの幸運と言えば、アルベール・フォンクが雲に紛れて暫くすると、ベーゼル側の基地から撤退命令の信号弾が上がったことだ。それ故に、敵に囲まれた状況からは、なんとか逃れることが出来た。おそらく、たった一機の敵に多数の戦力を割き続ける事を、基地司令官あたりが嫌ったのであろう。

だが残念なことに、フランツ・ブランドは、命令に従う気がないのか、逃がしてやろうという優しさが無いのか、それとも互いの距離が近すぎて、「離脱できるほどの隙が、互いに作れない」だけなのか……どちらにしろ、互いに撤退のタイミングを測りかね、いつ

までも交戦を続けるという状況に陥ってしまっているのだ。

また、バリバリバリ！と、下方から機銃の咆哮が聞こえる。

それがアルベール・フォンクを狙ったものであることは明白だ。それを右に旋回して避けると、漆黒の機体が雲の中に躍り出る。

その時、アルベール・フォンクは漆黒の機体の後方から流れる、薄黒い液体を見た。燃料が漏れているのだ。エンジンの音もどうもおかしい。その後すぐに力尽きたように漆黒の機体のエンジンは止まり、滑空に入った。

「なるほど、燃料切れは俺だけじゃなかったか」

フランツ・ブランドの機体は、一度入った雲を抜け、機首を東に向ける。

「この期に及んで一応は……帰るつもりか」

アルベール・フォンクは愉快だった。これは、フランツ・ブランドに空中戦で勝利したと言える出来事であったし、何よりフランツ・ブランドの潔さも良かった。燃料が無くなったから戦えない、だからそのまま自分に背を向けて、撃ちたければ撃てと言わんばかりに戦場から立ち去ろうとする。

「どうせ滑空だ、あいつもリムス・ブルまでたどり着かないだろう。俺もナントにはとどかないな……」

ならば……と。

アルベール・フォンクは一度パワーペダルを踏み込むと、漆黒の機体の左側に、真紅の機体を寄せる。

もう、攻撃する気もおきなかったのだ。そこまで堂々と背中を向けられては、逆に、撃てる筈もなかった。ならばせめて横に並んで言ってやりたい言葉があった。

「俺の勝ちだー!!」

アルベール・フォンクは右を向くと、フランツ・ブランドに大声で叫んだ。

その時……

真紅の機体が不平の声を一度だけ上げて、沈黙した。

アルベール・フォンクの機体も、エンジンが止まったのだ。

「あははははは……！」

アルベール・フォンクにとって、誠に不本意であった事は、自らの勝利宣言は自らのエンジン音にかき消され、フ란ツ・ブランドの笑い声だけが大空に響いたことであつた。

だが、考えてみれば、なんとも間の抜けた話である。そう思った時、自らの事でありながらも、アルベール・フォンクも、つられて笑い始めたのであつた。

空は、いよいよ闇の勢力が拡大を始め、それに対抗するように星々が瞬き初める。その下では、真紅と漆黒の推力を持たない機体を駆る二人の撃墜王が、もはや意味も無く笑い続けていたのだった。

ベーゼル帝国に占拠された街、リムス・ブル近郊にある基地から西に四十キロ程、スクラン共和国ナント基地方面へ向かった上空に、アルベール・フォンクとフランツ・ブランドはいた。

真紅の機体は西へ向かおうとし、漆黒の機体が追いつがる、という構図が訳二時間程も続いたためである。アルベール・フォンクとしては、思うほどナントの基地に近づけず、フランツ・ブランドとしては、予想以上にリムス・ブルの基地から離れてしまった、というところである。

どちらにしても、夕闇に包まれつつある大空で、『滑空しつつ笑い続ける』事にしばらくして飽きた二人の撃墜王は、結果として、どちらとも無く『近くの安全な地上に降りるという』結論に至り、近隣の草原に着陸することにしたのである。

ただ、着陸するとしても、先に下りる方は少なくとも、一方に自らの背を見せなければいけない。だからアルベール・フォンクはあえて先に、自分の機体を草原に滑り込ませてみせた。続いてフランツ・ブランドの漆黒の機体が、真紅の機体の近くまで滑り込んでゆく。

別に今更フランツ・ブランドが自分を撃つとは思わなかったが、何となく自分の背中を見せてやりたかったのだ。

先に下りるとアルベール・フォンクは、飛行帽とゴーグルを脱ぎ捨て、飛行機の車輪を背もたれにして、一息つくことにした。

しばらくするとそこに、先ほど着陸したばかりの、やはり黒い飛行服を着たフランツ・ブランドが、同じく飛行帽とゴーグルを脱ぎ捨てながら近づいてくる。脱ぎ捨てた帽子の中からは黄金色の髪があふれ、捨てたゴーグルの内側からは蒼氷色の瞳が現れた。その姿は、アルベール・フォンクの目を、大きく、丸くさせるのに十分な驚きをもっていた。つまり、イレエネ・ブランドその人であったの

だ。

「どういう……ことだ？」

いくらアルベール・フォンクが空の事以外は鈍感だからといって、目の前に立つ美女が、フランツ・ブランドという名の男であるとは、どうしても思えなかった。

「どういうことだ、とは、どういう事だ？　むしろ、こちらがそれを聞きたい……なんで銃でも構えて待ち受けていないんだ？　敵に對して失礼な奴だな」

アルベール・フォンクの疑念など齒牙にもかけた様子は無く、イレネ・ブランドの姿をしたパイロットは、事もなげに言った。その表情は不愉快そうだが、声の響きは律動的で嫌味はない。

「そんな事をする位なら、空で殺している。大体、それがわかってるから、その……君も無防備にそこに立っているんだろう？　イレネ嬢」

アルベール・フォンクは、浮かぶ疑念を断定的な言葉にして問いかける。フランツ・ブランドとイレネ・ブランドが兄妹だとしても、男女の差を見間違う程ではないはずだ。

「……うん？　それもそうだ。たしかにお前がその気だったら、おれは空で殺されてるな……」

右手の人差し指を顎にあてて考え込む仕草を見せると、彼女は思い出したように答えた。

「あ、そうそう、それとな、おれはフランツ・ブランドだぞ……説明のしかたが難しいのだけど」

それから、さらに首をかしげ、考え込みながら言葉を選んで紡ぎ、重要な事を伝える。

その言葉を聞いたアルベール・フォンクはあっけに取られたように、フランツ・ブランドの顔を覗き込んだ。（どうみても、イレネだろう？）

「双子だとも言うのか？　声も一緒じゃないか」

「双子ではないな……兄妹だけど……そうだな、もつとも簡単な説明をするならば、『二重人格』、という言い方が一番当てはまる。おれは、イレエネの身体を借りて戦闘機に乗っている、ということだ。いや、むしろそういう事にしておいてくれ」

「つまり、イレエネでもある、という事か？」

「いや、今のおれは、イレエネじゃない。ああ、身体はイレエネのものだけどな……なんというか、イレエネは今、眠っているから……戦うのは怖いからって。それはそうと、おい、おまえ！ おれの妹を軽々しく呼び捨てにするな！ まだそんな仲じゃないだろうが！」

説明する為、苦悩にしかめていた表情を、一瞬にして怒りに歪めたフランツ・ブランドと名乗る美女は、アルベール・フォンクの、座ったまま伸ばしている足の裏を蹴飛ばした。

「まあ、いい。とりあえず、あんたがフランツ・ブランドで、イレエネ嬢の兄で、さっきまで戦っていたって事は事実なんだろう。ついでに言えば、『まだ』イレエネ嬢を呼び捨てにしちゃいけないって事は、いつか呼び捨てに出来る可能性があるという事だろう？ ははは」

蹴飛ばされたアルベール・フォンクはそう言って勢いよく立ち上がると、フランツ・ブランドに反撃を加えてやろうと思ったが、立ち上がってみるとフランツ・ブランドは、やはり自分の鼻あたりまでしか身長がない、しかも紛れも無く女性の体躯であったので、やめる事にしたのである。なにより、イレエネの身体に傷などつけられない、と思ったのだ。

「どちらにしても、聞きたいことがあったんだ……フランツ」

「なんだ？ いや、その前に、フランツと呼んで良いか、その辺を確認しろ、バカ赤頭」

怒りの冷めないフランツ・ブランドの口調は未だ厳しく、唇を尖らせて顔を背ける。

「な……！ ……フランツと呼んでいいのか？」



それと察したアルベール・フォンクは、ばかばかしいとは思いつながら、静かな口調で問う。謝る理由までは見出せないが、なだめる必要はありそうだった。

「別にかまわない、遠慮なくそう呼べ。で、聞きたいことと言うのは、どうせ最初の戦闘で、なんでおれが笑顔だったか、だろ？ アルベールがその理由を聞きたがつてたつて、イレエネが言つてたからわかる」

アルベール・フォンクの素直な態度に、いとも簡単に機嫌を直したフランツ・ブランドは、笑顔で向き直った。

「質問の内容はそうだが、言いたい事が増えた。俺の事は確認なしでアルベールか？」

「なんだ、じゃあバカ赤頭と呼んだほうがいいのか？」

「良いわけあるかつ！」

「あはははは！ やっぱりお前は馬鹿なんだろう？」

フランツ・ブランドは、蒼い瞳に水晶の様な涙を浮かべながら、本当におかしそうにアルベール・フォンクを見つめながら笑った。

「で、本題はなんだつけ？ あ、最初にあつた時の笑顔の理由……だったな」

「……そうだ、それを知りたくてリムス・ブルまで行つたんだぞ」「そうそう、そんなことの為にわざわざお前、来たんだよなあ！

あはは……まあ、悪かつたな、あの時おれが出てきてやれば話が早かつただけどさ、さすがに人前じゃコロつと変わる訳にもいかなからなあ……でもさ……イレエネがかわりに答えてくれただろ？」

『あの時』と同じ笑顔で、フランツ・ブランドはアルベール・フォンクを見つめながら言った。

「もう一度、会いたかつた……と？」

「うん、そう。なんかさ、初めてだったんだよ……互角の相手と戦つたのも、決着がつかなかったのも。そりゃ、次は決着をつけたいと思うだろ？ だから、また会つて決着をつけよう！ ってな」

「だとしても、笑つてる必要もないんじゃないか？ 健闘を称え合

うのは、そりゃ解るが、俺はお前の味方を落としてたんだぞ」

「笑ってる必要って言われても……嬉しかったんだから仕方ないだろ。でも、だからお前、不思議そうな顔をしてたんだろ？　つまり、おれの表情を普通に見てたってことでさ、それも嬉しいよな。あんな状態でも、お互いを正確に認識してるって、やっぱり他の奴には無理だ。それに、味方を落とされたと言っても、戦争なんだ……それでいちいち人を憎んで殺そうとしてたら、人間なんて誰もいなくなっちまうだろ？」

「なるほど。だから、戦いが終わったら恨みつこなし、って事だな。本当にそうありたいものだ……そうは言っても、今日は流石に怒っていたんだろ、フランス？」

「怒るって程じゃないけどな。仕方なかったんだろうけど、飛んでない戦闘機を潰すとかそういうのって無抵抗の相手を叩くとか、殴るとか、そんな感じだろ？　そういうやり方は、あまり好きになれないんだよ。だからな、今度からあんな作戦を立てるなら、おれの許可を取れよ」

「……ほう、じゃあ許可を求める事にするから住所を教えてくださいか？　きちんと事前に相談しに行こう。お前が俺の身の安全を保障してくれるならな」

暫く話していると、アルベール・フォンクはフランス・ブランドの紡ぎ出す言葉が、自身が理想とし、漠然と考え、だが、半ば他人に対しては諦めていた事が実に多く含まれていることに気がついた。しかも、それが「当然」であるかの如く、全てを肯定しているのだ。それはフランス・ブランドの音楽的な響きを持つ声と共に自身の内部に染み渡り、駆け抜けていった。

自然、アルベール・フォンクは柔らかない笑顔をフランス・ブランドに向け、それに答えるように彼も微笑を返す。

その場にもしも二人の関係性を知らない他者が存在したならば、恋人同士が、まるで他愛の無い会話を楽しんでいるように見えただろう。

そのとき、一陣の風が舞い、フランス・ブランドの黄金色の髪に、エメラルドの様な若草が数本、纏わりついた。

それをアルベール・フォンクは、ごく自然に取り除こうと、髪に僅かに触れると、

「おい、気持ち悪いぞ、あんまり寄るな、そして触るな」

そのとたん、すぐにフランス・ブランドは眉間に皺を寄せて言い放った。

「草だ、草がついていたんだ！というか……折角のよい雰囲気登台無しにするような事を……」

「何が草だ！勝手に良い雰囲気になるな。草がついていたなら言ってくれ！自分で取るから！言っておくがおれは男だ、男と良い雰囲気になっても何も嬉しくないんだからな、覚えておけ！」

「今、絶対良い雰囲気になってると思ったんだがなあ……だったら素直に男の身体にその精神を入れてもらって、イレ－ネ嬢にその身体を返してくれよ！……あ！そうだ、第二案として、お前が素直に女である事を受け入れるというのもありだろう？」

「そんな事が出来たらこんな事になってないだろ！……第二案は、考慮の余地も無い、却下！」

「……残念だ……！というか、なんでそんな事になってるんだ？フランス」

「事は国家機密にかかわる。おいそれと他国の馬鹿に言えるもんか！」

「心配するなよ……俺はそんなに馬鹿じゃないぞ」

「そういうことじゃない……そういうことじゃないが……お前はおれがフランス・ブランドである事を信じてくれるんだ？」

不思議そうに首を捻りつつ、フランス・ブランドはアルベール・フォンクを褐色の瞳を見上げた。

「……本人がさっきからそう言うのだから、信じる他にどうしろというんだ？」

アルベール・フォンクにとって、フランス・ブランドとイレ－ネ・

ブランドはすでに『別人』であった。何をどう理解するのではなく、ありのままを受け入れた時、そう納得していたのである。何より、黄金のような神々しさと水晶のような静謐さを併せ持つイレネと、獅子のような猛々しさと、子供のような騒々しさを併せもつフラッツを同一視出来る人間の方が、もはや不思議だと思える。

そんなアルベール・フォンクの思いを見て取ったフランツ・ブランドの蒼氷色の瞳は、一瞬閉じられ、もう一度アルベール・フォンクを見据えた時には、ある種の覚悟の色が浮かんでいた。

「わかった……少しだけ話をしよう……」

時間は僅かに遡る……

機体に被弾しつつも、漆黒の機体から離れたエドモンは、アルベール・フォンクに感謝の念を抱く時間さえ与えられないまま、次の敵に遭遇していた。ベーゼルの基地から新たに上昇してきた機体だ。敵機は、上昇しつつ機銃を掃射してくるが、エドモンはそれを左旋回で巧みに避け、そのまま直進してゆく敵機の後方に、自らの機体を付けた。機銃を一閃させると、暗緑色の敵機後部から一度の爆発と、それに続く炎上が見られる。

「やっぱり俺の腕は悪くない……」

そうしてエドモンが自信を取り戻すと、撤退の信号弾があがる。

エドモンもすばやく信号弾を挙げ、中隊をまとめに入った。

視界にはアルベール・フォンクの真紅の機体とフランツ・ブランドの漆黒の機体を捕らえたが、僅かにアルベール・フォンクが優勢のように見えた。とは言え、そのまま真紅の機体が離脱出来るようにも見えず、かといって加勢したとしても、先ほどのようになる事は目に見えている。

エドモンは、意を決した。

「帰投する」

北からの偵察部隊には、先日のエースパイロット二人の機体も見

えた。下方からも続々と戦闘機が上がってくる。

損害は増やせない、何よりアルベール・フォンクが帰還せよと言っているのだ。ならば、部下としてやるべき事は、兵の安全を考えて、出来る限り多くの人員を帰還させることなのである。

## 赤の章 17

エドモン・バルビエは、自らの駆る銀灰色の機体の持つ性能の限界を感じていた。昨日、改修をしたことにより旋回性能は向上したものの、それでもバーゼルの機体には僅かに及ばないのだ。

とは言え、撤退時、幸いであつた事はバーゼル側の戦闘機が基地から離れる事を嫌い、三十分も西に向けて飛ぶと、暗緑色の追撃してくる影がいなくなってくれた事であろう。

ナントの基地に近づくと、味方機が数機、警戒の為に上空を旋回していた。エドモンはその機体と基地の仲間に一度宙返りを見せることで、今回の戦果の大きさを伝えた。

実際、バーゼル側に与えた損害は地上にいる戦闘機を五十機、空中でも十機は落としている。対してこちらの損害は、四機、未帰還が一機であり、戦果としては最高のもので、十倍以上の大差をつけての勝利であつた。フォンク空戦隊の輝かしい武勲史に、また一つの彩りが加えられたのである。

ただし、未帰還の1が他にもないアルベール・フォンクの隊長機であり、その事を知ったナントの基地は、最高司令官を除く総員を上げて、今時大戦始まって以来の重い空気に支配されることになったのである。

「エドモン！！貴様どういふつもりだ！？ 隊長を見捨ててのこの帰ってきたつてのか！？」

エドモンの胸倉を掴んだノエルの怒声が、格納庫内に響く。

守備部隊を預かつていたノエル・アジエは、なにかあれば即座に動けるようにと、格納庫に待機していたのだ。そこに被弾したエドモン機とエドモン・バルビエ本人が帰還し、詳しく事情を聞くうちにノエルが激怒したのである。

「見捨てる訳ないだろ！ なんならこれからもう一度出撃したって

いい！俺は隊長が【帰還せよ】っていう信号弾をだしたからそれを全力で守ろうとしただけだ！……大体、俺が隊長の側で戦っても足手まといになるだけだと思っただよ」

そう言つと、ノエルの巨軀を小柄なエドモンは睨みつけた。

「足手まとい？お前が？そんな馬鹿な話、信じられるか！」

ノエルは怪訝そうな表情を浮かべ、今まで掴んでいたエドモンの胸倉を開放する。

「あの、黒い機体は異常だ。俺は一瞬でやられるところだった。それを隊長が助けてくれたんだ。多分、俺とお前の二人でかかったとしても、勝てないだろう」

思い出して悔しさがこみ上げてきたエドモンは、ノエルから一端目を逸らすと、ギリッと一度だけ歯をきしませた。

「どっちにしても、隊長を見捨てたと言われればそれまでだ、もう一度出る」

人を見捨てるくらいなら、自分が死ぬ方がましだ。そうエドモンは思った。それを察したノエルも、さすがにばつが悪そうな表情を浮かべた。

「すまん、言い過ぎた……お前は待っていてくれ、疲れているだろうから……俺が探しに行く、大体、もう一度出るって……戦闘機で行ってどうするってんだ？」

「じゃあ戦闘機で行くのはやめるが、それでも俺は行く」

ノエルはエドモンを呆れ顔で見つめたが、それは心からのものではなく、むしろ親愛の情を込めたものであった。

事が決まりさえすればもはや言い争う事もなく、彼等の行動は早い。すぐに事の顛末をエドモンとノエルは基地司令官の下に報告に行き、アルベール・フォンク救出作戦の必要性を説き、「承知」の一言を甘党の我等が司令官閣下から引きずり出すよう、尽力を始めた。

だが、あたりは夕闇が迫り、基地司令官ロベール少将としては今

回の戦果に大変満足しており、即座に次の作戦を立て、実行する気持ちはなれなかったのである。ましてや、この基地の武勲の立役者とは言え、厄介者のアルベール・フォンク救出の作戦など、思いもよらぬ事であったのだ。積極的に「死ねば良い」とは考えないまでも、「別に助からなくても構わぬ」程度には思っていたのだ。しかも、今は彼にとつて大切なディナーの時間が迫っていたのだ。ましてや、そのディナーの相手というのがスクラン人では知らぬものがおらぬであろう程有名な女優であり、未だ独身のロベール少将にしてみれば、今夜は一世一代の大勝負になるのである。そんな下らぬ作戦の最高責任者として基地に縛り付けられてはたまつたものではないのだ。

だが、表立つて彼が口にした理由は、当然の事ながらそのような事ではない。曰く……

「夜間は奇襲があるかも知れず、悪戯に兵を動かすべきではない、今夜は警戒を厳にして備えよ。搜索は明日で良い」  
で、あつた。

実に正当な理由である。そのように言われてしまえば、地上で動く術とてない二人である。考える事はただ一つ。司令官室から空戦隊の仕官室に戻るまでの通路で、ノエルがエドモンに問いかける。  
「搜索は明日で良くて、救出は今日でなければ駄目だろうが……夜に、また飛ぶか？」

「もう、それしか、ないだろう」

即座にエドモンも応じた。同じ事を考えていたのであろう。

ある意味では、フォンク空戦隊においていつも通りの会話の流れである。そしていつもなら互いにここで顔でも見合わせて不敵な笑みを交差させるのだが、今回ばかりは笑い合う余裕が、どこを探しても見つからない二人なのであつた。

二人は軽い食事をすませると、格納庫に再度集まり、「夜間の奇襲に備える為の偵察」という名目で二人乗りの飛行機を二機、格納



庫から飛行場に運び出した。

そこに至るまでに、二人が士官室で夜間の飛行計画を練っている最中、アルベール・フォンク直属の小隊長たちまでもがこぞって「参加したい」と言ってきた事には、さすがの二人も弱り「お前たちまで外に出たら、いったい誰がこの基地の防空を担うんだ？」と、自分達の事を棚に上げて言ったものである。

だから、アルベール・フォンクが帰って来ないなどという事は、この空戦隊においてあつてはならない事なのだ。そのことは整備兵に至るまで共通事項のようで、二人が搭乗すべき偵察機二機は、完璧に整備され、かつ磨かれて、鈍く銀灰色の輝きを放ち、アルベール・フォンク救出の為に攻撃する時を待ちわびていたのである。

時刻はすでに二十一時を少し回っていた。この時間になれば国境付近に出たとしても、敵の姿は無いであろう。仮にあったとしても飛行機ならば戻り、報告をすれば良いだけの話である。それこそ偵察の名目も立つと言うものであった。

「ノエル、エドモン……わしはアルベールに酒を奢ってもらう約束をしていたんだ。だから……」

初老の整備士長が二人の前に進み出て、ポツリ、ポツリと言葉を紡いだ。その表情は硬く、陰りが見えた。

「わかつているよ、ピエールさん、あの人が死ぬわけないって。大体、最後に見たときだってあの黒いヤツに勝ちそうだったんだ。多分、今頃は燃料が切れちゃって不時着して……どこかでふらふらしてるだけだよ……ちゃんと見つけて拾って帰ってくるから」

エドモンは、初老の整備士長の肩に手を軽く乗せると、安心させるさせるようにゆっくりとした口調で言った。

基地の沈痛な思いなど知る由もないアルベール・フォンク本人は、同時刻、至って健康な状態であり、左耳では初夏の虫の鳴き声を聞きつつ、右耳で口汚く自らの生い立ちを語る「自称男」の美声を聞きながら、足取りも軽く歩いていたのだ。もしも問題があるとすれば、わずかばかりの「空腹」とでも答えたであろう。つまり、エド

モンの言った言葉は半ば事実であつたのである。

だが、この時は、未だ彼の無事も空腹も確認されておらず、気楽なアルベール・フォンク氏の消息を、沈鬱な基地の面々は、ただひたすらに求めて止まなかつたのである。

そういつた訳で、後々振り返れば滑稽な事ではあるが、この時はノエルも真実を知らないままエドモンに同調して、

「そうだな、元気にふらふら歩いてるさ」

と、言い、自らの陰鬱な表情を打ち消すように無理やり大きく笑つていたのだ。

ここにいる人々を安心させるには、やはり「アルベール・フォンクには、万が一の事など無い」と思わせるしかないのである。そして、そう思わせる事が可能なのは、どれ程自らの心に不安を抱えていたとしても、やはり残つた撃墜王であるこの二人だけなのであり、その責任を彼等は果たそうとしたのである。

「さあ、エドモン、そろそろ行こうか」

ノエルはそう言うのと飛行機に乗り込み、手早くエンジンを始動させる。普段搭乗しているニューローランよりもエンジン音は柔らかい。

エドモンも整備士長に軽く手を振つて機体に滑り込む。

昨日に引き続き、今日も夜間に偵察飛行をすることになるとは、数日前には夢にも思わなかつた二人であつた。そして、昨日と変わらない事は、月が天空に煌々と輝き、二人の前途を照らしてくれていること。違いは、燃えるような赤毛を持つスクラン最高の撃墜王が、二人の行く手を導いてはくれないことであつた。

スクラン最強の天空の騎士とも、赤い悪魔とも呼ばれるアルベル・フォンクは、今、ベーゼル最強の天空の騎士、フランツ・ブランドと名乗る美女と歩を共にしつつ、いささか複雑な内容の話を聞き終ったところであつた。

話の内容は、フランツ・ブランドという人物の生い立ちから死、そして不本意な形で再生をに加え、それを可能にした科学技術に応用する事によつての『スクラン首都への大量殺戮兵器による攻撃計画』、というものであつたが、アルベル・フォンクとしては前半部分は同情とおかしさ半分といった体で聞き流せていたが、その後半部分のベーゼル側の作戦計画あたりになると、流石に聞き流せる話ではなくなっていた。

時刻は、二十一時に僅かに回っていた。

「なるほど……大変だな……」

「別におれが大変だつてことは、この際どうだつて良いことだ」

アルベル・フォンクの安易な同情の言葉を、イレネ・ブランドの肉体を借り受けたフランツ・ブランドは、少年のような口調で退けた。

「さて、その話を聞いた俺としては、どうすれば良いのかな？」

フランツ・ブランドが自分にこのような話をした理由はおおよそ理解していたが、それでもアルベル・フォンクは直接、その理由を聞きたかつた。

「だからさ……！どうもこうも、ただ同情して欲しくてこんな話をする訳ないだろ。お前はおれに協力する以外の選択の余地が残っていないんだよ、結局さ！」

フランツ・ブランドは蒼氷色の瞳に真摯さを宿し、アルベル・フォンクの褐色の瞳を見つめつつ、脅迫めいた口調で言う。

「わかつた、わかつた……確かに事実なら協力する以外にないな」

静かな声で、だがしつかりとアルベール・フォンクは答えた。当然、最初から答えは決まっていたのだ。

希望があつたとすれば、わずかばかりフランツ・ブランドが困惑の表情の一つも浮かべ、しおらしくもつともらしい理由を述べて協力を要請してくれば良い、と考えていた程度である。そして、そんなさやかな希望は、フランツ・ブランドのにも無い協力強要により、永遠に打ち砕かれた。

どちらにしても、もうフランツ・ブランドと戦う気にはなれない。仮に話の内容が嘘だとしても、その時はその時だった。

「だが、俺だけで良いのか？」

「大丈夫だ、むしろこんな無茶に、お前は他の人間を巻き込みたいか？ アルベール」

「巻き込みたくはないな。じゃあ、勝算はあるのか？ 二人だけで阻止出来るのか？」

「勝算は、ある…… もともとおれ一人でやろうと思っていたんだけど、でもまあ…… この計画が成功した先の事はわからない…… でも、アルベール、どっちにしてもお前は死なせないよ、大丈夫、とにかく任せろ」

「……とにかく任せろなんて言うヤツに任せてろくな目にあつた試しがないが…… いや、おい、まで。そういう間の抜けたセリフは、俺のような美男子がおまえのような美女にいう言葉だろう？」

「だから、おれは男だ、何度言ったらわかるんだ。それと、おれの勝手に巻き込むんだ…… せめて死なせない責任が、俺にはあると思う」

「ふん、じゃあフランツ、おまえは俺を守れ。俺はイレエネを守るから…… 美女を守るのは、強い男の責任だ、というか、そうしておけば二人とも、とりあえずは死なないんじゃないか？」

「アルベール…… お前は本当に適当な奴だなあ」

「スクラン人なんて、こんなものだ」

フランツ・ブランドは、「そんなわけないだろ！」と言おうとし

てやめた。アルベール・フォンクの表情にはある種の覚悟の色が浮かんでいたのだ。その覚悟をいとも容易く泰然としてしまうこの男に相応しい言葉を言おうと思ったからだ。

「ありがとう、アルベール……」

アルベール・フォンクとフランツ・ブランドは、共に歩んでいた足を止めると、二人の眼前には月光に照らされて、煌々と水面が輝く小川が現れた。

「ここに出ると知っていたのか？」

フランツ・ブランドは小首をかしげつつ、聞いた。今まで話をしながら、何となくアルベール・フォンクの行く道を辿っていただけに、そこに目的地があっただけでも驚いたのだ。

「ああ、あの場にいても、ここまで来ても喉は渴くだろう？ たいして離れていない場所に水場があるなら、飲み水は確保したいからな……ローヌ川の支流の支流でイゼール川と言う……お前、どこに向かっているかも知らずについてきていたのか？」

腰を落とし、川の水を水筒に入れながらも、呆れたようにアルベール・フォンクは答えた。

「うるさいな！ いいじゃないか！……川の名前くらい知っている。ついでに言えば、およそ五百五十年前にこの場所で、おまえ達の先祖とおれたちの先祖は、今のおまえ達の同盟国と大きな戦いをした事も知っている、『アヴァロン会戦』って言うんだぞ！ お前はそこまで知ってるのか！？」

フランツ・ブランドもアルベール・フォンクにならない、水筒に水を汲んだ。そして、次の言葉で唐突に会話の流れをかえる。「適当についてきた」事を指摘された事に対しての、一応の反撃である。

「なあ、ところでアルベール。イレエネのことをどう思ってるんだ？」

「どう……って……その顔でそんな事を言うのはやめろ……」  
いったんフランツ・ブランドに向いていた顔を逸らしながら、ア

ルベール・フォンクは答えた。声には動揺の色がみえる。

「ほら答える。兄として知っておきたい」

フランツ・ブランドは、逸らされたアルベール・フォンクの視線の先に回りこんで、再び問いただす。

「ま、魅力的だと思う……スクランにはいないような雰囲気が好きだ」

さらに視線を逸らしながら、アルベール・フォンクはふてくされた様に答えた。

「ふふふ、あはは、会いたいかな？」

フランツ・ブランドはおかしな事を聞く。だが、アルベール・フォンクは、その意味をもはや正確に理解していた。

「そうだな。せっかくだ、会わせてくれ……」

フランツ・ブランドは、イレエネ・ブランドの表情の満面に勝利の笑みを浮かべつつ、一言だけ発した。

「よかるう、特別だ」

「複雑で……すみません」

先ほどのまでの悪戯っぽく表情をころろと変える「フランツ・ブランド」とは違ってかわって、実にしおらしい「イレエネ・ブランド」が謝罪の意をアルベール・フォンクに言葉をもって示していた。「いや、かまわない、おおよそ理解しました」

先ほどのフランツ・ブランドの説明では、あくまでもイレエネ・ブランドの体であるため、フランツの意識がその体を支配出来る時間、実のところあまり長くなく、また、イレエネ本人が望まなければ顕現化出来ない。その上、フランツの記憶はイレエネの人格にも刻まれるが、イレエネの記憶はフランツの人格にも刻まれない……だから、イレエネがフランツの気持ちを代弁する事が出来たとしても、その逆は不可能、ということであった。

だとすれば、イレエネが先ほどの話の流れを理解していたとしても不思議はないのだ。アルベール・フォンクとしては、どこまでの

会話を聞かれていたのかが気になった。

「大体、聞いていたのかな？」

「はい、大体……」

そう言つて微笑するイレネの顔は、先ほどのフランツが操つていた時の表情とはまるで違い、穏やかだ。

「……フランツは……いや、あなたも、辛かつたでしょう？ もしかしたら、フランツは自らの計画で他国の人命を救つて、それに殉じるつもりだったのかもしれない」

「ええ……本当は覚悟していました。兄も、私も……でも……」

「そうですね、だが、イレネ……あなたの身体を思えば、フランツはいくら人助けだといつても、自分の我が侘であなたまで死なせる事が、辛くなつたのかもしれない……それで俺に協力しろと」

遙か天空に浮かぶ月を見つめつつ、アルベール・フォンクはさり気なくイレネをファーストネームで呼んでみた。だが、自身の心の動揺は激しく、それを誤魔化す為に腕組みをした。

「でも、そんな兄の計画に二つ返事で同意してくれたのは、あなたです」

イレネ・ブランドは呼び方を気にした風もなく、月光に照らされて淡く輝くアルベール・フォンクの赤毛を見つめる。赤毛の下には無理に引き結んだ口と、力みすぎた腕組みを見つけたが、何故、彼がそうなつてしまつたのかは解らなかつた。

「……子供のころ友人がいたんですよ。近所ではあまり評判の良くない悪ガキでね……フランツみたいな性格だつたかな。粗暴な癖に正義感が妙に強くて……大人の不正を許せないような、良い奴だつた。なにより俺にとっては大切な友人だつた。ある日、そのうちの妹がギャングにさらわれてね……そのうちの両親は怯えながら警察に全てを任せようとしていたんだけど、奴は違つた。一人で妹を助けに行つたんですよ。ただね……さすがに相手が悪かつた。結局、兄も妹も助からなかつた。当時、俺と一緒に行ってたら何かが変わつたかといえ、そんな事はないかも知れないけど……一緒に行つてや

らなかった事は、今でも後悔しているんです」

「まあ、昔話です」……と、話の終わりにアルベール・フォンクは月から視線を外して、イレーネ・ブランドに向き直りながら付け加えた。

「ありがとう」

イレーネ・ブランドは心からそう思い、言った。そういえば、最近は心からの感謝の言葉は減っているな、と思いつつ。

アルベール・フォンクとイレーネ・ブランドは、イゼール川から、もともと歩いてきた道を辿り、戦闘機までの道を歩く。あたりは月明かりと星明りが照らし、幻想的なまでに美しい草原が広がっていた。

目標の二機の戦闘機は、そんな薄明かりに照らされて、一つは仄かに赤く輝き、一つは闇をさらに深く暗く塗りつぶしたようにして佇み、それぞれの主人を待っていた。

だが、目的地周辺にはその他にも一台のジープがあり、二人の間が待っていた。コンラートとハンスである。

「どうも、そちら側のお迎えだね」

アルベール・フォンクはイレーネ・ブランドに、彼等の元に向かうよう促した。

「あなたは？」

イレーネ・ブランドは、困惑の表情を浮かべ、ためらいがちに歩を止めた。

「俺の迎えもそのうち来るだろうさ……仮に来なくても歩いて帰るだけだよ」

アルベール・フォンクは、つとめて明るく、だが静かな口調で言う。

「……一緒に来ませんか？」

「おいおい、それこそ俺は捕まるだけだよ」

「そんな事にはなりません」



「……だとしても、今行けばフ란ツとの約束が果たせなくなる……」

アルベール・フォンクはそう言うと、イレネ・ブランドの背中を「ぽん」と軽く叩いた。

「ごめんなさい、少し、わがままを言いました」

一歩だけ前に踏み出したイレネ・ブランドは、少しだけ間をあけて、そう言った。微笑を浮かべようと努力したが、僅かに滲む涙が邪魔をして、その完成には至らなかった。

「イレネ……また会えるよ」

アルベール・フォンクは力強く言った。イレネ・ブランドは振り返り、一度だけ頷き、

「はい、きっと」

自らにも言い聞かせるようにそう言って、漆黒の戦闘機のもとへ走り去ってゆく。

アルベール・フォンクは、身を屈め、目立たないように数十秒ほど息を殺していると、戦闘機の方角から「……問題は無い、ご苦労帰還する……」というイレネの、凜とした声が聞こえてきた。おそらく人格をフ란ツに戻したのであろう。その命令の内容が、身を隠しているであろう自分に気を使っている事も、容易に推測できる。

「さて、俺も帰ろうかな……」

身を屈めて息を潜める事数分。ジープのエンジン音が消え、あたりに初夏の虫の鳴き声と、遠くで流れるイゼール川のせせらぎの音が還ってきたとき、アルベール・フォンクは再び天空を見つめた。すると、月明かりの中、僅かに銀灰色に輝くものが二つほど見えた。徐々にこちらに向かっていようだが、鳥ではない。

「やれやれ、今夜はどうやら歩いて帰ることだけは免れそうだ……」  
アルベール・フォンクは、そうひとりごちた。

赤の章  
了

## 赤の章 18（後書き）

途中から1話が長くなっちゃったので、これで赤の章、おしまいです。

次はベーゼル側の視点からの物語になります。  
出来るだけ早く書こうと思います。

## 黒の章 1

この大陸は、遙か太古の昔から数多の国々が生まれ、統一され、分裂し、また統一される、という不毛な行為を数千年間にわたって繰り返して続けている。無論、国家の名称が変わることもしばしばあり、その中で一国を千年の長きにわたり維持してきた国家というものには未だ存在せず、大陸を統一したと呼べる国家ともなれば、その最盛期と呼べる時期は、百年がせいぜいであった。

そんな中、「ベーゼル」という名が国名として歴史に名を連ねるのは、今よりおよそ六百年前のことである。

六百年前、現在のスクラン一帯を治める王の力は強大であり、現在のスクラン全土とベーゼル全土を、その支配下に治めていた。

それに対し、当時の新興国で強大な海軍力を持つ、スクラン北方沿岸の対岸にある島国、「ブリツシュ」の王が、ある日、怒涛の勢いでスクランに上陸し、そのまま僅か一年間で、当時におけるスクラン王国の、国土の三分の二を奪ったのである。

そんな国家存亡の最中、当時スクラン王の下で辺境の一貴族であったフリードリヒ・フォン・ベーゼル伯爵が王宮に野党まがいの傭兵団を率いて現れ、スクラン王に拝謁し、

「私にお任せくだされば、あの野蛮なる海賊共など一ひねりで追い出して差し上げましょう……」

と、飄々と言ったという。

事実、フリードリヒは、その言葉の通り連戦連勝を重ね、ブリツシュに攻め取られたと同じ領土を、やはり同じ期間で取り戻す事に成功した。

これに喜んだスクラン王はフリードリヒに、現在のリユーネブルグのやや南にある都市、アクスブルグを領土として与え、また、同時にフリードリヒに公爵の位と三女を与え、これをもってベーゼル公国としたのが、国家としてのベーゼルの始まりとなるのである。

「以来、バーゼルの当主はフリードリヒを名乗り、同時にその記憶と軍事的才能を受け継いでいる……そして悲願は大陸の統一、とくれば御伽噺の領域を遙かに通り越して、茶番だな」

フ란ツ・ブランド・バーゼルは、子供の頃に教えられた自らの神秘的な可能性と、我が家の歴史と、狂気じみた悲願を、自身の直上にあるライトの光を見つめつつ、朦朧とした意識の中で考えていた。とはいえ、なぜ、自分がそんな事を考えているのかは、定かではない。だが、遠くで「皇家の方でなければこのような事は出来ませんでした」という声を聞いた気もした。だから、自らの考えには、ある程度納得をした。納得しつつ、その日は、意識を失った。

次に目が覚めたときには、意識はすっかりしていた。場所は、調度品こそ豪華な部屋であったが、点滴の針を自分の左腕に刺されており、よくよく部屋を見渡すと医療設備も整っているようである。病院における最高級の一室のようだ。

フ란ツ・ブランドは、もう一度、自分の左腕を見つめた。  
違和感が、あった。

「おれの腕はもっと太い」と思ったのだ。  
不思議に思つて、さらに自分の身体の周りの観察を進めると、もっと驚いたのは、胸が膨らんでいた事である。混乱して、それこそ悲鳴を上げた。上げた悲鳴が、記憶にある自らのものではない事に對しても驚いた。だが、幸いな事に悲鳴を上げるとすぐに医師らしい白衣の人物やってきたので、説明を求める事が出来たのだ。

「どういう事だ……？」

自らの境遇をまるで理解出来ぬまま、震える声を絞り出すようにして、フ란ツ・ブランドは医師に説明を求めた。

「はい、事故に遭われ、意識を失ってしまわれたフ란ツ様をどうしても助けたい、と、イレエネ様が申されまして、もちろん皇帝陛下のご許可も頂きましたゆえに、我々が長年研究しておりました成果の一部を使わせて頂きました。また、この件をご説明するのは

恐れながら7回目でございますが……」

白衣を几帳面に着こなしている初老の医師は、顔面の神経をピクリとも動かさず、冷静に答えた。

「イレネが……？そうか……それよりおれはどうなっている？腕が細いし、胸もある……男の身体ではないようだ……！」

「それは……」

医師に続いて入室した中年の女性看護師に医師が軽く目配せをすると、一端別室に移り、鏡をもってフ란ツの前に現れた。

「イレネ……！？」

鏡に映された自らの姿を見たフ란ツ・ブランドは絶句した。「わが身」に何が起こったのか、にわかには信じられない。だが、一つの事実と一つの疑問がそれぞれわきあがってきた。

事実は、イレネ・ブランドは、ここにいる。

疑問は、イレネ・ブランドはどこにいる？

どちらにしても、鏡に映る顔は、紛れも無く妹であるイレネ・ブランドのものであり、今まで二十四年間慣れ親しんだ、フ란ツ・ブランドという固有名詞をもつはずの、自らの顔は映っていないかったのである。

「……ふむ、混乱されるのも無理からぬ事です……」

フ란ツ・ブランドの混乱を見て取った医師と思しき初老の男は、その混乱が錯乱に変わる前に、手早く自己紹介を始めた。

「私は皇室直属の医師団長を勤めさせていただいております、パウ・シュトラゼと申します……専門は、いわゆる【血の継承】……と申せば皇室の方にはご理解頂きますでしょうか……」

フ란ツ・ブランドは額に手を当てて目を瞑り、【血の継承】について考える。自身の境遇を思うよりはこちらの方が楽だし、それが現在の境遇に繋がる糸口であることは、明白のようでもある。

「ああ、知っている。我が家は、歴代の当主がフリードリヒの人格と記憶を宿す……その継承は、先代の死後、その血が最も濃く現れている者に……だがな、その話は我が家の伝説だろう？ 初代フリ

「ドリヒ陛下のことはベーゼル家に生まれたものならば誰でも知っているし、いくらでもそのように振舞える」

フランツ・ブランドは、【血の継承】等という古代のシャーマニズム的発想など信じていなかった。そもそも、人が空を飛ぶ時代にそんな事があつてたまるか、と。

「さようです。確かに、そのように振舞うことも可能でしょう。また、そう振舞われた方も、歴代の皇帝陛下の中にはおられたのも事実。なにしろ、どの方に降臨されるかは、フリードリヒ陛下にも選べなかったのですから……力の無い者に降臨されても、事実を証明する術とて無い事もあつた訳です。もちろん、ある時は、『たまには市井で過ごすことも悪くない』と思われた事もあるようですが……」

……  
パウル・シュトラークは薄茶色の瞳に僅かな熱を湛えて、静かにゆつくりと話を続ける。

「ですが、本質的にはそれでは困る……とフリードリヒ陛下はお考えになられておりました……。そして、いよいよ先代の御世に、私共、医師団に下命されたのです。『予が望む者が後継となる方法を探せ』と」

「なるほど……で、それと、おれの今の状態になんの関係があるんだ？」

フランツ・ブランドにとって幸いなことは、話そのものに対して興味が無いゆえに、かえって冷静になれたことだ。

「つまり、【血】これを【遺伝情報】と置き換えて言いましょう……通常、ヒトの遺伝情報の中には、その体を構成する情報しか含まれないのですが、ベーゼル皇家の方々の【遺伝情報】には特殊な情報……つまり【記憶】までも含んでおられる事がわかったのです。すなわち、ベーゼル皇家の方々は、個体から個体への記憶と人格の継承が、理論的にも可能なのです」

パウル・シュトラークは、話の最後の方になると、自らの研究成果に陶醉するように天を仰ぎ見て、拳を握り締めて力説をしていた。

「なるほど、つまりはベーゼル家の血を引いている人間ならば、その血によって記憶も人格も継承させる事が出来る、と……で、つまり、何をしたら、おれはこうなったんだ？」

もはや完全に冷静さを取り戻したフランツ・ブランドは、パウル・シュトラーゼの熱を、逆に、自らの蒼氷色の瞳で冷ましつつ、質問をした。

「作業自体は、簡単です。血液そのものを一つの個体から別の個体へ移せば、情報も個体から別の個体へと複製出来るのです、また、それには移した血が多ければ多い程良いのです。つまり、それが、血の最も濃い者に発現するということですね」

「輸血したのか……」

「はい。イレエネさまにフランツさまの血液を……。どちらにしてもフランツさまの肉体は損傷が激しく助からない状態でした。ですのでイレエネさまにご事情をお話し、もっとも血が近いという事で、輸血を致しました。残念でありましたことは、フランツさまの最終的な死因が【出血多量死】であつた事ではありますが……逆に申せば、引き継がれるべき人物の肉体的死をもって【血の継承】は完結いたします……ゆえに、今、貴方様が、ここにおられる訳でございます」

それらの説明によつて、フランツ・ブランドは、現在のおおよその状況はつかめた。

おそらく、今回この身体になつてしまつた事は【実験】でもあつたのであろう。でなければ、いかに皇室に連なるものとは言え、傍流の自分などを助けるはずはないのだ。

「まったく、フリードリヒの野郎……！」と、心底では思つてみたものの、口に出す事は出来ない。これによつて生き長らえたのだ、とも考えられるので、いかに実験体にされたとは言え、表立つて恨み言を言う筋合いでもない気がする。

その前に、どうして自分が死ぬ事になつたのか、そもそもイレエネはどうしたのか……そちらの方が当面の問題である、どうも最後



の記憶が曖昧なのだ。

今は実験の成功に心躍らせているであろう、冷静の仮面をかぶったパウル・シュトラージと、あまり皇室の秘密など聞きたくなさそうな中年の女性看護師を、病室から下がるように合図をすると、フランツ・ブランドは、その当面の問題と、思い出すべき自らの最後について、記憶の糸を手繰り寄せてみる事にしたのであった。

## 黒の章 1（後書き）

黒の章から読み始めてもわかるように書いてゆくつもりです。  
でも、良かったら赤の章から読んでみて下さい。

2011/10/5 加筆修正

## 黒の章 2

自らの最後の記憶を手繰り寄せる、などという行為は、誰にとっても心楽しいはずも無い。いくらフ란ツ・ブランドが、稀代の楽道家だとしても、それは揺ぎ無い事実である。だが、それを曖昧にしたままでこの先を過ごす事が、彼には出来はしないことも、また、自明であつたのだ。

あの日、フ란ツ・ブランドは、大陸大戦前であるならば、帝国領の最も東北に位置する港町フューゲンからさらに三十キロメートル程北東にある北海沿岸の都市、ブリュージュに新設された基地にいた。そして、その都市がもともと所属していた国であるルクセンブルクの首都ベネルクスへ、陸軍の大規模な進行を援護する為の作戦に、第一空戦団の団長として従事していた。

とは言つても、元タルクセンブルクを統治する政府には、ベーゼル帝国に敵対しうる軍事力はすでに無く、同じく連合国側の一員である、さらに東の国「キーエフ共和国」の実質的な援軍と、西部戦線におけるスクラン共和国の健闘によって、無条件降伏という屈辱的な敗北を、僅かに先延ばしにしているに過ぎない、という状況なのだ。

言つなれば、この軍事行動は「ダメ押し」である。

フ란ツ・ブランドは、冬のブリュージュ特有の、北海から流れ込む冬の寒気に身を震わせ、分厚く垂れ込める灰色の雲を眺めやり、軽くため息をついて自らの漆黒に塗られた愛機に向かう。

彼のいる飛行場では、三個空戦隊三百二十四機がエンジンをすでに始動させており、その轟音は北海から降り注ぐ冷氣すら弾き返すかのようである。

「大佐、顔色がすぐれないようですが……」

フランツ・ブランドの後ろから、よく通る声が聞こえた。ハンス・バウアーである。

「こんな天気の日に虐殺に行くんだ。心楽しいはずがないだろう？」  
歩を止めて振り返ると、長身のフランツ・ブランドよりも僅かに背の高いハンス・バウアーの実直そうな灰色の目を見返して、そう答えた。

「は、は……ですがそれは地上軍のこと……我々はキーエフの戦闘機とぶつかるはずでしょう？　で、あれば、我々は、単なる虐殺とも言えません……せいぜい、殺戮です」

ハンス・バウアーと共にフランツ・ブランドの後ろを歩いていたコンラート・アスマンが、両手を広げて諭すように言う。そのダークブルーの瞳には感情を感じさせる色は無く、おそらく自らも納得出来る任務では無い事を、言外に語っていた。

「ふん、そんな事はわかつている……さ、行くぞ」

フランツ・ブランドはそれ以上は語らない。今は語る時ではないし、何よりベーゼルの名を持つ自分が現状のあり方に不満を見せる訳にはいかない。それは幼い頃からの絶対の家訓であり、その家訓は、今もってなお心を縛り付ける鎖なのである。

フランツ・ブランドは、もう一度前を向き、顔までを覆う黄金色の髪を靡かせて、自らの愛機「漆黒のウォルフ」に向かった。

フランツ・ブランドが「漆黒のウォルフ」の前にたどり着くと、意外な人物がその機体の周りをクルリと回って目を輝かせていた。

「やあどうも、殿下。これは実に良い機体ですな。ただ、背中の鉄板をとってしまうのはいただけない、確かに機体が軽量化されて運動性能は上がりますが……これでは後ろから狙われたら命がいくつあっても足りませんぞ」

フランツ・ブランドにとって意外な人物は、亜麻色の癖のある髪と栗色の瞳を持っており、不精に伸ばした髭が、顔全体を薄く覆っている。だが、髭は不潔な印象を与えるようなものではなく、ともすれば優しそうな風貌に、精悍さを与えている。年齢は、四十台半

ばのように見え、また、一応のスーツは着ているものの、その内に秘める肉体は、相当に鍛え抜かれているものである事も見て取れる。「当たらなければ、どうという事は無い」

フランツ・ブランドは、自らの機体を特性を看破した眼前の男に不信感を覚えつつ、答えた。

「で、どこの誰かは知らんが、整備士にしてはきちんとした身なりではないか。おれに何か用か？　今忙しいんだ、用事があるなら手短に頼むぞ」

そして、威嚇するように蒼氷色の瞳に刃を込め、口調には刺を含ませて誰何をする。間違つても整備士にも見えず、文官にも見えないうこの男が、作戦前に、この場に存在する事が不思議であつたからだ。

だが、フランツ・ブランドの刃も刺も、この男を動揺させる事は出来ないようであつた。

「ああ、そうでした。自己紹介がまだのようで、失礼いたしました。私はランディ・ヴァレリアンと申します。このたびベーゼル帝国陸軍特殊作戦局司令長官を拝命致しまして、今回はとある任務の為にこの地にまかりこしました。すると偶然ながら、漆黒の死神と恐れられる撃墜王である貴官がいらつしやると……ですが、出撃前のことと伺いまして……慌ててご挨拶に参つた次第でございます」

さらに自己紹介をしたランディ・ヴァレリアンは、フランツ・ブランドの瞳をじろりと一瞥すると、恭しく敬礼をしてから言葉を続けた。

「もつとも、私の方が殿下より軍隊内での階級は上ですが……」と「なるほど、だが おれの知っているランディ・ヴァレリアンという男はたしか……スクラン防空の責任者であつたはずだぞ？」

驚愕と同様を混ぜ合わせた混乱が、フランツ・ブランドの頭脳を直撃する。

「……ふむ……対外的な私の公の立場というものは、左様でありましょうな。ですが、まあ、私の所属としましては、元々が特殊作戦

局の方でして……いわゆるスパイというヤツで……無論、本名も他にあり、ランディ・ヴァレリアンというのはコードネームですな、が、本名をスパイが名乗ってしまったらオシマイですから。は、は……と、まあそれはさておき、私は、空と飛行機が本当に好きなのです。それは揺るがぬ事実です。ですから、ベーゼル最高のパイロットと名高い貴方にも、一度お会いしておきたいと思ひまして、ね。ま、そう言ってしまうと、大した用事ではありませんでしたな」

ランディ・ヴァレリアンにしては、裏切り者と思われるのは心外だ、と言いたげな表情を浮かべて言葉を発する。

「なるほど、空が好き……か」

奇妙なことに、フランツ・ブランドには、ランディ・ヴァレリアンのその言葉だけは、真実の様に思えた。

「そういえば、スクランにも『赤い悪魔』と我が軍に恐れられる男がいるそうだが、彼ともよく話すのか？」

フランツ・ブランドは、西部戦線から転属された部下の話を思い出していた。部下が言うには「赤い機体を見たら戦おうと思わず、ただ逃げる」これが部隊の鉄則になっていたそうである。同じ空で戦うものとして、

「おれなら決して逃げない」

と思うが、それにしても興味をそえられる相手であった。

「アルベール・フォンクですな……実に、気持ちの良い男です。ああいう男が報われない、そんな体質がスクランという国の根底にある……きっと、貴方とは相性が良いでしょうな……」

ランディ・ヴァレリアンは顎に右手の親指と人差し指をかけ、無精髭を触りながら答える。その言葉には熱は無く、やはり何の感情も無いように聞こえたが、フランツ・ブランドは、彼が嘘を言っているとは思わなかった。

「ふん、貴様の仕事は中々に心苦しい仕事のような、わが国の為に苦労をかけている。……この戦いが終わったら、せめてもの礼に、おれの飛行機で空を案内させてもらおう」

短い時間の対話であつたが、飄々とした雰囲気を漂わせるランディ・ヴァレリアンという人物を、フランツ・ブランドは多少なりとも好ましく思った。飄々としているが芯はある。例え裏切り者の謗りを受けても成すべき事を持っているのであろう。

ランディ・ヴァレリアンもフランツ・ブランドの心の動きに気がついたのであろう、今度は存在感に厚みを加え、柔らかな微笑すら浮かべている。

「ベーゼル最高のパイロットに空を案内していただけるなど、光栄の至り。機会があれば、是非お願いしたいですな」

フランツ・ブランドも微笑を返し、漆黒の愛機に乗り込んだ。

一度だけ手を振り、パワーペダルを踏み込むと、エンジンはうなりを上げて黒煙を二度、上げた。

漆黒の機体はゆっくりと前進を始め、滑走路に入ってゆく。

漆黒の機体は、まだ朝と呼べる時間帯だというのに、まるで日が暮れる前ではないかと疑う程に暗い空へ、吸い込まれるように舞い上がる。上空には、すでに三百を超える暗緑色のウォルフが待機していた。

フランツ・ブランドは、上空で漆黒の機体を、編隊の中央最前列の低位置につけると、進撃の合図を信号弾で撃つ。

地上では、三百機以上のウォルフを視界に収め、苦虫を噛み潰したような表情のランディ・ヴァレリアンが、手のひらの中にある二本のボルトを弄んでいる。

「真っ直ぐに生きる者は、真っ直ぐなままに死ぬ事が幸福というものさ」

誰にも聞こえない、声にもならない声音で一人、ランディ・ヴァレリアンは呟いた。だが、最後の一言は、近くにいるものならば聞こえるであろう声で言う。

「幸運を……」

### 黒の章 3

北の海から吹き込む寒風と、暗く湿った黒雲を背に、フランス・ブランドの率いるベーゼル帝国第一空戦団は一路南下し、ベネルクスを目指していた。

だが、当面の索敵目標は「東」である。ルクセンブルクという名の小国には、まとまった航空兵力ではなく、地上兵力も、もはや組織的に抵抗出来るほどでもない。それでも頑なに無条件降伏を拒むのは、東の大国「キーエフ共和国」からの援軍を頼みにしているからである。ゆえに、キーエフからの航空機を叩く事が、フランス・ブランド率いる空戦団の目的になるのだ。

とは言え、キーエフ共和国にしても、国内やベーゼル帝国以外の諸外国に対し、なんの問題も抱えていない訳でもない。だから、その持てる力の全てをベネルクスの救援に割けるはずもなく、つまるところ、それ故に、どちらにしても、この戦いの帰趨はすでに決している。それでも政治的に解決する事が出来ず、軍事的に攻め込まなければならぬのは、ひとえにベーゼル帝国の諸外国における悪名と、帝国政府の政治体制が、皇帝親政という名の独裁であるが故に、外交において柔軟性が欠如している為である。翻えってみれば、ルクセンブルク政府にしてみたところで、人命よりも政府の体裁を気にする体質等もあり、それらの要因が全て混ぜ合わさり溶け合った結果が、無駄にエネルギーと人命を消費するような、ベネルクス進攻作戦へと繋がったのだ。

いつの世も、そのような事で甚大な被害をこうむるのは、民衆なのである。

「殺さなくても良いものを殺さなければいけないのは気がひける」  
フランス・ブランドは機上で嘯いた。彼は聖人君子とは言えないまでも、殺人を楽しむ趣味はさすがに持ち合わせてはおらず、抵抗



出来る力の無いものを攻める事に対し、罪悪感も感じていた。いっそ、直接街を攻撃しなければいけない地上軍ではない事は、不幸中の幸いであった。

フ란ツ・ブランドが、基地を発進してから、一時間程過ぎた頃である。前方にベネルクスの町並みが見え始めた。遠く上空からでも、数百年前の建築であろう優美な教会、壮麗な城などには、圧倒されるものがある。近づけば、レンガ造りの民家、石畳の街路など、軍靴で踏みしめるには余りに惜しい、美しい町並みがあるのである。

そして、同時に直下ではベーゼル帝国第二軍の三個師団が悠然と展開している姿も見える。此方にも最新の兵器や軍服などに機能美、統制美などは見出すことは出来るが、それでも、前方に広がるベネルクスの町並みと比べると、いかにも無粋であった。

地上軍は軽装の歩兵を中心に、大空を見上げて、上空に展開する空の騎士たちに歓声を上げていた。

フ란ツ・ブランドは、それに答えるように一度だけ急降下して、宙返りをして見せた。まだ戦闘が始まる前の事なので、あまり派手にやりすぎても問題だが、「こんな事で士気が上がるなら安いものだ」と考えたのである。

それから宙返りの余勢をかって上昇を続けた。ベネルクス市街の前方に展開する、ルクセンブルク軍の偵察の為だ。上空から見た限り、そこそこに堅牢そうな土塁を築き、塹壕も掘ってある。兵士の数も、ほぼ同数といえるが、だが、その装備の差は歴然である。

「敵の装備には、戦車はないようだ……」

一応、『地上に降りて、敵の陣容を地上軍に知らせよ』と、手信号で近くの部下に命令を伝えたフ란ツ・ブランドは、全身に緊張の糸を張り、神経を研ぎ澄ますと、次に信号弾を一つ上げた。

『第三空戦隊八周囲二展開、索敵セヨ』

これは、かねてからの作戦通り、ベネルクスの東を中心に全方位

八十キロメートルをカバーするものだ。

その合図を見計らったように、地上軍も前方に広がる平原に向けて進撃を開始した。

平時であれば、大陸一の小麦の収穫量を誇るこの地域一帯を、鋼鉄の騎馬の蹄が無残に引き裂いてゆく。

フランツ・ブランドは、その様子を五百メートル程度の低空から見下ろしていると、ふと、自軍の展開している後方に、戦車四台分もあるであろう、大きな長方形で石灰色をした砲車を見つけた。

「あんな兵器、あつたかな？」

見るからに射程の長そうな長大な砲身を、その巨体に乗せている。一応は自走しているが、その周囲を、ベーゼル帝国の国軍色である暗緑色をした八両の戦車と、同じく八両の特殊車両が固めている。

フランツ・ブランドは小首を傾げつつその上空を旋回したが、よく考えれば詮索しても仕方の無い事であった。

「おれが総指揮を執っている訳でもなし、気にする必要もないな！」

心の中でそう思った時、南方から信号弾が上がった。

『我、会敵セリ、数、甚ダ多シ』

フランツ・ブランドは即座に第一、第二空戦隊に出撃の命を下し、信号弾の上がった方角へ向かう。すなわち、ベネルクスの方角である。第三空戦隊は、そのまま索敵と地上軍の直援の為に、まだ空戦に参加させるつもりはない。

それにしても、どこから機影が現れようと、動揺するつもりなど無かったフランツ・ブランドであったが、まさか敵が真正面から現れるというのは、逆に拍子抜けである。おそらく、事前にベネルクスの空港に、キーエフ共和国は戦闘機を入れて待機させていたのであろうが、（なにも我々と正面から戦う必要は無いではないか……なんの考えもなく現れて……）そう思うと、僅かだが失望の念が禁じえない。当然、東からの増援もあるのであろう。作戦としては挟撃のつもりであろうが、ならばタイミングを完璧に合わせるべきだ。

「出来なければ、おれに各個撃破されるだけだというのがわからないのか！」

フ란ツ・ブランドは舌打ちと共に、パワーペダルを踏み、操縦桿を手前に引いた。それに合わせてエンジンは唸り、機体は上昇を始める。一瞬、右の主翼から（ぱき）と、音が聞こえた気がしたが、特に問題はなさそうに思えたので、気にせずに上昇を続けた。出来れば、早く敵の上を取りたかったのだ。

高度四千メートルを過ぎた頃、眼下二百メートル程度のところに第三空戦隊の二個小隊を見つけ、続いてそれに追従するように飛行する、キーエフの暗褐色の飛行編隊を見つけた。数は百五十というところであろう。

フ란ツ・ブランドは、敵機上空から、敵編隊の中央部に穴を穿つように下降しつつ、七・七ミリの機銃を掃射する。

機銃の餌食とされた一機の暗褐色の戦闘機が黒煙を上げて墜落してゆく。

フ란ツ・ブランドに続いたベーゼル側の戦闘機は、その穿たれた穴をさらに広げるべく、自らの暗緑色の機体を躍らせて、機銃を掃射しつつ突入してゆく。

初撃は確実にベーゼル側の成功である。とは言え、そのままやられるに任せるほど、キーエフの空戦隊も無能な訳ではない。即座に編隊をとりて各個に迎撃体勢に入っている。

「遅いな！」

それでも、歴戦のフ란ツ・ブランドには、その初動が遅いように思えた。

下降つつ攻撃した為、高度が一気に五百メートル程下がったが、再度上昇しつつ、暗褐色の機体の後方をとる。

「二つ！」

-----バババババツ-----

機銃を正確に五発。フ란ツ・ブランドは尾翼を狙い、引き裂いた。それだけで敵機はコントロールを失い落下してゆく。

すぐに後方に2機が迫っていた。

フランツ・ブランドは僅かに下降して、二機の機銃の射線を逸らし、即座に右旋回をして、さらに射線を取れなくすると、一気に上昇して円を描いて敵機の後方につけた。

「三つ！」

「四つ！」

三機目を撃墜すると、その場を逃れようとした四機目の後を追いつ、撃破する。

だが、すぐに今度は三機の敵機が漆黒のウォルフの後方に迫り、機銃を唸らせた。

「ふははっ」

笑みをこぼしつつ、フランツ・ブランドは機体をぐるりと回転させ敵機から放たれる弾丸をかわすと、左に急旋回をして、そのまま敵三機の後方につけた。

そのとき、後方から一機の暗緑色の機体がフランツ・ブランドの右に進み出て、前方右を飛行している暗褐色の機体を打ち抜き、左を向いて軽く敬礼をした。その機体には白い線が斜めに四本程入り、線の中には星型のマークがちりばめられている。星の数は四十一。

「ハンス……一機、スコアを持っていかれたな」

フランツ・ブランドは、それを横目で確認すると、機銃を軽く掃射して「五つ！六つ！」と、撃墜数を増やしてゆく。

「だが、それ以上のスコアはくれてやらん」

当然の事ながらフランツ・ブランドやハンス・バウアーが撃墜を重ねる度に、キーエフ側の空戦能力が減少してゆくのだ。空で戦いの火蓋が切られてから三十分もすると、両軍の損害の差は歴然となっていた。もはやキーエフ側の戦闘機は、当初の三分の一を失っている。

「そろそろ退く頃合だろう？」

どんな部隊であっても、全滅になどなりたくは無いはずだ。フランツ・ブランドは、敵が退却するタイミングを待っていた。

しかし、そんな折、東の空から信号弾が上がった。

「我、会敵セリ、数、甚ダ多シ」

おそらく、キーエフ本国からの増援であろう。

だが、フランス・ブランドは慌てなかった。慌てる必要がなかったのである。予測どおりであったからだ。新たな敵に対しては残りの第三空戦隊に当たらせ、当面の敵を、第一、第二の二個空戦隊で完膚なきまでに叩く。それで、この空域の制空権は、完全に得られるのだ。

増援部隊があつたとして、それでも数も性能もパイロットも、全てにおいてこちらが上であり、負ける道理など無い。勝利は時間の問題なのである。

とは言え、僅かな隙を衝かれれば、地上軍のいる地点まで敵機が飛ぶ事も容易い。そうなれば、敵機が命を懸けて、こちらの地上軍に攻撃を仕掛けることも懸念されるのだ。フランス・ブランドとしては、とにかく、いかに見方の損害を少なくして勝利するか、という事に心を砕いていた。

だが、その事が、自らの愛機の不具合を見逃す油断となり、自身の生命にとっては取り返しのない結末をもたらす事になるのである。

その時は、迫っていた。

### 黒の章 3（後書き）

読んで頂いて、ありがとうございます。

楽しんで頂けたなら、とても嬉しいです。

2011/10/5 加筆修正

## 黒の章 4

フランツ・ブランドの部隊が、ひとまずベネルクス方面の戦闘空域を、おおよそ制圧し終えた頃、地上からは砲声が轟き始めていた。ベーゼル側の陸上部隊は、この時代における最新兵器たる戦車を前面に押し出し、その車体に搭載した五十六ミリの砲弾を、ベネルクス市街地の前面に築き上げられた即席のトーチカに向かって放つ。まずは砲撃によって敵戦力を削り、次に歩兵による突撃を行うのであろう。

ルクセンブルク側は、哀れにも砲弾が届く度に断末魔の叫び声が響き、その叫びの数だけ命が失われてゆくのだった。

フランツ・ブランドは地上で展開される会戦を一瞥すると、即座に、キーエフ本国からの増援部隊と交戦中の第三空戦隊に合流すべく、機首を東に向ける。

この時点でのキーエフの損害は百であり、自軍の損害が十二なので、圧倒的な戦果とすら言えるのだが、編隊を組みなおした時に、それでも味方機が減少している事を気にしてか、フランツ・ブランドは、軽く舌打ちをした。

その直後、フランツ・ブランドの漆黒の機体が、グラリと揺れ、続いて「ミシリ……」と嫌な音が右の主翼から鳴った。

「まずいな……」

フランツ・ブランドは編隊から離れ、不時着の体勢に入る。このまま飛び続ける事は困難であると、ここに至って、そう判断をしたのだ。もちろん、同時に指揮権をコンラート・アスマンに引き渡す為の信号弾も上げた。

だが、この直下は平原であるとは言え、両軍の交戦地帯である。不時着をしても、パラシュートで脱出しても、到底無事に帰れるとは思えない。

そのとき、「ドン」とひときわ大きな砲声が轟いた。見ると、い

つの間にか前面に突出していた、巨大な砲車から、巨大な砲弾が放たれたようだった。

どちらにしても、出来る限りこの空域から離れなければ……と、フランチ・ブランドは考え、パワーペダルを踏み、操縦桿を手前に倒す。

だが、それでも、高度は上がらない。むしろ、下降に速度が加わり、もはや墜落と言える状態となっていた。

「まずい……！」

そう思った刹那、右主翼が音を立てて折れた。折れた破片が、さらに運悪く、尾翼にも当たり、完全に機体はコントロールを失った。しかも、錐揉み状態で下降してゆく。

このままでは敵軍の中に突っ込む事になるが、高度は、まだ千メートル以上あり、脱出の余裕ならばある。

フランチ・ブランドは、漆黒のウォルフを捨てる決意をした。

コックピットに右足をかけ、勢いよく、飛ぶ。出来る限り、機体から離れたい。

「よし」

十分に機体と距離をとり、フランチ・ブランドはパラシュートを開いた。だが、ここで降下しても、結局のところ敵軍に撃たれるか、良くて捕虜。覚悟は出来ていたが、それにしても、この「絶対に勝てる」戦いで戦死するのか」と思うと、自嘲の笑みが浮かんだ。

「さし当たって、スクランの『赤い悪魔』とやらはこんなドジは踏むまいな」

そう思うと、別に死ぬ事は構わないとしても、結局スクラン最強の男と決着をつけられない事は残念だった。この期に及んで、そんなことを考えている自分に嫌気が差さないでもないが、

「所詮おれも軍人か」

と、適当な名目で自らを納得させた。

ならば、せめて地上で一人でも多く殺してやるか……と、腰の銃を確認してみるが、今更そんな事をしてみたところで無意味である



う。

だんだんと地上が近づいてくると、敵軍からの銃弾がパラシュートに当たり始め、耳元でも、銃弾が空気を切り裂く音が聞こえ始めた。だが、幸い、地上までは敵の銃弾に当たることなく、降下できた。

「あとは、なんとか味方のところに……！」

そう思った時、左太ももと腹部に衝撃を感じた。

「くそ！」

フランツ・ブランドは、とつさに腰から銃を引き抜き、応戦する。だが、そもそも射撃がそれほど得意でもない上に、負傷した直後の早撃ちが当たるはずもなく、銃弾は敵兵士の頭上を掠めていった。すぐに敵兵の第二撃に備えるためフランツ・ブランドは走ろうとしたが、足に力が入らず、そのまま崩れ落ちた。大腿骨も砕けていたようだ。

「ここまでか……！」

諦めかけて、最後に自分を殺すのは誰かと敵兵士の顔を見たとき、フランツ・ブランドは驚くべき光景を見た。

敵の兵士が、喉を抑えて、血を吐きながら倒れたのだ。見れば、先ほどまで自分の頭のあった位置に、白い靄のような気体が漂っている。

「毒……！？」

フランツ・ブランドはとつさに、自身の装備品にある簡易の防毒マスクをかぶる。

それでも息は苦しくなり、眩暈と頭痛が襲う。足の出血も、止まる気配を見せない。動脈も撃ち抜かれたのだろうか……。

「そういえば、科学部隊が新兵器を開発した、とか言っていたな……しかし、毒ってのは嫌だな……今はそんなモノなんか使わなくても勝てるだろうに……」

朦朧とする意識の中、フランツ・ブランドは、必死に考えていた。考える事をやめた時が、死ぬ時、そんな気がしていたからだ。たと

えどうでもよいことだとしても、考え続ける必要があった。考え続けている間に味方が来れば助かるのだ。

そして、うつ伏せに倒れていた身体を、仰向けにして、なんとか上体を起こす。その動作に、どれ程の時間がかかったのかもわからない。しかし、自身の身体を眺めると、腹部からの出血は4枚程重ねて着ている上着にまで達し、足の銃傷も、地面に血だまりを作るに至っていた。

もはや、これでは助かるまい。だが、出血の為に死ぬのか、毒によつて死ぬのか、自分でも自分の死因の特定は、とてもではないが出来そうにもない。だが、出来れば、もう少し生きていたかった……。

「寒いな」

フランツ・ブランドは、最後に、ポツリと呟いた。

(……いさま……兄さま……)

「結局、致命傷は腹の傷つてことか？それとも毒か？……どちらにしても、戦闘機が整備不良だったんだ……いや、まて……ランディ・ヴァレリアン……あの男が細工をした可能性もある」

(兄さま！兄さま！)

フランツ・ブランドが、悪寒を伴うような記憶の旅路から帰還したころ、脳内に聞き覚えのある、艶やかな声が鳴り響いた。イレーネの声である。

一応、フランツ・ブランドは起き上がってあたりを見回し、「イレーネらしき人影がないか？」という事を確認してみるが、やはり室内には、点滴を左腕に射したままの、イレーネの肉体を持つ自分しかいなかった。

「気のせいか……」

(気のせいではありません！)

フランツ・ブランドが再び目を閉じ、物思いにふけろうとする事

を止めるように、イレエネの声は言う。

（直接、語りかけているんです……）

「脳内で？」

フランツ・ブランドは、あえて声に出して問う。だが、声に出すと、脳内に響く艶やかな声と区別がつかず、逆に混乱した。

（そうです、兄さまも、別に声に出さなくても私に意志は伝わります）

「なるほど……お互い、頭の中で会話をするって事か」

何かを確認するように、もう一度あたりをくりと見回すと、フランツ・ブランドは、目を閉じた。話相手が外にいないのではなく、自らの内にいるのなら、別に目を開けている必要もない、と思ったのだ。

（不思議だな、今、この身体を動かしているのは、おれ、なんだな？）

（ええ、そうです、でも、何となく代わり方も解るので、ちょっとやってみましょうか……）

イレエネ・ブランドの、その言葉と共に、フランツ・ブランドは身体の内を失った。

イレエネ・ブランドは、目を開き、大きく息を吸った。

（兄さま、兄さま？）

「兄さま、フランツ兄さま？」

最初は頭の中だけで呼びかけ、次に声に出して呼んだが、兄は答えない。

改めて、イレエネは医師の言っていた言葉を思い返した。

「肉体の主人格以外は、その肉体を支配下においている時以外は活動出来ませぬ、また、主人格は、副次的な人格の記憶も共有する事が出来ます」

なるほど、この身体の主人格は私だったのか、と、改めてイレエネは感じた。とは言え、今までの21年間主人格であったのだから、今更、いくら兄とはいえ、主人格の座を譲らずにすんだのは、あり

がたい事であつたかも知れない。

だが、このままでは、せっかく覚醒した兄と会話する事もままならない。イレエネ・ブランドは、兄に、もう一度、肉体の支配権を譲る事にした。

その行為自体は、それほど難しい事ではない。自分が眠るように目を閉じて、意識を薄くし、その過程で兄を呼ぶ。そうすれば、兄の意識が起きてさえいれば、現れるはずであつた。今までは、半信半疑でその行為を繰り返して、兄が顕在化したかと思えば、すぐに意識を失うという事を繰り返していたのだが、今日は、兄がはっきりと言葉を返し、対話する事も出来た。しかも、イレエネ・ブランドの身体を動かしたのだ。イレエネ・ブランドにとって、兄が事故にあつたという知らせを聞いて以来、初めて、希望を持って兄の名を呼ぶことが出来る日になつたのであつた。

（フランツ兄さま……）

呼びかけに答え、フランツ・ブランドはゆっくりと目を開く。

（ああ、すまない、眠ってしまったようだ……）

（ごめんなさい、私が身体を動かしている時、兄さまは意識を保てないみたい）

（イレエネ、よくわからないが……良ければ少し説明してくれないか？どうも、パウル・シュトラークとかいう男に説明をされるのは気に入らないんだ）

こうして、フランツ・ブランドがはつきりと意識を取り戻した初日は、回想と、自身とイレエネに関する説明で終わる。

時は、ベネルクス攻防戦から二十日後の事であつた。

黒の章 4（後書き）

2011/10/5 加筆修正

## 黒の章 5

帝都ヴァルリアの中心部にあるローテンブルク宮殿は、その庭園だけで二十五ヘクタール、その建物の正面部分だけでも七百五十メートル以上あり、大陸でも屈指の壮麗さを誇る宮殿である。

時の皇帝、フリードリヒ・リヒャルト・フォン・ベーゼルは、今その壮麗な宮殿内部の豪華な執務室において、午前中に処理すべき案件の九割を片付け、しばらく前に給仕に運ばせた紅茶に、ようやく口を付けた所であった。時刻はまだ、十時も過ぎていない。

「面会の予定者を通せ」

皇帝は、補佐官にそう伝えたと、飲みかけの紅茶を給仕に下げさせた。一口、喉を潤せば良かったのだ。

「はっ……場所はどちらで？」

「此処でかまわぬ。予には、移動などで無駄に費やせる時などないのだ」

皇帝は眉間に皺を寄せ、鞭のようにぴしゃりと言い放つと、すぐに書類に向かう。処理すべき問題は多いのだ、一秒でも無駄には出ない。

三十代半ばであろう、黒髪瘦身で几帳面そうな補佐官は、恐縮しつつ隣室に向かい、午前の面会者を招いた。

重厚な扉が開き、正面に褐色の巨大なテーブルと、その上で腕を組む初老の厳格そうな人物が、ランディ・ヴァレリアンの視界に入る。

（ふん、皇帝らしくなかったじゃないか、リヒャルト）

白髪の混じる髪を後ろに梳かし、口髭も顎鬚も丁寧に整えられた初老の『皇帝陛下』を一瞥すると、ランディ・ヴァレリアンは、人に聞かれれば不敬罪に問われるであろう感想を脳裏に浮かべた。だが、口に出す言葉は、限りなく恭しい。

「皇帝陛下におかれましては誠に機嫌麗しく……」

作法に則り、丁寧に頭を下げたランディ・ヴァレリアンを、フリードリヒは手で制する。

「無駄な挨拶はよい、何用か？」

「は、フランツ・ブランド様が、昨日、意識を回復された由にございます」

「ふん、そんな事でわざわざ貴様が此处に来るとは、酔狂よな。卿の担当ではなからう？」

「担当ではありませんが、酔狂でもありません……此度は、前回の時と違い、成功致しましたゆえ」

皇帝の眉がぴくりと動き、左右に目を動かす。入り口付近の机には、それぞれ左右に、主席、次席の補佐官がおり、内密の話など出来ないはずだ。

「酔狂ではありませんが、ですが……事は皇室に関わる重大事ゆえ、お人払いを願えましょうか？」

ランディ・ヴァレリアンの声は冷静である。あるいは、皇帝を揶揄する響きすら含んでいた。

「よからう」

皇帝は、補佐官達を下がらせ、ランディ・ヴァレリアンに、さらに近くに来るよう手招きをした。

「血の継承は、前回、失敗している。今回が始めての成功……すなわち……卿はフリードリヒ二世ではない」

皇帝に近づいたランディ・ヴァレリアンは、それでも声を潜め、囁くように言った。

皇帝は、そのままランディ・ヴァレリアンの言葉を待つ。今、迂闊な事を言うべきではなかった。なにより、その事実を知る者は、自分自身が、初代フリードリヒのみのはずなのだ。で、あるならば……一つの可能性はもはや確信へと変わりつつあったのだ。

「ガルミツシュ大公リヒャルトよ、その机の一番左側にある二段目の引き出しを開けてみよ」

ランディ・ヴァレリアンは、褐色の瞳に威圧感を込めて、皇帝を見据える。年齢で言えば、皇帝よりも十歳以上下であるはずなのだが、それでも皇帝は気圧され、その指示に従った。

ここに何かがあると言うのか……とりあえず、中にある書類を机上に置き、引き出しの中を空にして、「次は？」とランディ・ヴァレリアンに指示を促す。

「引き出しの底が、奥にスライドする、すると底から暗証番号による鍵が現れるはずだ」

皇帝は、言われるままに底をスライドさせると、確かに、暗証番号による鍵が現れた。

「……その鍵を開けた中身は予の手記だ。二十五年前のある日で止まっているが……番号は2jq683……」

皇帝は、顔を蒼白にして、わなわなと震えている。無理もない事だ。ランディ・ヴァレリアンとしても、当時の事情を慮れば彼を責める気にもなれない。

「そもそも、その引き出しが二重底になっている事も気がつかなかったであろう？無理からぬ事だ。それは、予が予である事を証明する最後の仕掛けなのだから……予こそ、フリードリヒ・フォン・ベーゼルである」

ランディ・ヴァレリアンの声は、静かだが威厳に満ち、現皇帝を飲み込んでゆく。

「申し訳ございませんぬ……」

精気を失ったような声を現皇帝は発した。二十年以上にわたって皇帝を演じてきたわが身の後ろ暗さが一瞬にして全身を駆け巡り、声からも表情からも精気を奪ってしまったかのようであった。

「別に卿が何かをしたというわけではない、気に病むな。だがな……当時、予は、たしかにガルミツシュ大公であった卿に後を継がせたかったのだ。そう思っていた。しかし、この者になった。これは、あくまで偶然のことである。お互い、運が悪かったのだ」

ランディ・ヴァレリアンのその言葉で、フリードリヒ・リヒャル



トはようやく冷静さと精気を取り戻した。

「ですが、何故もつと早く名乗り出て頂けなかったのでしょうか？」

……出て頂ければ……」

「それは出来なかったのだ。もともと皇太子として立てていた卿に継承出来なかったからと言って、どこの馬の骨ともわからぬこの者が皇帝になどなれぬ。そもそも我々の継承法を知るのは皇族と一部の重臣のみ。仮に名乗り出て帝位についたならば、民が混乱するであろう」

ランディ・ヴァレリアンは自嘲気味に言葉を繋ぐ。

「とは言え、今更に乗ったからには、それなりに意味はある。私の悲願がこの大陸の統一であることは知っていよう……」

「はっ」

現皇帝は、ランディ・ヴァレリアンに対して、もはや何の疑いも持たず、臣下として、子として振舞う事にした。

「ゆえに、ヴァイス・シュツルムの増産をするよう頼みに来たのだ」

「ヴァイス・シュツルム……といいますと……毒ガス……」

「そうだ、その効果は、ベネルクスにおいて実証済みだ。十キログラム程のヴァイス・シュツルムによる攻撃で、建造物などをほぼ無傷のまま制圧出来たのだ。これを増産し、対スクラン戦線において航空機から首都ランスに落としてやれば、都市機能を残したまま人的に壊滅させる事が出来る」

「ですが、人道的には……」

「人道……か。リヒャルトよ……卿の言い分、わからぬではない。だからこそ予がフリードリヒである、と伝えねばならなかったのだ。卿は、『一臣下に毒ガスを増産して欲しい』、などと言われても了承せぬであろうからな。だが、考えてもみよ。この戦い、さらに長引けば、これから一千万人以上が死ぬであろう……今でさえ、すでに三百万人以上の命が失われているのだ。ならば、今後ランスの百万人を犠牲ににして戦争を終結させるか、戦争を長期化させて、さら

に一千万人の犠牲を出すか……まして、これにより早期に決着をつけられれば、その復興は通常兵器での損害に比べ遥かに早い。どちらが本当の意味で、より人道的であるかは、自明であろう」

怜悯な声で、ランディ・ヴァレリアンは言い切る。フリードリヒとて、君主として、政治家として、その理屈はわかる。だが、自らの決断により死んでゆく運命にある人々を思う時、目の前の人物ほど冷徹になりきれないのである。

「そして、大陸を統一する機も熟した。目的は大陸を統一し、統治し、そして

人類の未来を切り開く事である……それが、予、フリードリヒ・フォン・ベーゼルの変わらぬ真意である」

ランディ・ヴァレリアンは、静かに微笑を浮かべながら言った。

「はっ……御心のままに……」

ベーゼル家にとつて、初代フリードリヒの言葉は、『神の言葉』に等しいのだ。否。『神の言葉』そのものと言っても過言ではない。事実、その精神は五百年以上に渡って生き続け、いま、ここにまざまざと事実である事を見せつけられたのだ。現皇帝とて例外ではなく、その前に跪いていた。

「されど、帝位はいかがされましようや？」

現皇帝は、心細げにランディ・ヴァレリアンと名乗るフリードリヒに問う。

「お前とてベーゼルであろう……篡奪された訳でもなし、このままでよからう。また、先ほども申した通り、今更この、どの馬の骨ともわからぬ顔で皇帝になどなれぬ、それこそ国が混乱しようかな」

そう言うつと、ランディ・ヴァレリアンは皇帝に背を向け、執務室から退出した。

ローテンブルク宮殿を出ると、ランディ・ヴァレリアンは、車に乗り込み空港に向かう。中立国を経由して一端スクランに戻る為だ。

（さて、久しぶりにご子息に会えた感想はいかがでしたかな……）

（ふん、子息と言え、みな子息に等しい、感慨などない）

（さようでは、そろそろ私の肉体を返していただきましょうか……）

（ふん、また予を強引に眠らせるつもりか）

（強引などと……私は陛下のご負担を減らしているに過ぎません）

（さて、どうかな？ 予には、それだけには思えぬが……一体、何を考えておる？）

（いいえ、陛下と共通ですよ……大陸の統一……それ以外に何がありましょう）

（ふん）

車の中で、ランディ・ヴァレリアンは、閉じていた目を開いた。隣に座る副官が、気遣わしげな目を向ける。

「考え事をされておいででしたか、閣下」

「いや、少し眠っていた……」

伶俐さと陽気さをその瞳に湛え、副官に答える。まさか、先代の【血の継承】が失敗し、自らの内にフリードリヒ・フォン・ベーゼルがいるのだ、等と言える訳もないのだ。その上、主人格はランディ・ヴァレリアンである自分なのだから、たまったものではない。

だが、ランディ・ヴァレリアンは、最初、絶望し、ある日、気がついたのだ。フリードリヒを最大限利用する方法を……。以来、彼は元来の陽気さを取り戻し、かつ、有能で伶俐な士官となったのである。

「ああ、そうだ、ヴァイス・シュツルムの増産が出来次第リムス・プールの基地へ運ぶように。それから、我々直属の航空兵力を手配しろ。大型輸送機を1と護衛を五十、輸送機の方は、爆弾を地上に落とせるように改装を、護衛は……精鋭を頼む」

ランディ・ヴァレリアンは、車窓から外を覗いた。帝都の景色が見える。石畳の歩道、等間隔に並ぶガス灯、降り続く雪、それらが車のスピードに合わせて後方に流されてゆく。

流れ続ける景色を見つつ、ランディ・ヴァレリアンは、ふと思いで出したように副官に告げた。

「ああ、そうだ、空港に行く前に、車を宮内病院に回してくれ」

黒の章 5（後書き）

2011/10/9 加筆修正

## 黒の章 6

フランツ・ブランドとして意識を取り戻して、二日目の午後である。二日目と言っても、実際に記憶にあるのは、一日あたり四時間から五時間位の時間で、後は寝ているようなもので、気がつくと時間が過ぎている、という状況であった。おそらく、イレネが主として活動しているのであろう。

そう言えば、昨日は左腕に刺さっていた点滴も、今日は無い。

（おはようございます、兄さま）

（おはよう）

たったの一日では、頭の中で会話する事に慣れるには十分な時間とは言いがたいが、それでも、内なるイレネの声に驚かなくなっただけマシである。

（兄さまに面会の方がいらっしゃるそうです）

イレネの声は、優しく語りかけてくる。

ベッドから身を起こし、周りを見渡していると、ドアががちゃりと開いて、パウル・シュトラージが現れた。

「アウラー閣下がお見えです」

「アウラー……？」

聞いた事が無い名だった。閣下というからには将官であろうが、そもそも、ベーゼルに数多い将官をいちいち覚えている訳も無い。だが、せつかく来てくれたのだ。会いたくないから帰れ、とも言えない。

「通せ」

フランツ・ブランドは、不機嫌そうな声で、ベッドに上体を起こしながら言っと、見知った顔が現れた。

「ご無事で何よりです……と言えば良いのか、残念です、と申せば良いのか、小官には判りかねますが……とにかくこの度はご災難でしたな」

亜麻色の髪に褐色の瞳を持つ、屈強な壮年が、愉快そうな瞳を沈痛な色で隠して、フ란ツ・ブランドに声をかける。

「アウラー……その名が、こちらでの名か？ランディ・ヴァレリアン……」

疑惑と好意が入り混じる複雑な心境で、フ란ツ・ブランドは問う。出来れば、この男が自分の戦闘機に細工をしたのではないと、信じたかった。

「はい、さようで」

「だが、なぜ、おれにはランディ・ヴァレリアンと名乗った？」

「殿下に私の素性を隠し立てする必要も無かろうかと思いました。それに、殿下のことです、ニコラス・アウラーという名よりも、ランディ・ヴァレリアンという名の方がご記憶にあったものではございませんでしたかな？……まあ、殿下の反応に興味があったというのが正直なところですが……」

もし、戦闘機に細工をしたのであれば、此处には来れまい……何より、今、目の前で同情と好奇の視線を自分に向けるこの男が、自分を殺そうとするはずもない、とフ란ツ・ブランドにはそう思えた。

「ふむ……それもそうだ。で、お前がなんで、今日ここに？」

「はい、お見舞いに……と申し上げましても、素直に信じてはくれませんまいな。本当は、殿下の直接の死因と、その過程を知りに参りました」

直立不動の姿勢のまま、ランディ・ヴァレリアンは冷徹な声で続ける。

「当日……殿下はガスマスクを付けたまま意識を失っておられたとの事ですが、我々の化学兵器、ヴァイス・シュツルムに対し、どれ程、その防護マスクに耐性があったのか？という事が重要でしたので。……ですが、ヴァイス・シュツルムにより殿下の御身を危険に晒しました事に関しても、お詫び申し上げます」

フ란ツ・ブランドは、図らずも、思い出したくも無い事に関し

ての謝罪をされる事になり、顔をしかめた。

「ふん、おれの死因は『失血』だそうだ。いや、もしかしたら、おれは、そのヴァイス・シュツルムつてのによつて今、こうして、ここにいられるのかも知れないぞ。何しろ、銃で狙撃されている時に、その化学兵器のおかげで敵兵が倒れていったんだからな、たぶん。だから、その件に関して詫びる必要はない」

おそらく、あの攻撃が無ければ銃撃はもっと壮烈なものとなり、フランツ・ブランドの肉体は紙切れのように千切られていたであろう。そうなれば【血の継承】どころではなかったはずだ。

「なるほど……では毒ガスとも言えども役に立った訳ですな、ありがたい事です」

ランディ・ヴァレリアンは、その表情に安堵を色を浮かべ、それから、微笑を浮かべた。

「ああ……敵兵の多くを犠牲に、だ。ただ、おれの心を生かすには役に立ったな。不条理なものだ」

「数多の犠牲を捧げ、救われたのは殿下のお心一つだけ……後悔しておいでですか？」

哀れむように、ランディ・ヴァレリアンはフランツ・ブランドの横顔を見つめた。容姿はイレエ・ブランドのものが、その表情に浮かぶ陰りは、まさしくフランツ・ブランドの経験なくしてはありえぬモノであらう。

「その犠牲がおれのせいではない、とははっきり言えん立場でもあるからな……で、どの位死んだんだ？」

「約五万人。ですが、その犠牲によりルクセンブルクは無条件降伏。それに、近くキーエフが単独講和を受け入れるでしょう。その意味では、他の多くの者も物も、救われたと言えましょう……戦いが長く続けば、それ以上の死者が出ないとも限りませんからな」

「五万人……あの毒ガスの攻撃でか？ならば、敵軍はほぼ全滅であらう……？」

フランツ・ブランドの顔が蒼白になる。パウル・シュトラークが



言うには、自分の身体は病院で死んだはずだ。だが、あの時は、まだ戦闘中だったはずだ。それが、あの白い霧状のもののせいで終結したのか。あれが一拳に五万人を殺害したという事か？それほどに、ヴァイス・シュツルムという化学兵器は、強力な毒なのか？

「さよう……ヴァイス・シュツルム攻撃後、ルクセンブルク軍は一〇分とかからず沈黙致しました。そして前回使用したヴァイス・シュツルムの効果時間は、約一〇分。実験の意味合いも強く、濃度を薄めたものを使用しました。或いは、その事が殿下のお命を救ったのかもしれませんが」

「……民間人の犠牲は？そもそも、ヴァイス・シュツルムとは、どんなものののだ？」

「さて……民間人の犠牲に関して、私は関知する立場にはございませんが、少なかった、とは聞いております。ヴァイス・シュツルムについてですが……これは、そもそも殿下もおっしゃるとおり毒ガスですな。ただし、これまでのモノとは、即効性と致死性が桁違いです。その上、一端気化してしまえば、その痕跡すら残さない……と……つまり、生物を一瞬にして無力化させる、しかし、その後、環境に与える影響は一切無い、というものです。なぜ、そのようなものが開発出来たのか、という事は最重要機密事項に該当いたしますので、いかに殿下と言えども、私の口から申し上げる訳にはまいりません。適正な手続きの後、しかるべき人物から聞いて頂くしかありませんな……」

ランディ・ヴァレリアンは、悪戯っぽく右手の人差し指を口に付け、首を振る。その目は閉じられ内心を推し量る事は出来なそうだが、それを見たフランツ・ブランドは、いらだだしげに舌打ちをした。

「それにしても、フランツ殿下とは思えませんな、もはや」

舌打ちしつつ、さらに質問をぶつけてきそうな勢いのフランツ・ブランドに、ランディ・ヴァレリアンは、機先を制して話題を変えると、フランツ・ブランドは顔を紅潮させた。

「うるさあい！おれだって自分だと思えないんだ！！」

「あ、これは失礼いたしました、では、私は任務がありますので、これにて」

妹の身体になってしまった事は、随分と気にしているようだ……  
と思い、ランディ・ヴァレリアンは内心で苦笑しつつ、敬礼をし、病室を後にしようとする、

「さて」

と、フランツ・ブランドが呼び止める。

「お前は、なぜ、あの時、おれの戦闘機の特性を知ったんだ？」  
表情はイレネ・ブランドのものが、眼光は、やはりフランツ・ブランドのものだ。少なくとも、ランディ・ヴァレリアンは、そう思った。

「私はこれでもスクラン航空団の司令官です。ま、スパイですが、  
とは言え、飛行機の鉄板の厚みなど、叩いてみればわかります」

言いよどむ事も無く、毅然として力強く、ランディ・ヴァレリアンは言い切った。

「なるほどな」

フランツ・ブランドは迷った。今は、ランディ・ヴァレリアンが自分を殺す動機も、戦闘機に細工をした証拠も見つからない。それらが無い以上、追求しても仕方がないのだ。何より、飛行機に関しては、自分が最後に点検をしなかったという落ち度もある。

「では、またお会いしましょう」

ランディ・ヴァレリアンは、今度こそ部屋を後にした。

（さっきの方、不思議な雰囲気でしたね）

ランディ・ヴァレリアンが出て行くと、イレネが遠慮がちに声をかけてきた。おそらく、会話は遠慮していたのであろう。

（そうだな、つかみ所がないというか……おれの戦闘機に細工をしたんじゃないかと疑っているんだが……）

（……兄さまが疑っていることは知っています。でも、彼に悪意があるようにはとても見えません……）

（そうだな、おれに対して悪意や害意があるとは、とても思えないな……）

どちらにしても、今、考えても詮無きことである。

（ところでイレエネ、生き残ったからには、おれはもう一度戦闘機に乗りたいたんだが……この身体で乗ってもかまわないか？）

フランツ・ブランドにとって、地上に縛られる事は何にもまして耐え難い事であった。何より、現皇帝の甥と言えは聞こえは良いが、のうのうと生きていれば皇太子に睨まれかねない。だから、今まで多少は命の危険がある場所にいる位が丁度良かったのだ。だが、これから、イレエネの事を思えば、死なせてしまう可能性のある空へ連れ出すのは気も引ける。ましてや、イレエネならば、皇太子の妻となる事も可能なのだ。悪戯に命の危険がある場所につれて行くこともない。

そう思えば、イレエネへの問いかけは、おのずと、おずおずとしたものにならざるを得なかった。

（どうぞ、兄さまのなさりたいように。これからは、出来る限り兄さまがこの身体を使って下さい……ただ、ピアノのお稽古はやらせてください。それと、お風呂とトイレも）

だが、イレエネは、屈託なく、そう答えた。

もともと、イレエネにとって未来はあまり心楽しいものではなかったのだ。どちらにしろ、やりたい事も出来ず、望まぬ結婚を強いられ、いずれ子を産み、ベーゼルの礎になる。ただ、それだけの人生なら、兄に全てあげよう、兄の方が余程可能性があるのだ。

何より、このままでは皇太子との結婚が最も現実味のある未来図であった。それはフランツ・ブランドにしてみれば、妹の未来として安泰と見えたとしても、イレエネ・ブランドにしてみれば、窮屈極まりなく、最悪の結果になる事を意味していた。

（それで良いのか？）

フランツ・ブランドは、もう一度、問う。

（はい、一度、空を飛んでみたかったです……それとも、兄さま

は、皇太子殿下の妻になりたいのですか？

イレーネ・ブランドの答えは、希望に満ち溢れていたが、同時に、フランツ・ブランドにとっては、恐ろしい可能性を示唆するものでもあった。

## 黒の章 6（後書き）

2011/10/18 加筆修正  
人名に関する補足を活動報告に載せます。

## 黒の章 7

フランツ・ブランドが、人類として生を受けた肉体を失っておよそ一カ月後。イレネ・ブランドの肉体を宿木としてフランツ・ブランドが再生を遂げて、丁度二週間後の事である。

最高指揮官を失ったベーゼル帝国第一空戦団は、第二空戦隊隊長コンラート・アスマンと、同、第三空戦隊隊長のハンス・バウアーによる二人によって暫定的に指揮統率され、ベネルクス郊外に仮設の航空基地を敷設し、駐屯していた。対キーエフ戦線維持の為である。

「コンラート」

未だ二月で、いかに内陸のベネルクスと言えど寒気の厳しい中、春先の陽光の様に明るく澄んだ女性の声が、親しげにコンラート・アスマンの鼓膜に飛来した。

コンラート・アスマンは、すぐに飛び立てるよう、滑走路の手前に置いた戦闘機を整備していた手を止め、声の方を振り向くと、金髪碧眼の美女が微笑を浮かべて向かって来る。本来ならば、そんな出来事は、この上もなく嬉しい事であるはずだが、今回この場においては、問題が三つ程あった。

一つ目は、彼女が飛行服を身に着けていること。（ベーゼルに女性飛行士はいない）

二つめは、それが夜の闇を染めたような漆黑であること。（かつて、その色の飛行服を着用したのは唯一人）

三つめは、現在の第一空戦団で自分を呼び捨てに出来る存在は、今はハンス・バウアーのみであること、（かつてはもう一人いた）である。

「誰だ？」

それらの疑問を総合した結果の誰何であるならば、本来厳しい口調になるべきだが、コンラート・アスマンには出来なかった。いつ

の間にか側に近寄り、人懐っこい蒼氷色の瞳で見つめられては、なす術もない。コンラート・アスマンの濃藍色の瞳が、動揺で揺れる。

「フランツ・ブランド……の、妹だ」

フランツ・ブランドは、言いよどみながらも、中身ではなく外見の話をした。誰が見てもフランツ・ブランドには見えないのだ。いや、本来、兄妹としてはかなり似ていたのだが、それでも男女を見間違う程ではない。何より身長が違う。だから、いくら腹心の部下であつたとしても、いきなりこの状況を説明は出来ない。

「と、いいますと……イレエ嬢、ですか……お噂はうかがっておりますが」

それにしても、漆黒の飛行服がよく似合う、とコンラート・アスマンは思った。身長こそ低いが、陽気さも湛えた眼光の鋭さは、在りし日のフランツ・ブランドと同じ輝きを放っている。

「そうだ。ところでハンスはどこにいる？」

フランツ・ブランドは、コンラート・アスマンの動揺を見て取り、それを笑いをかみ殺して耐えつつ、話を続ける。

「今は訓練中で、空に上がっています……もうすぐ降りてくるとは思いますが」

「そうか、ならば、降りてきたら二人でブリーフィングルームに来てくれ」

「……わかりました」

用件だけを言うとフランツ・ブランドは飛行場に背を向け、仮設の建屋に向かう。

コンラート・アスマンは、呆気に撮られて了解の返事をしたが、考えてみれば現在この駐屯地の指揮官は自分とハンスであるはずなのだ。後任人事の辞令も届いていない。まして、後任がフランツ・ブランドの妹、などという事はありえないはずだ。と、すると、彼女の指図に従う必要は、自分には無いはずである。だが、姿かたちは違つても、あの眼光と飛行服に『フランツ・ブランド』を見た。それもまた、事実なのである。

「とりあえず、大佐の妹だ。言われた通り、ハンスのヤツも誘って行ってみるか……」

コンラート・アスマンは、唇を僅かにゆがめて苦笑をつくり、空を見つめた。

フランツ・ブランドは、一端ブリーフィングルームに戻ると、いつの間に用意したのか、椅子に座ってコーヒーを啜るパウル・シュトラーゼ博士を見た。こんな所でも白衣を着ているのだから、ある意味では見上げたものだ。

「アスマン少佐とバウアー少佐は？」

一応、人格障害などを起こさないか、肉体的に安定しているか、等のデータをしばらく取るという事で、暫くの間、パウル・シュトラーゼ博士は、フランツ・ブランドに同行することになっている。

フランツ・ブランドとしては、余り面白いことでもないが、万が一の事があっても困るので、しぶしぶながら了承したのだ。

「バウアー少佐が訓練中でな……だが、しばらくしたら、二人そろってここに来てくれるそうだ」

「結構です。今後のために、お二人には、この状況を理解していただいた方がよろしいですからな」

コーヒーの入ったカップを両手で持って、顔に近づけながら、パウル・シュトラーゼは答えた。おそらく、寒いのであろう。

「ふん。おれがおれである事を教える事が、これほど面倒な事とは思わなかった」

そういえば、室内は寒い。仮設の駐屯地ゆえに、暖房用の燃料も不足しているのであろう。フランツ・ブランドは、シュトラーゼ博士にならない、自分も暖かいコーヒーを飲む事にした。

パウル・シュトラーゼ博士がコーヒーを飲みきり、フランツ・ブランドのコーヒーが半分を残し、温度が十六度をきった頃、コンラート・アスマンとハンス・バウアーの両少佐がブリーフィングルー



ムに到着した。

無論、彼等が到着する以前も別の士官が数人入室する事はあったが、科学者と思しき白衣の人物と、金髪碧眼の目つきが悪い美女という、この部屋にまったく似つかわしくない組み合わせにより、誰からも存在を黙殺されていたのだ。

「さて、早速だが二人に説明したいことがあつてな」

そう言つと、フランツ・ブランドは椅子から立ち上がり、指揮官卓に向かう。

コンラート・アスマンとハンス・バウアーの二人は、呆氣に取られたように顔を見合わせてから、フランツ・ブランドを正面に見られる席に腰を下ろした。

「単刀直入に言えば、おれはフランツ・ブランド！事情があつてこの姿になつた！だから、これからよろしく！……以上」

フランツ・ブランドの唐突な言葉に、二人はとつさに声も出ない。「……と、言いたい所だが、問題もある。まず、なんでイレーネの姿になつてしまつたか、とか。遠目から見れば服と髪の色で誤魔化せるかも知れないが、近くで会えば、ほら、この通り……おれをよく知るお前たちでさえ、そんな風にきよんとしてる」

「そりゃあ、何しろ何だつてそういう状況になつたのか……我々は、大佐が重態で軍病院に運ばれて、しばらく後に亡くなつた……としか聞かされておりませんし……いや、それより何より、何をどう信じれば良いのか……」

ハンス・バウアーは、そう口にするのが精一杯である。と、言うよりも、現実逃避の為に「遠目からでも誤魔化せない、大佐には見えない」と余計な事を口に出しそうになるのを押さえるのに必死であつた。

「とにかく、それだけでは状況がまるでつかめません……説明をして頂けますか？」

コンラート・アスマンも、状況がまだ飲み込めない。否、誰であれ、この状況をすんなりと飲み込めるものではない。

「うん、その通りだ。だが当事者のおれでさえ、上手く説明出来ない。だから、おれより上手くこの状況を説明出来る人間を呼んである。……二人はおれの事に関して、ここにいるシュトラージ博士に聞いてくれ」

フランツ・ブランドの声と共に、寒そうに歯をカチカチと鳴らしている哀れなパウル・シュトラージ博士がいつの間にか立ち上がり、今までの経緯と、おおよその状況の説明を始めた。

「と、いうことだ」

結局、自分では、ほぼ説明というものをしなかったフランツ・ブランドが、眠たそうに言う。パウル・シュトラージにしてみれば、余計な仕事を押し付けられた形になったが、黙って座っているよりはマシと思えたので、その件に関して文句をつける気にもならなかった。

「それにしても、大佐が皇族の方であつた事が驚きです」

ハンス・バウアーが、自身の顎鬚をしきりに弄びながら、言う。

「それも驚きだが、大佐がこんなに美人になるとは、少し嬉しいですね」

コンラート・アスマンは、フランツ・ブランドをじっくり見つめながら、言う。

「コンラート、お前の視線が気持ち悪いと思ったのは、初めてだ。お前、意外ともてないだろう？」

眉をしかめながら、フランツ・ブランドは、コンラート・アスマンを一瞥した。

「さて、おおよそ二人に納得してもらつたところで、本題だ。ちよつと訓練に付き合ってくれ。如何せん、イレエネの身体でどこまでの操縦が出来るのか、その辺を知りたい」

「なるほど、お付き合いしましょう」

「訓練は良いが……俺は大佐よりは、もてるはずだ……」

ハンス・バウアーは、フランツ・ブランドの言葉に対し、笑顔を

持つて応じた。コンラート・アスマンは、『もてない発言』に対し、異論があるようであったが、訓練に関しては異論が無いようだ。

「という訳で、シュトラーゼ博士。一時間程度なら、空を飛んでも良いかな？」

「結構です。その程度であれば、心身における問題はありますまい」

フランツ・ブランドの笑顔は、まさしく輝くようであった。パウ・シュトラーゼは、科学者として、医者として、もっと慎重を期すべきだとは思うが、自身の研究に対する情熱と、フランツ・ブランドの空に対する情熱を比較する時、そこにある種の共感を見出し、もはや、厳しくはなりきれないのであった。

## 黒の章 8

フランス・ブランドが、コンラート・アスマン、ハンス・バウアー、両名と共に空戦技訓練から、きっちりと一時間後に帰還すると、やはり一時間前と同じく、歯をガチガチと鳴らしながら震えているパウル・シュトラーク博士が、ブリーフィングルームで、殊勝にも待機していた。

「いかがでしたか？」

「うん、手足の長さの違いが少し気になる……だが、むしろ、体重が軽くなった分、戦闘機の加速性能や燃費がよくなったから、もしかしたら良い点の方が多いかもしれないな」

「眩暈など、起きませんでしたか？」

空戦に関する事など、パウル・シュトラークにはわからない。だが、フランス・ブランドで今まで出来た事が、肉体を代えて何の弊害もなく行えるとは、思えなかった。

もっとも、それらの心配は、パウル・シュトラーク博士の善意からではなく、【血の継承】に関する些細なデータも取り逃すまいとする、研究意欲からの産物ではあるのだが。

「……そうだな……眩暈は無いが……急な旋回や宙返りは、元の身体の方が楽だったな……多分、筋力が足りないんだろう。だが、その辺は訓練でどうにかなるはずだ」

とは言え、イレエネの身体でも、ハンス・バウアー、コンラートアスマンの両エースに対し、常時優位に訓練を続ける事が出来た。フランス・ブランドとしては、まずまずの、満足のいく成果が出たと言っても過言ではないだろう。

「さっきの話が嘘ではないと、やっと信じる気になりました」

さっきまで空で散々フランス・ブランドに追い回されたコンラート・アスマンが、降参したように両手を挙げつつ、言う。

「まったくだ。ベーゼルでも俺達二人を相手に後ろを取らせない

パイロットなんて、『漆黒の死神』位のものだ」

ハンス・バウアーも、首を上下に二度ほど振って同意する。

「だけど、隊の連中には、どう説明するつもりです？」

コンラート・アスマンは、当然とも言える疑問を口に出した。第一空戦団の全員がこんな事を信じるとは思えないのだ。

「みんなに説明するつもりは、無い……と、言うより、皇室の極秘事項をこれ以上ばら撒けない。だから、おれはこのまま帝都に戻って、おれの顔を知らない連中で部隊を再編成して、スクランのナント方面に行く。というより、空戦団本部の命令で、おれと第三空戦団長の入替え人事の命令が出ている」

「なるほど」

だが、言葉とは裏腹に、ハンス・バウアーが訝しげな声を出す。たしかに空戦団本部の『フランツ・ブランド』に関する措置には納得できた。『フランツ・ブランド』を知らない人間の所に「フランツ・ブランド」が行くならば、問題は無いはずだ。だが、それならば、その『極秘事項』を、自分達にも言う必要も無いはずではないか？

「ですが、そうなると我々は？」

コンラート・アスマンが、濃藍色の瞳を曇らせ、暗に、この場に取り残されるのは嫌だと告げる。

「心配するな。当然、お前たちも連れて行く。暫くは帝都の新兵をきつちり一人前にするのが、お前たちの仕事になるな。ほら、おれは女の姿だし、兵の前には姿を見せられないから」

「ふう、じゃあ、俺とハンスは、しばらく鬼教官ってところですか……」

ため息交じりに、口調に皮肉を込めて、コンラート・アスマンは言った。

「おいおい、おれだって訓練に参加はする……ただ、訓示だの何だの、アレだ……兵の前でしゃべる事がこの姿じゃ出来ないからお前たちに補佐して欲しいってことだ。だから今日、ここに来て、

わざわざ説明をしたんじゃないか……でも、すまない……」

フランツ・ブランドは、最後の言葉を飲み込むように発し、悔しさを前面に出した表情を作り出し、その瞳に涙を滲ませる。

「……大佐、泣くマネをしても無駄です。可愛いのが逆にハラ立ちます。ようは、俺達二人に面倒ごとを押し付けて、自分は空だけ飛んでいたいってハラでしょうが」

絶世の美女による涙という、図らずもフランツ・ブランドが手に入れた史上最強の武器を、コンラート・アスマンは、濃藍色の瞳に込めた殺意で容易に粉碎してみせた。

「ははは。そう睨むなよ……さしあたって、あたりだから……あはは」

フランツ・ブランドはコンラート・アスマンの怒りの矛先を逸らすように、次の言葉で話題を変えた。

「あ、そうそう、それから、おれが皇族であることと、【血の継承】の事、それらは極秘だ……な、シュトラーク博士」

「……はい、お二方とも、ご他言なきよう……」

形はどうあれ、フランツ・ブランドに、もう一度会えた事は、コンラート・アスマン、ハンス・バウアーの両名にとって喜びであった。だが、同時に、随分と大きな秘密を背負わされたものだ、と思わなくもないのであったが。

「ですが、俺達がすぐに、この戦線を離れても大丈夫なんですか？」

ハンス・バウアーの指摘はもつともである。最前線の基地から上位の指揮官が二名も抜ける穴は大きい。

「大丈夫だ。東部戦線は、もはや終結したといえる。だから、ここは、お前たち以外でも十分だ」

フランツ・ブランドの意味深な発言に、この時、二人の撃墜王は互いの顔を見て、首を捻るのみであった。

同日深夜のことである。

暖炉の炎は赤々と燃え、天井は六枚の羽を持つ天使を描いたフレスコ画が埋め尽くし、床は植物をあしらったモザイク……先代皇帝が心血を注いで築き上げた宮殿の執務室を、その魂を継ぎ損ねた現在の主が酔眼を持って眺めていた。

「陛下、お気に召して頂けましたでしょうか？」

それから執務机に目を落とすと、黄金色に輝く皮膜装飾がなされた卵型のボトルがある。

「酒か？講和条件か？」

皇帝フリードリヒは、酔眼をキーエフ共和国の使者に向ける。使者の肩書きは『国務長官』であり、キーエフ共和国では、実質ナンバー2である、ゲオルギー・マレンコフと言う。彼は、三日前に帝都ヴァルリアに入り、昨日よりこのローテンブルク宮殿の賓客として遇されていた。

「どちらも、でございます、陛下」

「ふん、それにしても、卿がわざわざ非公式にこんなものをもって催促にくるとは、随分とキーエフも後が無いのではないか？」

そういうと、皇帝フリードリヒは侍従に合図を送る。すると、黄金のボトルと皇帝のグラスは下げられ、隣室への扉が開く。

隣室は皇帝の居間だが、壮麗さは執務室を優に凌ぐ。壁面を飾る絵画の縁取りは黄金で彩られ、巨大な緋色のカーテンには、金銀の刺繍が施されている。

「卿も、立ったままでは疲れよう」

皇帝は、居間に使者を差し招くと、ソファへ案内する。すると、間髪いれず、皇帝と使者の間に挟まれたテーブルへ、グラスが二つと黄金色のボトルが置かれた。

「後がない、とはどのような意味でしょう？わが国は、旧体制を打倒し、これから先、未来を見据えるのみでございますが……」

「ふん、では、この予の眼前にあるものはなんだ？旧体制の秘宝……ブリュースフ朝の遺物であろう？このボトル、イースターエツ

グは……」

「は……よくご存知で……博識、恐れ入ります」

「自らの倒した専制国家の遺物を、これから倒すべき専制国家に取り入れるための手土産にすると、卿らの言う民主主義とは、随分と日和見よな……」

フリードリヒは、相手を甚振るように言葉をきつくしてゆく。講和は結ばねばならぬとしても、キーエフの存在のお陰でルクセンブルク攻略に手間取った事は事実である。多少の嫌味くらいは言わねば気がすまなかった。

「我々は、そもそも専制君主制を批判するものではありません……先の王朝を打倒致しましたるは、あくまで自国の民衆の生活の為に、今時大戦に参加いたしましたるは、あくまでも盟友たるルクセンブルクが戦火に巻き込まれ、それを助けんとする為にございます。それが破れた今、もはや我等には戦うべき名分もありませぬ……我等の望みは、元来、平和と幸福の追求でございますれば……」

ゲオルギー・マレンコフも、伊達に国務長官を務めている訳ではない。内心はどうあれ、今回で最終的な合意に結び付けねば帰国しない、という覚悟を持って話を進めている。

「ただ、陛下にわが国の真意をご納得いただけず、やむなく戦を続ける事となりますれば、わが国は決死の覚悟で、最後の一兵となりまして戦い抜く所存……万が一にもそうなれば……」

「軍は壊滅させられても、民は退かぬぞ、という脅しかな？」

皇帝フリードリヒは、目を細めて相手を射すくめる。

「さよう……さすれば、陛下は多くの兵を東に置かざるを得ませぬ。西部戦線が膠着している今、それは陛下にとって得策とは思えません……」

「今、講和を結んだとして、我等にとつては、ただ滅ぼすべき国家の順番が代わるだけの事、それはわかっておるのか？」

皇帝フリードリヒは、声に不穩の気配を含ませて、恫喝する。

「たとえスクランが滅びたとして、我等が滅びるかどうかは、ま



だわかりませぬ」

スクランは好きに滅ぼせ。ただし、我々を簡単に滅ぼせると思うな。そう取れるように、微笑と覇気を丁寧に混ぜた口調で、ゲオルギー・マレンコフは答える。

「なるほど、卿らは余程時間が欲しいとみえる。だが、どの程度の時間を与えるかは、そのスクラン次第だが、良いのかな？」

「それは致し方ありません。ここはせいぜい頑張つて頂きたいものです」

「ふん、ならば良からう。ルクセンブルク全土からのキーエフ軍即時撤兵と賠償金を一億マルク……これで交渉成立だ」

「はっ、では」

「……調印は一カ月後、場所は……ベネルクスでよからう」

「はっ……」

「決まりだな……他の細かな事は外務尚書と協議せよ」

皇帝フリードリヒは、あえてキーエフ側に酷な場所を指定した。キーエフがルクセンブルクを守りきれなかった事を強く印象付けるため、また、単独講和をバーゼルの勝利と印象付ける為には、自国が占領した国の首都が望ましいと考えたからである。

だが、それでもゲオルギー・マレンコフは、その条件を飲む他に道は無かった。

すでにキーエフの国家財政は荒れ果て、嫌戦気分が民衆に蔓延し、このままでは再度の革命が起こる可能性すらあるのだ。まずは内政を立て直さなければならない。幸い、国内工場の損失は少なく、経済さえ立て直せば、軍備の増強は比較的容易に可能であるはずだ。時間さえ稼げれば、たとえバーゼルといえども一国対一国で戦える自信はあるのだ。

「では、ベネルクスで一月後に講和を……早速準備いたします」  
ゲオルギー・マレンコフは、ソファから立ち上がって皇帝に恭しく礼をすると、静かに退出してゆく。その背中、講和の準備を始める政治家と言うよりは、戦争の準備を始める軍人のようであった。

フリードリヒは、ゲオルギー・マレンコフの残したグラスを一瞥すると立ち上がり、窓辺によってカーテンを開けた。

時刻は午前零時を過ぎ、日付が変わる。だが、降り続く雪は、止む気配すら見せなかった。

「今年中だ、今年中に全ての決着をつける……」

フリードリヒとしては、この交渉により得られたものは最上の結果であった。元々、ベネルクス会戦終了後、即座に単独講和の打診があり、その方向に向けて両国とも調整していた最中の、敵国の国務長官の訪問である。予想以上にキーエフ国内は混乱しているのであろう。

フリードリヒは、グラスに映る自らの顔が笑みを浮かべている事を確認し、一人、祝杯を挙げる。

だが、現皇帝に翌年は永遠に訪れる事が無く、この時のペーゼルとキーエフの講和も、歴史の闇に葬られる結果になる事を知るものは、まだ、いない。

黒の章 8（後書き）

2011/11/5 加筆修正

## 黒の章 9

「昨日、ナントで戦闘があったそうだな？状況は？」

ランディ・ヴァレリアンがヴォルリアから、スクランの首都ランスへ帰還しておよそ三週間後、二月二十日のことである。スクラン共和国航空団司令部において、無精髭をきつちりとそり落とした彼は、司令室に入るなり、室内に控えていた副官に現状を問いただした。

「はっ！敵空戦隊を撃退。損害は軽微との報告が入っております」上官の身だしなみの変化に、いささか驚きながらも副官は即座に立ち上がり、現状を報告する。

「軽微というが、損害の程は？」

間髪いれず、ランディ・ヴァレリアンは問う。正確に状況を頭の中に入りたいのだ。

「はっ、小破した機が3との事です。飛行に差し支えありません。ただ……」

「ただ、なんだ？」

言いよどむ副官を見つめ、ランディ・ヴァレリアンは小首をかしげた。どちらかと言えば小柄な彼の副官は、いかに髭がなくなりさっぱりしたとは言え、屈強な上官の眉間に皺が寄るのを発見するに至り、やむなく遠方にいる上位者の伝言を伝えることにした。

「……アルベール・フォンク少佐の独断先行が過ぎるとロベール少将から苦情があります」

「ふん、ロベールの馬鹿にアイツが上手く使える力量が無いだけの話だ。だが、それでもフォンク空戦隊の武勲は比類ない。……そうだな、ロベールにフォンクの移動を打診してみる。血相を変えてそれは困ると言ってくるぞ。なんせ、あの基地はフォンク空戦隊が支えているようなものだ。その程度はあの低脳でもわかるだろう」

ランディ・ヴァレリアンは、僅かに怒気を含ませた口調で言いな

から執務机に目を落とすと、そのまま席に着き、資料に目を通し始めた。それにしても、副官が言いよどむ理由もわかるというものだ。無能な上官の単なる苦情を、有能な上官の作戦計画に差し挟む愚行は、出来れば避けたかったのである。単なる伝書鳩にも関わらず、その怒りの矛先を向けられてはたまったものではない。

苦戦は丁度良いことだ、とランディ・ヴァレリアンは思った。六月にヴァイス・シュツルムを、このスクランの首都ランスに落とす為には、首都防空の直援機は少なければ少ないほうが良い。ナント基地は元々の兵力不足で、いかにアルベール・フォンクが奮戦しても、ここまで救援に駆けつける事は出来ない。何より、最も危険な男だからこそ、首都から最も遠い戦場に送っている。その上で、同時期にフランス・ブランドをアルベール・フォンクにぶつける、という策まで講じてきたのだ。

「よし、首都防空の第一空戦団から、第二空戦隊を北部戦線へ、第三空戦隊を中部戦線へ送れ」

いささか慎重すぎるか…… と思い、苦笑しかけたが、それはかみ殺して、ランディ・ヴァレリアンは副官に命じた。

「は、ですが、首都防衛は……」

「北部、中部を抜かれたら首都に敵機が来るだろう？……敵は前線で叩き落せなければ、意味が無い」

「はっ……そのように手配いたします」

時々、自分がえらく的外れな事をしている気分に、ランディ・ヴアレリアンは陥る事がある。今もそうであった。

誰が敵で、誰が味方なのか？何を『敵機』と呼んでいるのか……少なくとも、自分にとって『味方』はいない。そして、自分は誰の『味方』でもない。

ただ、世界をあるべき姿に戻したい……初代フリードリヒを自らの内に招き入れ、彼の考えを聞くうちに、自らに芽生えた理想である。

ランディ・ヴァレリアンにとっての唯一の目的は、それである。ゆえに、誰の味方になる事も拒み、誰を味方にする事も拒む。それは、自分自身に対してすら、例外ではなかった。

「目的の為に、俺は、俺を最も効率よく利用する」常に、自身にそう言い聞かせていた。

だが……

あるいは、それは初代フリードリヒに、ささやかな反抗を続けているに過ぎないのかも知れぬ。もしも、もっと昔に、自分と同じ境遇となったフランツ・ブランドに出会っていたなら、友になれたのではないか？それとも、フリードリヒの存在さえなければ、スクラの英雄、アルベール・フォンクを腹心とし、帝国を打倒する決意を抱いたであろうか……

そんな思考から逃れるように、ランディ・ヴァレリアンは、目の前に積まれた書類の決裁を始めた。

ランディ・ヴァレリアンが三十分程の時間、書類と格闘し、その才能に恥じぬ勝利を収め続けていると、オフィスの電話がけたたましく鳴った。副官が慌てて受話器を取り、暫くすると、満面の笑みを浮かべつつ、強い口調で断言をした。

「閣下。キーエフ共和国がベーゼルに対し、大攻勢に転じました」  
「なに？」

ランディ・ヴァレリアンは、僅かに息を飲む。

キーエフとの交渉は、八割がた講和で整っていたはずだ。今更の意趣返しなど、何の意味があるのであるうか。

「数は？」

表面上は完璧に平静の仮面を纏う事に成功したランディ・ヴァレリアンは、副官に対し、矢継ぎ早に問いただす。無論、その速度以上に、彼の思考処理速度も速くなってゆく。

「そもそも、なぜ同盟国である我々に連絡も無く単独で攻め込むのだ？」

「数は……およそ八十万、単独であつた理由はわかりません。ただ、ベーゼルは一戦を交えただけで、あとは戦わずにベネルクスを放棄。昨日、キーエフ初代大統領アラム・バラネフの名でベネルクスの開放が宣言、依然、ベーゼル本国に向け進軍中、との事です」

「なるほど……キーエフは国軍の三分の二が出撃して、ベーゼルは戦わずに退く、か」

伶俐な微笑を浮かべて、ランディ・ヴァレリアンは呟いた。

「閣下。我々空戦団も侵攻準備を整えますか？」

「いや……そのキーエフの侵攻以後、ベーゼルの攻撃は、ひと時でも手抜きになったか？彼等に混乱の色が見えたか？……もしも今ここでベーゼルに攻め込む愚を冒してみる。負けた途端に無条件降伏という不名誉がまつているぞ。キーエフの侵攻は、暴発に等しい。さすがに、我が軍の幹部連中も、その程度は見抜いてくれるだろうよ……」

どちらにしても、無条件降伏の未来は変わらないのだが……と、ランディ・ヴァレリアンは内心で、その言葉を付け足す事も忘れなかったが、さすがに副官にその言葉が伝わる事はなかった。

「さて、用事を思い出した。数日くらい顔を出せないが、宜しく頼むぞ」

副官の背中を、ぼんと軽く叩くと、ランディ・ヴァレリアンは、足取りも軽く執務室を後にした。

二月十八日、ベネルクス郊外にある仮設の第一空戦団駐屯地では、その場に不釣り合いな程美しい士官が、鼻歌交じりに航空機の整備をしていた。無論、それは帝都まで戦闘機で帰ろうと考えている、不埒なフランツ・ブランド大佐その人に他ならない。

「あの……私はどのように帰れば？」

「来た時の車があるから、それで帰ればよいだろ」

完全に一人で帰るつもりはフランツ・ブランドは、やはり空戦団

の駐屯地としては不釣合いな白衣を着ているパウル・シュトラーゼ博士に、にべも無く言った。

「どうせ帝都の基地で合流するんだ。わざわざ一緒に帰る必要は無い」

「よく墜落したのに、また飛行機に乗りうなどと思えますな？」

「墜落したのは、飛行機が悪かったんじゃない。人間の整備が悪かったんだ。大体お前だって、寒い寒いって言いながら白衣を着ているじゃないか、似たようなもんだろ」

「寒いのは白衣のせいではありません。私の重ね着が少ないからでございます」

「だったら沢山着たら良いだろ！！風邪ひくだろ！！」

「心配後無用、私、それでも医師にございます」

「医者も風邪をひく。パイロットだって落ちる。やっぱり同じだろ！？」

「いいえ。私は、この程度の気温では風邪をひく確立は限りなく低い。殿下の墜落の確立よりも、遥かに……だから殿下も車を使われるべきです」

心底呆れたように言うパウル・シュトラーゼに対し、フランツ・ブランドは口を尖らせて反論する。だが、それは、嫌味の応酬といった雰囲気ではなく、どこか打ち解けたものであった。どうやら、フランツ・ブランドが目覚ましてから今までの、三週間弱という時間は、彼等の間に奇妙な友情を成立させる時間を与えたようだ。

「敵が攻めてくるぞ！キーエフだ！！」

二人の奇妙な友情を深める会話は、けたたましく鳴る警報の音によつてまず破られ、ついで警告を告げる人声により、終わった。

「どういうことでしょう？」

事態の急変に、状況をつかめない様子のパウル・シュトラーゼが不安げに目を瞬かせる。彼にとってこの場は最前線の軍事拠点であったとしても、『政府間による講和の調整』を行っている時点で、『安全』を確信していたのだ。だからこそ、安易にフランツ・ブラ



ンドについて行く事が出来たのである。

「どうもこうもないな。おれたちが騙されたのかどうかはわからないが、キーエフが予定を変更したんだろ？ だったらおれの予定も変更！ 空に上がって奴らを叩き潰してやる！」

「あの！ 私はどうすれば？」

「するか！ とりあえず、ここに敵を近づかせないようにするけど、出来るだけ早く車で帝都にでも逃げる！ おれも後でいくから！」

暗緑色の機体のエンジンスクランブルを始動させつつ、フ란ツ・ブランドは叫んだ。周囲でも緊急発進で次々とエンジンを始動させている為、叫ばなければ声も聞き取れないのだ。

「じゃあな！」

そついい残すと、フ란ツ・ブランドは、機体を滑走路に進入させ、パワーペダルを踏みこんだ。エンジンが唸りを声をあげ、プロペラの回転が勢いを増す。

機体が量産機なのは面白くないが、久しぶりの実戦である。整備も最後まで自分で行った。

今、フ란ツ・ブランドは、ただ目の前の敵を倒すために、大空の戦場へ向かう。その行為は、自身の境遇に対する不満も、未来への不安すらも飲み込む程の高揚感を彼にもたらすのであった。

黒の章 9（後書き）

2011/11/5 加筆修正

## 黒の章 10

この場所が海からは遠い内陸だとはいえ、山などの遮蔽物が無いために、ここまでも北の海から届く寒風は肌に冷たい。だが、天候は雲一つ無く快晴、澄み渡った青空の広がるベネルクス上空である。遙か天空からの突き刺すような陽光を、深緑色のその身に吸い込んだ戦闘機を駆り大空に上がったフランツ・ブランドは、一瞬にして我が目を疑った。ベネルクスに迫るキーエフ戦闘機団の大軍に、である。

「五百はいるだろ……」

キーエフ側の目的を、フランツ・ブランドは容易に想像する事が出来た。陸上部隊の拠点を航空機によって攻撃し、無力化、もしくは弱体化を図る、という事であろう。ただ、理解出来ない事は五百機以上いる戦闘機の数、であった。

「これ……全軍じゃないか？」

だが、この際、ここでキーエフ共和国がこの戦線に全軍を振り向、自らのやる事には変わりはない。

フランツ・ブランドは周りを見渡して、味方機の数を確認した。

「百程度か」けてきたところで

三個空戦隊がこの地にいるといっても、当然ながら常時即応可能なのは、一個空戦隊のみである。他は航空機の整備や隊員の休息などで、総攻撃時でもない限り、全部隊で敵に当たることは出来ないのだ。

数が敵に比べ小数であることは間違いなく不利ではあるが、それでフランツ・ブランドが怯むかといえば、まるで逆である。笑みを浮かべながら、一つ口笛を吹くと、フランツ・ブランドは僚機の隊章を確認した。

「第三空戦隊か。ハンスの手並みを見てやろう」

ベネルクス市街地上空では、地上から上がる火砲と空中から打ち下ろす火砲が交差し、その度にいくつかの光球が生まれ、その光球の規模に相応しいだけの人命が地上、もしくは中空から失われている。

だが、その火砲の交錯は少なくとも平等とはいいがたく、現在この場におけるベーゼルの空戦隊を指揮するハンス・バウアーの翠玉色の瞳には、地上から振り上げられる槍よりも、空から打ち下ろす鎌の方が遥かに多く映っていた。

空からの攻撃は機銃のみだとはいえ、圧倒的な物量で来られればそれなりの損害も出る。それにしても、ハンス・バウアーもフランス・ブランドと同様に、キーエフの意図が読めなかった。

「市街地に直接攻撃してくるとは……攻めるにしても露骨すぎる。開放が名目なら、市民を巻き添えにしたらずいだろうがっ！」

キーエフ側の戦闘機が低空で地上を攻撃している為、必然、自らも低空で戦闘を開始する事になる。いらだたしげに、そうはき捨てると、ハンス・バウアーは瞳に怒気を湛え、獲物を探る。

地上からの味方が放つ対空射撃に細心の注意を払いつつ、今、まさに下方の味方に攻撃を仕掛けようとしていた敵機に狙いを定め、ハンス・バウアーは正面上方から攻撃を仕掛けた。

轟音と共に放った七・七ミリの機銃は、敵パイロットのみを正確に貫き、制御を失った暗褐色の機体は、螺旋を描いて地上に吸い込まれてゆく。落ちた戦闘機は、そのまま爆炎を上げ、周囲の建造物にも被害をもたらした。

「落としたところで街にも味方にも損害かでる」

ハンス・バウアーは、舌打ちを禁じえなかった。

周囲でも次々と暗褐色の機体が黒煙を上げて、落下してゆくのが見える。

元々、戦闘機や戦車など近代兵器の開発において、ベーゼルとキーエフには技術的な開きがある上、実戦経験など、パイロットの質でもベーゼルの方が遥かに上なのだ。暗褐色の機体に比べると暗緑

色の機体が撃墜される数は、圧倒的に少なかった。とは言え、百対五百では、いくらベールゼル側が優れていても限界がある。確かに損害率ではあきらかにキーエフが上だが、それでも、じりじりとベールゼル側の戦闘機も数を減らしていた。

ハンス・バウアーが敵の意図を読みぬまま、それでもさらに二機を屠った頃、自機のさらに前方で、多数の敵を相手に空中戦を展開している暗緑色の味方機を見つけた。

遠目には同じ二枚の羽を持つ飛行機が七機ばかり集まって、空戦技を披露しているように見える。だが、実際のところは無数の弾丸が飛び交い、その瞬間ごとに死神の鎌が振るわれるのだ。それにしても、多少の性能差があるとはいえ、六機の敵を同時に相手取ってさらに押している。

「そんなことが出来るヤツ、ウチの隊にいたか？」

疑念が脳裏を掠めるが、自分の隊でなければ……と、考えた時、ハンス・バウアーはある人物の名を思い描いた。フ란ツ・ブランド……この人物で、おそらく間違いあるまい。そう確信したとき、ハンス・バウアーの頬が僅かに緩んだ。

「どっちにしても、その機体じゃホネが折れるでしょうな！」

苦笑を浮かべつつエンジンの出力を上げると、七機が入り乱れる戦場へ、ハンス・バウアーも突入したのである。

錐揉みし、旋回。急降下から一気に上昇し、敵機の背後に出る。

それを幾度か繰り返したが、さすがに六機が相手となると、なかなか射線を取らせてもらえない。フ란ツ・ブランドが量産機のパフォーマンスに、いささか辟易した頃である。左後方から猛然と迫る暗緑色の機体が、視界に入った。

「ハンスか」

前方に四機を追いつつ、後方に二機を抱える身としては、まずもって、煩わしいことこの上ない後方の二機を、ハンス・バウアーの射線に誘導する事にした。

さらに後方から迫るハンス・バウアーの存在に気付かぬまま、フ  
ランツ・ブランドに誘導された後方の暗褐色をした機体のうち一機  
が、勝利を確信して射撃を打ち込もうとした刹那、ハンス・バウ  
アーの機銃がその機体を捕らえ、パイロットの意識すらも刈り取る。  
次の瞬間、フランツ・ブランドは上昇し、機体を百八十度回転させ  
て逆さまになりもう一機の射線を外すと、同時に動きが鈍くなった  
前方の敵機に攻撃を仕掛けた。

その場の形勢が変わり、二対四になる。その後、何事も無かった  
かのように二人の撃墜王は、それぞれ二機ずつを撃墜すると、やは  
り何事も無かったかのように次の戦場へ向かったのである。

「ハンスに手伝われるつてもシヤクだなあ……」

「……大佐め。面倒だからって、俺に後ろの二機をおしつけやがっ  
て」

フランツ・ブランドは、戦闘とは別に空からベネルクス市街を見  
て、「異様なモノ」も見つけた。市内の中心部からは大分外れたと  
ころに、うず高くつまれた人の「死体の山」があったのだ。おそら  
く先の会戦におけるベネルクス側の戦死者なのであるうが、未だ埋  
葬されることも火葬される事も叶わず、まるでゴミのようにただ、  
つまれているのだ。

身元が判明しないのか、身元を調べる順番を待っているのか、ど  
ちらにせよ、同じ人が行った行為の結果として、やはり「それ」は  
あの場にあるのだ。

「あれがヴァイス・シュツルムの仕業なら、事と次第によっては、  
おれもあの中にいたのかもしれない……」

フランツ・ブランドの胸中は複雑であった。その化学兵器によつ  
て助かったともいえるが、その効果によって死んだ人間の「現在<sup>いま</sup>」  
をまざまざと見せ付けられたのだ。合理的であることを、人間は必  
ずしも受容出来るものではない。

「戦争の結果は殺人に帰結するが、だからと言って殺人の理由を戦

争に全て結び付けて正当化することは出来ないはずだ」

眼前に迫る敵を着実に撃破しつつ、フランツ・ブランドは己の境遇を問わずにはいらなかった。

「大陸を統一すれば、戦争による被害そのものが消滅する。ゆえに、ベーゼルの強健な指導力をもって大陸を制覇し、遍く万民に平安をもたらす、これはそのための聖戦である」

これが現在のベーゼルの建前である。正直、フランツ・ブランドしてみれば、こんなものは建前にすらなっていないのだが、それでも、事実として国家が統一されれば、たしかに戦争はなくなるはずである。その一点に関してのみ正しさは存在するが、だが、そのために数多の犠牲をしかねばならぬとしたら、それは滑稽な話である。何より、この戦争の発端は、スクラン共和国をフランツ・ブランドの両親である、クリストフ・ブランド・ベーゼル公爵夫妻が外遊の為に訪れた際、「何者か」に暗殺され、その犯人をスクラン共和国が見つけることが出来ず、かつ外交的責任をも果たそうとしなかった為、やむなくベーゼル帝国は懲罰の為に「宣戦布告」をしなければならなかったのではなかったか？

何より、父母を同時に失い、その敵も討てぬまま自らの肉体を失って、ただ一人残った妹を危地に連れてきてまで得たモノは何なのか。

意味を失ったまま積み上げられた「人であったモノ」。

それは、「異様なモノ」として片付けて良いものとは、フランツ・ブランドには思えなかった。そして、自らが「異様なモノ」を生み出す存在である可能性を、否定する事も出来なかった。

ベーゼルの中でベーゼルの名乗る事を許された存在。その自分ならば、この目の前に広がる光景も、あるいは止められた可能性もあるのだ。

今、フランツ・ブランドはベーゼルの正義を絶対などとは考えていなかった。否。ベーゼルが正義だと考えた事は、生まれてこのかた、無かったのだ。だが、それを抗えない運命と思い、だからこそ、

せめて大好きな空を飛びたいと考えたのだ。

「だが……おれは、逃げていただけかも知れない……空に……」

フランチ・ブランドは、まとまらない思考はそのままに、肉体は機械的に眼前の敵を処理し続け、静かに呟いていた。



## 黒の章 10（後書き）

誤字脱字、おかしい表現など、教えて頂ければ直します。  
よろしく願います。

## 黒の章 11

ベネルクス市街のいたるところで火災が発生し、黒煙が立ち上っている。それは、上空からの純然たる攻撃によるものと、それを撃退しようとしたものと、されたものが地上に落ちた結果によるものとの二種類であつたが、どちらにせよベネルクスの都市機能を一時的に麻痺させるには十分過ぎる程の損害であるといえた。

だが、上空からの攻撃はその開始から一時間が経過し、ようやく終息を向かえつつあつた。キーエフ側の残存戦力が四百機を下回り、さすがに戦闘継続を断念し撤退準備に入っていたのだ。とはいえ、ベーゼル側も三十機程度の損害を出している。損害率の点で言えば、確実にベーゼル側が有利であつたが、このまま戦いを続ければ、全滅の憂き目にあつていたのは、或いはベーゼルの方かもしれなかつた。

おそらく、今日か明日にはキーエフの地上軍がやって来るのである。いかにキーエフという国が約束をいとも簡単に破れる国だとしても、用兵の常道までは破るようなことはすまい、とフランス・ブランドは考えていた。だとすれば、ルクセンブルグ軍などとは比べ物にならぬ程、キーエフの地上軍は層が厚い。果たして、ここに駐屯している地上部隊だけで勝てるのであろうか？

「どちらにしても、おれはいったん帰るか」

しかし、攻められるとして、防衛の為の戦術を考えるのはフランス・ブランドの仕事ではない。仕事ではない以上考えても仕方がないのである。だから、そこで思考を一端停止し、当面の去り行く敵機を目で追いつつ、それが攻撃の為にこちら側に引き返す可能性がなくなった事を確認すると、フランス・ブランドは自機を基地の方角に向けた。

基地に戻り、ブリーフィングルームでフランス・ブランドが一息

ついていると、大勢のパイロットが入ってくるなり興奮気味で話している。

「とんでもない奴だったな！ 一人で十機以上相手にしてる時もあったぞ！」

「ああ！ あの腕は本物だ！ ブランド大佐より上じゃないか？」

どうも、自分の噂をしているようであった。確かに今日は、自身の状況の事を考えて、あまり派手な事はしないつもりだったのだが、敵のあまりの数の多さに、つい本気になってしまったのだ。自分でも「やりすぎた……」とは思ったものの、こうなっては後の祭りである。

しばらくの間パイロット達が謎の撃墜王の話で盛り上がっていると、程なくハンス・バウアーもブリーフィングルームに姿を現した。「隊長！ 俺たちの中にとんでもないパイロットがいたけど、あれはだれです？」

すかさず一人のパイロットが目を輝かせながら、今日の殊勲者に関する情報開示をハンス・バウアーに求めている。

「あ？ あいつは軍上層部からの視察だ。それと次期主力機のエンジンを搭載してのテスト飛行っていうのも任務だと言っていたか……まあ、流石に新型のテストパイロットに選ばれるだけあって、確かに腕は良かったな……だが、まあ、そんな事情だ、奴の名は明かせん」

そう言いつつ、ちらと翠玉色の瞳を一瞬だけフランツ・ブランドに向け、言外に「なにを呑気にその姿を晒しているのか」と語ったが、言葉としては、ハンス・バウアーはその存在を明らかにする事ではなく、パイロット達の興味を逸らすように次の言を繋げた。

「今、外では第一、第二空戦隊も緊急発進スクランブルの体制で待機をしている。今日か明日かはわからないが、また敵が攻めてくる事は明白だ。他人を気にするより、自分が生き残る努力をしろ」

ハンスの視線の意味を理解したフランツ・ブランドは、流石に、呑気にパイロットの集まる部屋にいないと悟り、外に出

る事にした。

すると、そこに茫然自失の体で、緊急発進スクランブルの緊張感を湛えた飛行場をふらふらとさ迷う、白衣のパウル・シュトラージ博士を見つけた。パウル・シュトラージの方もフランツ・ブランドの姿を見つけると、うつすらと瞳に涙をためつつ、やはりふらふらとだが、着実に歩み寄って来た。

「どうした、逃げなかったのか？」

フランツ・ブランドがやっと見つけた異端の友人に、嬉しそうに声をかけると、友人の方は状況が不本意だったらしく、憎らしげな声で応じた。

「逃げるとおっしゃられても、車の鍵は無く、そもそも私は運転も出来ず……ましてや街の方から立ち上る黒煙と炎を見てはどうする事も出来ず……」

「ははは、そうか！ そりゃ災難だったな！ そうだ！ どうもおれの立場はここでは微妙だし……加えてこれから大きな戦いになるはずだ。とすると、基地としては飛行機は一機でも欲しい状態だ！でも、ま、どっちにしてもおれは帰るしかないから、仕方ない……車を手配して一緒に帰るか！」

「助かります……」

パウル・シュトラージとしては、最初からその選択肢を選んでほしかったのだが、結果としてはめったに出来ない経験をし、黄金色の髪と、その内に二つの人格を併せ持った世にも奇妙な友人の屈託の無い笑顔が見られたという事で、この災難も渋々ながら受容することが出来たのであった。

帝都ヴァルリアの冬の一日は短く、午後四時を回る頃には日は傾き、夜が早足に訪れる準備を始めるのである。

それは、遍く世界の支配の象徴たるローテンブルグ宮殿においても例外ではなく、時の皇帝フリードリヒ・リヒャルトの執務室に侵入する陽光とて他の世界と同様に、夕暮れ時の赤みを増してゆくの

であつた。

「ベルンハルトよ……なぜ、予の許可もなく余計な事をした……？」  
フリードリヒの口調は重い。その声には帝国を一身に体現する皇帝の重責と、その重みを軽んじた者への僅かばかりの侮蔑が入り混じつており、問われたものを容赦なく萎縮させていた。

「は……父上。此度の事、キーエフなどとは現時点で和睦などせずとも攻め滅ぼしてしまえばよいかと考えました……」

「卿の一存か……？」

「は……全ては我が国の行く末を思つての事にござりますれば……」  
ベルンハルトと呼ばれた若者は、父の前に平伏し許しを請う。だが、その姿とは裏腹に、彼の持つ藍色の瞳には何ら感情は浮かんていなかった。

その容姿は、くすんだ金髪に藍色の瞳をもち、薄い唇は、僅かだが酷薄な印象を与える。また、彼は帝国皇族の例にもれず軍務についており、現在はベーゼル帝国軍陸軍参謀本部副部長であり、二十八歳にして、最年少で大将の位にもあつた。

皇族は、その地位を軍隊内で秘匿される者も、されぬ者も、昇進の査定は一般の士官と比べてかなりの割合で甘いものになるが、フランツ・ブランドの昇進と、このベルンハルト・フォン・ベーゼルの昇進とは圧倒的な違いがあつた。前者は、「全て自らが武勲を立てた後の昇進」、後者は「他者の武勲を我が物にしての昇進」であつたのだ。また、フランツ・ブランドの場合は、皇族という自身の立場を誰に言うでもなく、その武勲により「二十四歳の大佐」である事を誰からも認められていたのであり、その点、ベルンハルトの場合は「皇太子だから二十八歳で大将」という認識が付きまといつていたのである。

だからこそ、彼は揺ぎ無い武勲を求めていたのである。  
「で……卿は、自らの手のものを使い、アラム・バラネフとゲオルギー・マレンコフの不仲を利用し、我等との和約を反故にさせ、ベネルクスをキーエフに侵攻させた……というわけか？」

「は……。現在キーエフの軍部は主戦派と保守派に二分されております。保守派はゲオルギー・マレンコフが握っておりますが全体からすればその数は一割に満たぬ少数派……。それが我等との和約に動いているという情報を流せば、主戦派の大統領、アラム・バラネフは黙ってはおられぬ、ということでございます」

「ふん……。だから、そのような謀略、予がいつ指示を出したのか、と聞いておる？」

「指示などと……。キーエフが講和の纏まる前に侵攻してまいった事は好都合ではありませんか。奴らを我が領内深く招きいれ、補給線の延びきった所を我が軍の精鋭で叩けば、『講和』などという落ちた果実ではなく、『無条件降伏』という名の新鮮な果実を、キーエフという名の木から奪い取れましょう」

平伏していた姿勢を建て直し立ち上がると、皇帝を正面から見据え、静かな口調に自信を覗かせつつ、ベルンハルトは言った。

「では、ゲオルギー・マレンコフはどうするのか？」

「あの者は……。戦後に戦犯としてアラム・バラネフと共に処理なされれば良いでしょう……。どだい、今となつては意味をなす者でもありませんまい……」

「愚か者！」

フリードリヒ・リヒャルトの鋭い一喝が、ベルンハルトの鼓膜を貫いた。一瞬だが、呆然とする。

「講和し、キーエフ内部の対立をより深刻なものにさせる。そして内乱を扇動し、内部からその戦力を削ぐ。その間にスクランを攻略し、その後、戦力の落ちたキーエフを併呑する……。それを貴様は無しにしたのだ！……。何よりも！アラム・バラネフもゲオルギー・マレンコフも、共にキーエフの国民の手により処断されねばならぬのだ！それこそがかの国の民主政治の芽を摘む事になるのだ！我々が処断すれば、奴等は民主政治の英雄となり、後々までもその精神において我が国に対する抵抗の象徴になるであらう……！」

立ち上がり、落雷のような怒声をフリードリヒ・リヒャルトは我

が子に浴びせた。

「一時の『利』のみを見て、大局を崩壊させるなど……！」

さらに言葉を続けようとした時、フリードリヒ・リヒャルトに苦悶の表情が浮かんだ。そして、すぐに胸を押さえて苦しみ、半瞬の後は糸の切れた操り人形のようにモザイクの床に崩れ落ちた。

「ち、父上？」

数秒前まで怒声を浴び、元々蒼白な顔色をさらに青くして耐えていた皇太子は、状況の急転に動揺し、事態を正確に把握する事が未だ出来ずにいた。

「陛下！」

すると、先ほどまでそれぞれ入り口付近の執務机で執務を行っていた補佐官二名が、即座に皇帝の下に駆け寄り、脈と呼吸を確認し、ベルンハルトに的確な報告をした。

「脈、呼吸、共にございます。すぐに処置を致しませんが、手遅れになる可能性がございます……」

ベルンハルトは、的確に動き、報告義務を怠らない補佐官達を見回し、状況を悟ると、かろうじて指示を出した。

「医師を……早急に呼べ！」

たとえ叱責をされていたとしても、皇太子である自身の責任までは放棄できない。そして、自身も倒れた『現皇帝』の元へ駆け寄った。見下ろすと、ほんの数分前までは、あれほどの威厳と覇気を込めて自身を叱責していた『唯一無二の地上における神の代理人』たる皇帝が、苦しい表情のまま胸を押さえて丸くなり倒れている。

その姿を見ると、ベルンハルトは、父を失う恐怖よりも、陶酔感と共に、ただ一つの意識に支配されていた。

「このままこの男の命が尽きれば、私が次の皇帝なのだ」と、もとより、いずれ皇帝を約束された身。だが、となれば、フリードリヒをいかにして継ぐのであろうか？

【血の継承】……？

豪華な執務室のその主は医師に連れられて病室に向い、補佐官達

も皇帝に付き従った。今、床のモザイクを踏みしめ、ベルンハルト・フォン・ベーゼルは、藍色の瞳に喜色を称え、くすんだ黄金色の長髪を掻き揚げて、薄い唇に酷薄な笑みを浮かべていた。



## 黒の章 12

キーエフ共和国のベネルクス侵攻から五日後、フランツ・ブランドとパウル・シュトラーゼの両名は、帝都ヴァルリアに慌しく帰還すると、すぐにローテンブルグ宮殿にある皇帝の居室に呼び出されていた。

時刻は正午を少し回っただけなのだが、室内は全体的にほの暗い。緋色のカーテンは全て閉じられ外界からの光を遮断しているため、室内の照明に頼るしかないからである。だが、室内が暗く感じられる本当の理由は、この部屋の主が、巨大な天蓋付きのベッドに横たわり、その命運を尽きさせようとしているからに他ならなかった。

「シュトラーゼ博士……」

急速に覇気の衰えた弱々しい声で、フリードリヒ・リヒャルトは、皇室直属の医師団長の名を呼んだ。

「……は、お側に」

皇帝のベッドの周囲に居並ぶ人々の中から一歩だけ前に進みでて、パウル・シュトラーゼは答えた。

「予の命は、あとの位もちそうか？」

すでに己の命数が残り少ない事を自覚しているフリードリヒ・リヒャルトは、より正確な残り時間を知る事を求めた。

「は……陛下を蝕んでおります病魔は一つだけではありません。今回は心臓疾患の発作でございましたが、それ以外もございます。長くて半年。また、次に同じ発作がおきますれば、今日、明日の事であつても、まず、助かりますまい」

「ふん……相変わらず、はつきりものを言う男だ。わかった」

苦笑を浮かべ、フリードリヒ・リヒャルトは医師団長を見つめた。医師団長の顔からは何らの感情も読み取ることが出来なかったが、我が子であるベルンハルトの浮かべる、「喜びを隠した無表情」とは異なっていた為、ことさら嫌悪感を覚える事はなかった。

「ですが……公務を全て放棄されるならば、延命治療を施すという選択肢もございますが……」

「ふ、ふふ……それには及ばぬ。いま、ある男がここに向かっておるはずだ。予は、その者を待ち、話を出来るだけの時間がのこされておればよいのだ、正直なところは……」

そう言つと、フリードリヒ・リヒャルトは目を閉じて苦しげに息を吐いた。その姿は、医師が見るまでもなく、命の終焉を予感させるに余りある姿であつた。

（イレネ……おれは帰りたい。ベルンハルトが陰気な顔でおれをちらちらと見るのがたまらなく気持ちわるい）

（兄さま……今は我慢してください。そんなこと言つてる場合じゃないでしょう？）

（どんな場合でも見たくないものは見たくない）

（そんな……子供じゃないんですから……）

（あいつは嫌な奴だと思つてはいたが、その視線がここまで犯罪的に気持ち悪いとは思わなかつた）

（でしょう……だから、私も絶対あの人とは結婚したくないんです）

「……イレネ……色々と大変だつただろう？　いつなりと私を頼るが良い」

フランツ・ブランドとイレネ・ブランドが、その内部で激しくベルンハルト批判をしているというのに、当の本人が涼しげに声をかけてきた。隣り合つて立っているだけでも吐き気がするのに、声までかけられてはたまつたものではない。まして、自身の父の病床で、元気な従姉妹の心配などしてどうするというのだ。

「大変な目にあつた結果、今のおれがフランツだつて事には気がつかかなかつたか？　ベルンハルト殿下」

出来る限り思い切り陰険な表情を作つて、フランツ・ブランドは答える。

「ほう……私の知るフランツは、もっと背が高くて、力強さに満ち溢れた男だつたと思うがな……これも【血の継承】の効果というも

のか。随分と可愛らしくなったものだ」

だが、フランツ・ブランドは、ベルンハルトの表情に浮かぶ微笑みを見たとき、自身の陰悪な表情に対する信頼を全て失う事になった。ベルンハルトの浮かべた笑みは、酷薄な毒蛇のようであった。失う前の自らの肉体ならばともかく、イレエネの生み出す陰悪な表情など、この毒蛇にとっては「ヴィーナスの恥じらい」程度のものだ。こんなものでは、相手を喜ばせることがあったとして、怯ませる事など、到底適うはずもなかった。

「さあ、な。昔は忘れた……」

もはや会話を交わす事も煩わしく、それだけ答えると、フランツ・ブランドは視線をベルンハルトから病床の皇帝へ移した。酷薄な皇太子より病床の皇帝の方が、まだ見るに耐えるというものであったからだ。

暫くすると、静かに扉が開き、皇帝の補佐官が新たな人物を居室に招きいれ、自らは退出してゆく。これで、ここにいる人物は、皇帝フリードリヒ・リヒャルト・フォン・ベーゼル、皇太子ベルンハルト・フォン・ベーゼル、フランツ・ブランド、パウル・シュトラーゼ、ランディ・ヴァレリアンの五名となった。無論、最後に現れた人物が、ランディ・ヴァレリアンである。

「よく、お越しくださいました」

皇帝フリードリヒ・リヒャルトが、ベッドの上に半身を起こし、ランディ・ヴァレリアンを迎えると、それを見たフランツ・ブランドとベルンハルトは、二人ともそれぞれの驚き方でその光景を見つめた。

ランディ・ヴァレリアンの方は、意に介さず、

「……構わぬ、が、そなたが倒れたことは予想外のことであつたな  
……」

と、のみ言つた。

「父上！ 何故このようなものに！」

二人の中で、より動揺したのは、無論、皇太子であるベルンハル

トであつた。皇太子である自身の、唯一人の上位者にして唯一の絶対者である父が、病床にあつて尚、出自も解らぬ軍人に恭しく接するのだ。まして、この場にいる者は、医師であるパウル・シュトラーゼを除けば、皇帝と、その地位を継ぐにたる一族のみのはずである。彼にとつては、まさに理解の範疇を超える出来事だったのだ。

「何故、ではない。このお方こそまぎれもない、真の初代フリードリヒ陛下にあらせられるのだ」

憔悴した現皇帝の言葉に、当のランディ・ヴァレリアン以外は、さすがに皆、息を飲んだ。だが、一瞬の間をおいた後の反応は、三者三様のものではあつた。

パウル・シュトラーゼは瞳を輝かせて納得し、フランツ・ブランドは興味を失い、ベルンハルトは呆然とし、震えている。

「嘘だ！」

ベルンハルトは、冷酷かつ酷薄な仮面を脱ぎ捨て、激情に駆られ叫んでいた。「このままでは、皇太子の立場を失い、皇位をあの男に奪われる」という考えが、瞬時に全身を駆け巡ったのである。

「騒ぐな、皇太子殿下。嘘か本当かは、陛下とそのの、ランディ・ヴァレリアン……でいいか？ に聞けばわかることでしょう。」

それにしても……ヴァレリアン、アウラーときて、今度はフリードリヒ大帝とは……まったく忙しいことだな」

静かに、だが厳然とフランツ・ブランドは言った。普段は自分が真つ先に騒ぎ立てるのだが、このように誰かが先に激情に駆られた場合、逆に冷静になつてしまうのである。

それにしても、ランディ・ヴァレリアンという人物に対しては、幾度も驚かされる。不信と信頼、好意と悪意の入り混じった感情を込めて、蒼氷色の瞳を向けた。

「まさに、その通りだ。私も正直、忙しさで目が回るよ、フランツ。……さて、苦しいだろうが、我が愛する子孫達に事の経緯を説明してくれぬか？ リヒャルトよ。卿の説明がなくなれば、彼等は私の立場を納得してくれしそふもないのだな」

フ란ツ・ブランドの言葉と思いは薄く微笑んでかわし、フリードリヒ・リヒャルトに視線を向けると、ランディ・ヴァレリアンは言った。その言葉ほどには皇帝の身を案じている訳では無さそうであつたが、それでも、皇帝に言葉を促す効果はあつたようである。

そして、皇帝は彼を初代フリードリヒと認めるに至つた内容と経緯を語つた。また、その場にパウル・シュトラーゼを呼んでるのは、自身の治療の為と、厳然たる証拠として、かつて得た初代フリードリヒの遺伝情報と、現在のランディ・ヴァレリアンのそれとを比較した結果を提示する為だとも告げた。

「では…… よろしいでしょうか？」

フリードリヒ・リヒャルトは、ランディ・ヴァレリアンに、問う。  
【血の継承】に関する科学的根拠を、この場の人間に示す許可を求めたのだ。

「構わぬ。そうでもしなければ納得をしない者もいそうなのでな…

…シュトラーゼ博士、検査の結果を示してくれ」

ランディ・ヴァレリアンも、明確な証拠を必要とする理由は、理解していた。ここに至つて、自身の秘密を隠し立てする必要などないのだ。

「は、では…… まず、我々にはDNAと呼ばれるものがあります。それは遺伝子、つまり我々の肉体を構成する要素でございまして、通常、アデニン、チミン、グアニン、シトシンと呼ばれる四つの塩基から成り立っており、また、それらは螺旋を描くように連なり、その内部に我々を我々たらしめる情報を構築してゆきます。ですが、皆様方には、もう一種類あるのです。それを仮に我々は『フリードリヒ』と名づけました。これは、連なつた螺旋の内側に、直線を描くように配置されております。

すなわち、【血の継承】の科学的根拠とは、五つ目の塩基配列についてであり、そのパターンにこそ現れるのです。

通常、何事も無い状態の皇族の皆様にある五つ目の塩基は、そのヌクレオチド配列に対し何ら干渉せず、「無色の直線」と言って良

い状態を維持します。ですが、ひとたびその中に別の人格を取り込むと、その直線の内部に、取り込んだ人格の塩基配列を模した……縮小版とでも言うべきパターンを描き出します……結論としましては、データとして先帝の第五塩基の内部配列と、アウラー閣下の第五塩基の内部配列は、まだ、一部しか抽出しておりませぬが、完全に一致しておりました……ですが、一部であれ、完全に一致する確率など天文学的に低く……つまり、閣下がフリードリヒ陛下である事、科学的見地からも間違はなし、と言えましょう」

ここまで一息に説明を終えると、パウル・シュトラーゼは、大きく息を吸った。それから側に置いた鞆から資料を人数分取り出し、手渡してゆく。

「これが現在までに解析しましたヌクレオチド配列の対比でございます、むろん、一部ではございますが……」

だが、その一部ですら、A4用紙にして百頁にも及ぶものであった。フランチ・ブランドはそれを受け取り、一応、申し訳程度に目を通した。しかし、すぐに眉をしかめて、諦めたようにパウル・シュトラーゼに返した。

「おれは信じるよ。こんなの読んだってわからないし、何より陛下が申される事に対し奉り、臣下のおれが異論を唱える訳が無い……大体、おれ自身がこの状態なんだ」

ベルンハルトも、父の言葉に加えて動かぬ証拠も見せられては、反論の余地など無い。資料と父とランディ・ヴァレリアンを順番に見つめると、無言で資料をパウル・シュトラーゼに返した。

「そういう事だ、ベルンハルトよ。予は偽者であつたのだ。ゆえに予の死をもって、皇帝の大権をフリードリヒ陛下にお返ししようと思う。また、フランチよ……そなたも一族ゆえ、そのことを承知しておいて貰おうと思い、ここへ呼んだのだ……」

周囲の者が見守る中、現皇帝であるフリードリヒ・リヒャルトは、静かに、自らの罪を裁くかのように、宣言した。



## 黒の章 13

皇帝フリードリヒ・リヒャルトによる即位から現在に至るまでの簡単な経緯の告白が終わると、再び室内には暗い静寂が訪れた。

パウル・シュトラークは、当時、助手だったとは言え、【血の継承】の失敗に関する責任の追及をされるのではないかと、所在なげな瞳をフランツ・ブランドに向けていた。無論、その責を追求された場合、フランツ・ブランドには庇い立て出来るものではないのだが、この場にいる誰よりも、彼にとっては信頼出来る味方である事は確かであつたのだ。

皇太子ベルンハルトは、瞼を閉じ、腕組みをしている。内心はどうであれ、その表情からは動揺を伺い知る事は出来ない。

「……そのような事情であれば、私が皇太子の席を譲る事もやむを得ますまい……」

そして、静かに、理知的に言った。

ランディ・ヴァレリアンとの年齢差を考えれば、次の次、という事も考えうる。今の権力を失う事さえなければ、ベルンハルトにとって失うものは無いのだ。焦る必要はない、と、自分に言い聞かせた結果のことである。

「ふん。リヒャルトの思いはともかく、私が今更皇帝にならねばならぬ道理はない。それに、私としては、とりたてて皇位を欲している訳でもない。ベルンハルトよ、卿が皇太子ならば、そのまま帝位は継ぐが良い。そのことに関して、私は何ら問題を感じぬ……ただし」

相手を推し量るように褐色の瞳をベルンハルトに向けて、ランディ・ヴァレリアンは言う。

「ただし？」

「ただし……私の命が尽きる時は、卿に対して【血の継承】を行うこと。それと、大陸の統一を目的とした国家運営を約束すること。」



最後に、私が皇帝ではなくとも、一族の長であることは変わらぬ、という事を常に意識しておく事、だな」

ランディ・ヴァレリアンの提案は、ベルンハルトにとって難しいものではなかった。第一の条件は、そもそも覚悟していたもので、時期が先延ばしにされるだけの事。第二の条件は、そもそもその目的の為に行動しているのだ。先に父との意見の齟齬があつたとは言え、目的そのものに関しては一致しているのだ。第三の条件のみ、自身の行動に掣肘を加える可能性があるが、今、この場でその条件を飲まねば帝位を継ぐ事は叶うまい。

「は、お約束致します」

静かに頭を下げ、ベルンハルトは即答した。もはや、それ以外の選択の余地は無いように思えたのだ。

「よいな、リヒャルト……」

「はっ……愚息で帝国を守れますならば、私には異存があるうはずもございません」

それらのやり取りを聞くとはなしに聞かざるを得なかったフランツ・ブランドは、欠伸をかみ殺していた。所詮、誰が帝位についたところで戦争継続の方針は変わらない。あるいは自らが皇帝にでもなれば変わるかもしれないとは考えたが、序列で言えば、ベルンハルトがいる以上、自分に回ってくる事はないのだ。

だが、そこまで考えて、フランツ・ブランドは欠伸をかみ殺す必要を感じなくなった。今まで持ち得なかった黒い思考が、自らの内部に鎌首をもたげてきたのだ。

（ベルンハルトがいなければ、おれはこの国を変えられる）

元々、氣に入らない従兄弟である。殺したところで、何ら痛痒を感じる事もないであろう。そう思い、ベルンハルトのくすんだ金髪を蒼氷色の視界に入れたとき、ふと我に返った。

（だからといって、殺してよいものでもない……誰かを殺すことで誰かを救うなど、それこそ初代フリードリヒの考え方と何ら違いがないではないか！）

「ところで、帝位の継承については変わりなく、ということの良いとして……西部戦線に関しての対応を早急にしないとまずいのではないですか？」

一度頭を振ると、力強くフランツ・ブランドは言った。周りはその音楽的に美しい声の主に対し向き直り、うなずく。

「手は、打ってある」

ベルンハルトが手を上げて即答した。

「戦線が崩壊していると、聞いているが……？」

眉をしかめたフランツ・ブランドが、さらに問う。

「崩壊している……と、キーエフの連中に見せかけているのだ。私の作戦指導の下、西部戦線における全軍を戦略的に撤退させている。すなわち、擬態、だ」

薄い唇を片方だけ釣り上げて、ベルンハルトは微笑した。自信があるときの彼の仕草だが、フランツもイレエネも、この表情に対しては嫌悪感が覚えない。

「ふん、確かに我が領内深く敵を侵入させ、補給線を伸びきらせてから叩けば我が軍の損害は少なく、敵の損害は甚大であろうな……だが、占領したてのベネルクスと、新領土の多くを戦わずに放棄するのだ。そこに住む民はどう思うであろうな……」

昔日の面影とてなく、掠れた声でフリードリヒ・リヒャルトは息子の作戦に対して否定的である事を示した。戦略的に正しく、戦術的に圧倒的な勝利をいかに収めても、政略面で失敗したのでは全てが覆るのである。

「ふふ……まあ、よからう。すでにベルンハルトが全軍をほぼ掌握し、作戦の指導をしているのだ。遠い将来のことはともかく、近い将来に起きるであろう戦略的圧倒的な勝利は、確かなように思える。ここはおとなしく次代の皇帝の手並みを見せてもらおうとしようではないか……」

やはりその表情からは内心の読み取れないランディ・ヴァレリアンが、そう言った。だが、声は僅かだが好意的な響きがある。彼に

とって、この作戦は好都合であつたのだ。

フリードリヒにとっては、統一、支配、統治は切り離せぬものであつても、ランディ・ヴァレリアンにとっては、統一、自由、革新こそが目的なのだ。ベーゼルが支配し難い状況を自ら望んで作るならば止める事はない。その意味では、フリードリヒの意思に忠実で、かつ有能過ぎたリヒャルトよりも、フリードリヒの意思に忠実であつても、有能過ぎないベルンハルトの方が扱いやすいとふんだのである。

だが、フリードリヒ・リヒャルトは別の解釈をしていた。初代フリードリヒが、息子の手並みを見ると言うのなら、どのように転んだとして、「彼の手に余る事態にはなるまい」と、考えたのである。思えば、長い年月を生きた初代フリードリヒである。僅か数年の事でそれほど慌てるはずもない、そう結論付けたのであつた。

フリードリヒ・リヒャルトは、唯一つの事柄を見落としていたのだ。それは、フリードリヒの内部にランディ・ヴァレリアンという男がいるのではなく、ランディ・ヴァレリアンの内部にフリードリヒが捕らわれている、という可能性である。

「……では、ベルンハルトよ。これからは予の名代として、名実ともに全軍の指揮をとれ。委細は全てまかせよう」

「はっ……父上のご期待に添えますよう、努力いたします」

父は、息子の姿を見ることなく言葉を発した。答える息子は、形式的に父を見つめるが、そこに愛情の存在する余地は無いようであった。

「なるほど、な。まあいい、おれは戦闘機乗りとして出来る限りの事をさせてもらいます。さて、用事が以上ならば、訓練があるのでこれで失礼させて頂きたいのですが……」

二人の様子を眺めつつ、これ以上この場にいと余計なことに首を突っ込む事になりかねないと考えたフランツ・ブランドは、一人そそくさと退出する準備を始めた。

「さて、フランツ……」

「は？　なんででしょうか、陛下」

「ベルンハルトに万が一のことがあった場合、我等の血を継ぐのはそなたのみ……くれぐれも無理をするな……」

「は……」

我が子に対する時とは違い、フリードリヒ・リヒャルトはその瞳に、僅かながら慈愛の色を湛えている。理由はさまざまなものがあるのであるが、彼は、フランツ・ブランドにこそ、若き日の自らの姿を重ねていたのかもしれない。二度と還る事の無い昔日の輝ける日々……。あるいは、それは羨望であるかもしれない。

事実としてフランツ・ブランドの今までの人生がそこまで輝かしかったかどうかはともかく、疲れを知らぬ太陽のように、誰がみても、フランツ・ブランドは無尽蔵のエネルギーを発散しているかのように見えたのである。それは、今、命を尽きさせようとしている男にとつては、あまりにも眩しい姿であったのだ。

「では、失礼いたします」

だが、どのように思われたところで、フランツ・ブランドには関わりの無い事である。豪華なベッドと、そこに横たわる皇帝に丁寧な敬礼を向けると、早足にドアの方へ向かった。正直なところ、ランディ・ヴァレリアンの真相にも驚いたが、ベルンハルトの舐める様な視線に耐えかねての事であった。

「あ、フランツ殿下」

そのとき、状況を察したパウル・シュトラゼが悲鳴のような声で呼び止めたが、やはり、フランツ・ブランドの退出を止めることは出来なかった。

彼にしてみれば、この状況のなか、唯一の味方を失ったようなものだ。さりとて、医師という立場上、退出は許されない。

「……ああ、そうそう、シュトラゼ博士……ヴァイス・シュツルムの増産は順調か？」

ランディ・ヴァレリアンは、フランツ・ブランドが退出すると、思い出したようにパウル・シュトラゼに聞いた。だした。

「はい……すでにナント方面に運ぶ分量は完成し、さらに備蓄を進めておりますが……それにしても、あれほどの分量をナント方面でどのようにお使いになるのでしょうか？」

パウル・シュトラークとしても、心楽しい内容ではないとは言え、重い沈黙よりは沈む会話の方がまだマシである。質問に答えるとともに、僅かの好奇心を疑問系にしてランディ・ヴァレリアンに質問を返した。

皇室の秘密を握る存在の長たるパウル・シュトラークは、すなわち帝国随一の遺伝子工学の権威であり、それはすなわち、第五の染色体を元に開発された兵器であるヴァイス・シュルムの生みの親である事をも意味していた。生みの親としては、わが子の行く末が気にならないと言えば嘘になるのである。

「ふふ……それは、卿には係わりの無い事だ。いや、関わらない方がよかるう……」

ベルンハルトとリヒャルトの二人を交互に見つめて、ランディ・ヴァレリアンは言うと、先ほどフランツ・ブランドの後を追うように退出した。

「私も隣室に控えておりましょうか……」

ようやくこの重苦しい空気から逃れ得る機会が来たとはかりに、パウル・シュトラークは内心に喜色をみなぎらせた。だが、それがいささかでも表面に現れてはいけないのだ。その声は出来るだけ鎮痛に、か細く、静かに発した。

「うむ。そうしてくれ。予は、今まであまりに我が子と向き合う時間が少なかった。せめて、今日からの残された日々は、ベルンハルトと向き合う時間を多く持ちたいものだ……」

「は……私も出来る限り、父上のお側にいようかと存じます……」  
父は子に、最も伝えなければいけないことを伝えそびれていた事を悟っていた。それが無ければ広大な帝国をまとめる事も、導く事も出来ないであろう事も。だが、それでも、時間の許す限り伝えねばならなかった。

子は父に、何も求めてはいなかった。なにを求める事もなく、あらゆるものが与えられる人生を歩んできた彼にとって、近い将来、帝位が与えられるのは当然の事であり、それが自分自身の存在価値だと確信していたのだから……。

一週間後、フリードリヒ・リヒャルト・フォン・ベーゼルは、六十二年の生涯を閉じた。その治世は二十五年。歴代皇帝としては、四番目に長い治世であり、その功績は、重工業を起こし、科学分野を目覚しく発展させ、国内に鉄道網を敷設し、戦争をすれば常勝という、まさに非の打ち所のないものであった。おそらくその才能においては初代フリードリヒをすら凌ぐものを持っていたであろう。ただ、惜しむらくは、自らの家系を絶対視し、初代の魂を引き継げなかったという一点のみに精神を苛まれ、その寿命を短くしたとも言えた。

そして、この彼の崩御こそが、後世、「ベーゼル帝国の終わりの始まり」と呼ばれる事になるのであった。

## 黒の章 14

フリードリヒ・リヒャルトの国葬が、戦時下とは言え盛大に執り行われ、ついでフリードリヒ・ベルンハルトの即位式典が慌しく執り行われてからすでに一月以上が経過し、暦の上では三月も後半に入っていた。帝都ヴァルリアも、その短い春が、足音程度は聞こえてきた頃である。

太陽は天空にあり、青空に浮かぶ雲は心地よく、吹き抜ける風は、滑るように人肌を撫でる。そんな清々しい帝都の石畳が敷かれた街路を、軽快な足取りで歩む金髪碧眼の美女がいた。

彼女は、その足を一軒の白い建物に向けると、律動的な動作でそのドアを開ける。

「ご注文は何になさいますか？」

彼女の足を向けた先は、ヴァルリアでも有名なカフェ兼バーである。昼間はコーヒーとザツハトルテが名物で、夜になると淡色ラガーとクヌスポリツゲ・シュヴァインツハクセの組み合わせが絶妙だと、近隣の人々に舌鼓を打たせている店である。

「黒ビールとクヌスポリツゲ・シュヴァインツハクセ」

彼女は、何の臆面もなく、昼間から黒ビールとビールのつまみとして、濃い味付けの焼いた豚のすね肉を注文すると、店内に置かれた観葉植物を避けて、奥まった席に座る友人に声をかける。

「よお、シュトラーゼ博士、まったか？」

「いえ、それほどでも……イレーネさん」

律動的な美声で声をかけてもらえるのは男冥利に尽きるものだとパウル・シュトラーゼは思ったが、それにしても、大声で名前を呼ばれるのは辟易する。便宜上、女の姿なので「イレーネ」と呼ぶことにしているが、これでは「イレーネ」本人の評判を落とす事になる、と、いずれ忠告してやらねばなるまい。

「すまないな、聞きたい事があつて呼んだんだけど……」

そう言いつつ、フランツ・ブランドはパウル・シュトラーゼの前に置かれた皿のアプフェルキュヘルに手を伸ばした。目的は、その一つをつまんでかじる事で、達成されると、また元の皿に戻した。「どんなことでしょうか？」というより、食べたければご自分でも注文されれば良いでしょう……」

「や、一口食べたかったただだ。小腹がすいたし、それに、これ、好きなんだよ！」

フランツ・ブランドは、指についた油を舐めながら答えた。子供の頃から、リングに衣を着けて揚げた、このアップルフライが大好きだったのだ。ビールには合わないので注文をしなかったとは言え、目の前にあれば手を出さざるを得ない、というのが、その言い訳の全容であった。

「ああ、そうそう。聞きたかった事っていうのは……ランディ・ヴァレリアンの事についてなんだが……いや、今はフリードリヒ陛下と言ったほうが正しいが……」

フランツ・ブランドにしては珍しく、言葉を探すように、ゆっくりと話す。

「はい」

「シュトラーゼ博士は、いつから彼が、おれと似た様な境遇だとしっていたんだ？」

「はあ……まず、殿下の元をアウラー閣下がお尋ねになられた日の事を覚えておられますか？ その日に、閣下がご自身の血液のサンプルを検査するよう、私に依頼されました。内容は『内密であるが、私も皇族であるゆえ調べる必要がある』とのことで。もちろん、詳細につきましては部下に一任いたしましたので、逐一そのデータを追う事は出来ませんでした。それでもベネルクスに行く前には、先帝陛下より直々にアウラー閣下の血液と先の皇帝陛下との関連性を纏めた資料を作るように、とのご命令を頂いておりました」

「じゃあ、なんでおれに教えてくれなかったんだ」

「それこそ、国家を揺るがすようなことです。私の一存では、誰で



あれ、言えるようなものではありません……ただ」

「ただ……？」

「その、関連性を纏めた資料を作ってゆくうちに、私は一つの確信を得てゆく事になりました……つまり、フリードリヒ・リヒャルト陛下の時の【血の継承】は失敗していたのだ、と。だから、今までそのときの詳細なデータは記録される事もなく破棄されていたのだ、と」

「あ、ところで、逆に私の方も聞きしたい事があるのですが……というより、可能ならば頼みたいのですが」

「なんだ？」

「……ヴァイス・シュツルムが大量に増産され、ナントの基地に輸送する、というのはあまり心躍る話ではありませんが……おそらくはスクラン方面に使う予定なのでしょうが……出来れば使用は思いとどまって頂きたい。そう、軍に働きかけていただけませんか？もしも直接陛下に具申しして頂けたら……」

「……ヴァイス・シュツルム……おれもあの兵器を使うのは反対だ。だが、おれが軍に働きかけても所詮は一大佐の言い分に過ぎん、陛下に具申するのは、今のおれの姿では、まったくもって気がすすまん……まあ、何か手は考えるが。」

それにしても、なんだって前がヴァイス・シュツルムの件で気に病むんだ？」

「実は、アレは……皇族の皆様の血液やDNAを研究する過程で生まれた毒素なのです。つまり、殿下は、その血液型に順じて他の人間の血液を輸血する事が出来ますが、反対の事をすれば、された人間は死に至るのです。それは、塩基よりもっと大きな血液中の物質なのですが……初期はそれこそが記憶の伝達を可能にする物質として注目し、応用が可能ではないかと……むろん、最初は我々も平和利用の為に研究を進めました。ですが、それを軍部におられる皇族の方が注目され、生物工学局を創設し、私の元部下であり、友人である者が局長となり、ついに現在のヴァイス・シュツルムを完成

させた、という事です。また、その極秘性ゆえに、その製造、研究に当たる人物は極限られた者であり、私も研究過程から携わっておりましたので……

さらに付け加えるならば、ヴァイス・シュツルムとは、皇族の方には一切効果はございません」

話の内容が深刻さを増すのと反比例して店内は喧騒を増してゆく。丁度、昼食時である事もあるであろう。そこに、やはり昼食時にはあまり似つかわしくない、さきほどフランツ・ブランドが注文した黒ビールが、芳醇な香り共に運ばれてきた。

「なるほど…… 結局のところ、あの時、あの場でおれは、助かるべくして助かった、ということか」

黒ビールを一息に飲み干して、ウェイトレスの目を白黒させると、フランツ・ブランドはすぐに二杯目を注文し、苦い過去について述懐した。

「そういう事ですな。こと、ここに至って、殿下に隠し立てをしても始まりますまい」

「ベーゼルの血というものは、罪深いものだ…… なあ、シュトラーゼ博士。お前は、ヴァイス・シュツルムの使用に反対なのだな？」  
「無論です。このような事を言えば不敬にあたりますが…… 私が皇族の皆様の血液に興味を持ったのは、皆様方の血の中にある不死性そこには、かのヴァンパイア伝説を彷彿させるロマンがある。もしかしたら、肉体もその滅びの定めから逃れられるのではないかと。だが、ヴァイス・シュツルムはちがうのです。そこから生み出された、ただの【死】そのものです。」

つまり、私の求めているものは、【不死】すなわち【永遠の生】。だが、アレはその真逆です。だから、出来うるならば、無くしたい」  
パウル・シュトラーゼの瞳には、真摯な色がある。唯一、本音を話せる、最高権力者に最も近い者であるフランツ・ブランド。ヴァイス・シュツルムが完成し、その効果がベネルクスにおいて発揮された今、彼に事情を説明し、ヴァイス・シュツルムの使用を思いと

どまらせる、という事だけが、パウル・シュトラーゼにとって良心の呵責に耐えうる唯一の手段に思えたのである。

「わかった。スクランでアレが使われることは無い。おれが保障する。どのような手段を講じても阻止しよう……ただし」

「ただし？」

「どのような事であれ、可能な限りおれに協力してもらう」

一度だけ瞳を閉じ、もう一度開かれたフランツ・ブランドの蒼氷色の瞳は、静かな決意を湛えていた。

「はい」

真正面からフランツ・ブランドの瞳を見据えるパウル・シュトラーゼもまた、固い決意を持って望む。

図らずも、彼等二人は今後、国家という枠組みを外れようと決心していたのだ。

「シュトラーゼ博士……おれは近頃思うんだ。正義というのは罪を重ねすぎた勝者の言い訳に過ぎないのではないかと。もちろん、負ければ言い訳を言う機会さえ失うのだからどうしようもないが……だがな、このベーゼルという国は罪を犯しすぎたと思う。だから言い訳もとんでもないものが必要なんだ。そして、自分の言い訳に、いつの頃からか飲み込まれて、やって良いことと悪い事の区別もつかなくなっている……」

「私は、科学者であり医者です。私にとっては人が生きること正義であり、それ以上の正義はありません。ですが、私の研究で多くの罪無き人が傷つき倒れてゆく。それが国の為だとして、そんなものは言い訳にもならないのです。ただ、それでも私は死ぬのが怖い。研究は続けたい」

「……あははは！ まあいい、今は深く考えるな。お前は一つおれに大切なことを頼んだ。それがお前の、その人生に対する精一杯の言い訳だったろう？ これ以上自分を責める必要はないさ」

二杯目のビールとクヌスポリッゲ・シュヴァインツハクセがフランツ・ブランドの前に運ばれてくると、パウル・シュトラーゼもウ

エイトレスに黒ビールを注文した。

「いいのか？ 勤務中だろう？」

フ란ツ・ブランドは陽気な表情にもどり、唇をゆがめておかしそくにパウル・シュトラーゼに詰問した。

「たまには、良いのです……」

昼食時、初老の紳士と金髪碧眼の美女が黒ビールを片手にクヌスポリツゲ・シュヴァインツハクセを囲む宴席は、僅かながら周囲から好奇の視線を集めたが、幸いな事に誰も追及するものはいなかった。

## 黒の章 14（後書き）

黒の章も佳境です。

説明ばっかりの話ですみません。

キーエフ共和国は、西の国境はバーゼルに接し、東の国境は、はるか果ての大洋に接する、世界最大の領土を持つ国家である。便宜上、キーエフ共和国と呼ばれるのが通例ではあるが、本来、その正式名称はキーエフ共和国連邦となる。それは、その前身であるキーエフ帝国がその国内に、数多の大公国、公国を抱えており、それらもキーエフの革命に際して小さな革命を起こし、結果、キーエフ共和国に追従する道を選んだからであつた。

だが、問題はそれらの小さな国々が、やはりそれぞれ独自の小規模な軍隊を持っていた事に起因する。共和国初代大統領アラム・バラネフは、中央集権こそ国家の取るべき道筋と考え、中央政府主導による迅速な国内改革に乗り出そうとしたとき、バーゼルとの戦火に巻き込まれたのである。中央政府の直接指揮下にある軍隊は、強大であるとは言え、その国内に抱える軍事力の六割程度に過ぎなかったのだ。ゆえに、最前線に兵力を向ければ向けるほど、国内の軍事力を背景とした小国家群に対しての指導力が低下するのだ。

「すまん、ゲオルギー……」

キーエフ共和国の首都、タリツアにあるキーエフ共和国大統領府、新築されたばかりの無骨なコンクリートで作られた六階建ての建物の一室で、その全軍を指揮べき大統領、アラム・バラネフが、陰鬱そうな表情を抱え、そう言った。

「いや、二つに一つだったのだ……わかつている、やむを得まい」

大統領執務室というには、そこは簡素な部屋であつた。元々、未だ革命が終わつたとは思っていないアラム・バラネフとゲオルギー・マレンコフである。この大統領府は、仮のものであると考えていた。無論、政府として国内を統治する為の全ての機能は備えているが、逆に言えば、それ以上のものは、まったくないと言つていい。

彼等二人が向かい合つて座るソファも、バーゼル人であれば、中

流家庭でもそろえられる程度のものであった。

「ああ……無念だ。国内に反乱を招くよりは、不平分子もろともベールゼルにぶつける方がよからうと考えたが……」

三月も中旬を過ぎているが、タリツアにはまだ春は来ない。晩冬の風が執務室の窓を僅かに揺らし、寒々しい音をたてた。空も厚く暗い雲が覆い、このキーエフの未来を暗示しているように見えた。

「……戦局は、日々悪化しているようだな」

一度、窓の外に目をやると、午後二時だと言うのに灰色から黒に変わりかけたような暗さを見て、ゲオルギー・マレンコフは、つまらなそうに口を開いた。

「ああ……撤退もままならぬ。こちらからの補給物資も届かぬようだ……せめてもの救いは……ゲオルギー、お前が帰ってきてくれた事だけだ」

「ふん……もう、私には人質としての価値も無くなったという事だろう。どちらにせよ、我が国の敗北はもはや……避けられんな」

「だが、どうせ敗北するならば、せめて、少しでも有利な条件が欲しい。なにか手は無いか、ゲオルギー？」

アラム・バラネフはすぐるような視線をゲオルギー・マレンコフに送る。昔から、困ったことがあると、彼はゲオルギー・マレンコフの知恵を頼るのだ。

アラム・バラネフは、自分自身の足りない部分をよく知っていた。合理的ではないのだ。だが、だからこそ、カリスマ性を保てたとも言えた。その点、ゲオルギー・マレンコフは真逆であり、合理的過ぎるあまり、皆、その正しさを認めたとしても、あまり好かれる事はなかったのである。

「あらゆる権利を放棄して、私たちの命を投げ出して、出来てせいぜいが国体の護持……フリードリヒ・リヒャルトが亡くなったとは言え、ベールゼルはそこまで甘い相手ではあるまいよ……」

ゲオルギー・マレンコフは、深い溜息を吐き出すと、瞼を閉じて僅かの時間、追憶にひたった。

キーエフ共和国がベネルクスに侵攻した、という情報をゲオルギー・マレンコフが得た時、彼は未だローテンブルグ宮殿の壮麗な客間の一室を占拠する事を許された立場であった。それは、実質的な交戦国のナンバー2に対しては格別の配慮であり、同時に、万が一の場合は即座に人質になる事も意味していたはずだ。

だが、幸いな事に尋問される事もなく、ましてや拷問される事もなく、彼は無事、五週間後には本国への帰途につく事が可能となったのである。その理由は、「新皇帝フリードリヒ・ベルンハルト・フォン・ベーゼル即位による恩赦」、との事であった。

無論、交戦中のこと、いかに恩赦であろうとも簡単には移動することなど出来ない。ゆえに、恩赦による捕虜の解放となり、その流れで二日間の停戦があったのだ。その間に、キーエフ共和国の捕虜を取りまとめる役として、奔走し、同時にその捕虜達と共に帰還することが可能になったのであった。

しかし、疑問は残る。新皇帝が即位するためには、先帝の崩御が前提条件となるのだ。フリードリヒ・リヒャルトは六十二歳とはいえ、身体は壮健であり、突然死するとは考えにくい。また、その壮健な肉体をもつてして死に至らしめられるほど衝撃的な出来事があったとすれば、一体何であろうか？

キーエフ共和国によるベネルクス侵攻、その次にベーゼル皇帝の死、新皇帝の即位、そして恩赦。

ゲオルギー・マレンコフは、目に見えぬ系に自身が操られているのではないかと、ふと思ひ、背筋に悪寒が走るのを感じた。

「どちらにせよ、ベネルクス開放より三ヶ月。一時期はベーゼル本国の国境付近まで進撃したものの、今となつてはそのベネルクスの維持すら困難となっている。

そうそう……捕虜交換の折は、我が軍の勢いに押されたベーゼルが、苦し紛れに和議を求めてきたのだと軍の高官どもはほざいていたが……いざ、いまここに至れば、なぜあの時、マレンコフ長官に任せて講和をしなかったのかと、もはや防衛作戦をそっちのけで俺



に対する批判と、お前に再度、講和の交渉に行かせるようにと、不可能な事ばかり言っているぞ」

アラム・バラネフは、ゲオルギー・マレンコフの黒い瞳を真摯な眼差しで見つめながら、この長年の友人に愚痴をこぼした。

彼等二人は、世間が噂をするような対立関係にはないのである。革命戦争を共に指導し、その間の寝食を共にした仲間なのだ。たとえ政治的な方針が一時違つていようと、私心など抱かぬ事は互いが認めるところであり、ゆえに、それが原因で友情が壊れることなどないのだ。

「だからといって、今さら……だ。私がここに帰還できたのも、戦後に私を処刑するためだろう。あるいは……」

「あるいは、俺と争わせる為……だろ」

「そうだな……アラム……」

「その手は食わんよ……と、言うより、争う程の余裕すらない……だが、なあ、ゲオルギー、頼みがある」

神妙な口調で語る友人の表情を見つめたゲオルギー・マレンコフは、そこにある種の決意を見出していた。出来れば、聞きたくない部類の頼みなのである。だが、死を覚悟した人間の頼みは、彼には断れそうもなかった。

「なんだ？ 私に出来る事なら聞こう」

「次の大統領になつてもらいたい……そして、国民を一人でも多く救ってもらいたい」

アラム・バラネフの口調は厳然としている。しかし、その中には悔恨と無念が滲んでいる事は、長年、共に道を歩んできたゲオルギー・マレンコフには痛いほどよくわかった。

「……なるほど。君は、いつ死ぬ？」

「我が国の国境をベールゼルに越えられたら、我が軍は瓦解するだろう……そのあたりで引責という形が良いと思う。それと……これは俺の我が侭だが……出来れば俺の死体は誰の目にもふれないよう、ゲオルギー、君に処理してもらいたい」

「……良いだろう。それにしても、昔から君は、私に嫌な仕事を押し付けてばかりだな。私とて、絞首刑になるよりは、自ら死を選びたいものだ……」

「すまない……これが最後の我が侘だ。穏健派である君にしか出来ない仕事だ。頼む」

「わかった、いや、わかっていた。私もそれを君に提案するつもりだったのだ……」

もはや、止める事も、止まる事も、ゲオルギー・マレンコフには出来なかった。それはアラム・バラネフとて同じであり、もはや選択の余地は無かったのである。

二人で始めた民主化の為の革命運動。帝国を滅ぼし、新しい国家を作った。だが、その全てが浸透する前に、別の帝国に滅ぼされる。アラム・バラネフは自殺する。私は処刑される。ゲオルギー・マレンコフは、友人の死も、自身の死も、革命をはじめた時にはすでに覚悟していた。そして、大勢の命を犠牲にして歩んだこの道が、ただ、己の死のみで償えるとも思っていない。だが、それでも、志半ばで死なねばならない友と、自身に対して、哀れみの感情が沸くことを押さえる事が出来なかったのである。

「自己憐憫か……」

まさか自身にそのような感情が沸くとは考えてもいなかっただけに、ゲオルギー・マレンコフは、動揺しつつ、自嘲した。

「私も、いよいよ本当の意味で終わりだ」と。

その日、アラム・バラネフとゲオルギー・マレンコフの二人は、別れる直前に、最後の握手を交わした。これ以後、二人は公務で幾度かの会話を交わすが、この件に関して話す事は二度となく、だが、ゲオルギー・マレンコフは、このときの約束を忠実に守り、アラム・バラネフの名誉を傷つけることは一切無かったのである。

## 黒の章 15（後書き）

この話は、入れるべきか入れないべきか、悩みました。  
でも、とりあえず滅ぼされる側の気持ちも書いてみたので……  
いずれ、修正するか、消去するかもしれませんが……  
というか、文章の修正はちょこちょこしますが……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0445d/>

---

限りなく澄んだ空に向かって

2011年11月11日10時10分発行